明治四十年五月十五日增刊（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可

花仲里

女子文壇定期增刊



第三巻第七號

杜鵑一



三宅克己先生筆

女子文壇

第參卷第七號　花ゆり　夏期增刊

○乙種一等賞絹張洋傘　當選者　乳しぼり（短文）……白旗清子

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を淩ぐ制酸劑（即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさゑムヂスカシ的舊式賣藥）のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓つて根治**し胃腸を健全にし消化機能を强壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雑多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢◎貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵劵代用貳割增し

新輸入美容料

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女の間に最新流行の發明藥にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雑多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓七拾錢

以上貳藥專賣元　東京市神田五軒町十九番地　**日新館藥房**（電話下谷五四六番）

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓卄錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

醫療醫藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卄錢着金即刻送藥す郵劵代用必ず二割增の事

以上貳藥專賣元　東京市神田五軒町十九番地　**日新館藥房**（電話下谷五四六番）

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

明治卅四年十月創刊

每號皇太子殿下下賜上覽

▲天下無双青年筆戰雜誌之覇王 大判百三十頁

第七卷 青葉若葉（増刊四月廿日發行） 第十一號（五月十五日發行） 第十二號（六月一日發行）

秀才文壇

◁正價表▷

一冊郵税共金拾壹錢○六冊同六十三錢○十二冊同壹圓廿錢○廿六冊同二圓卅四錢

每月二回 一日 十五日 發行 定期増刊二回

▲壇友之優待每號獎學大懸賞付

▲每號選評擔任大家▼

○敍事文……文學士 中内蝶二
○抒情文……同 上
○短篇小説……徳田秋聲
○俳句……高濱虚子
○新體詩……馬場孤蝶
○新派和歌……文學士 尾上柴舟
○和歌……佐々木信綱
○漢詩……小笠原虚舟
○評論文○日用文○五行文學○人物評論○文士會（以上編輯局選評）

少年少女作文雜誌

日本少年 第二卷五號

少年文壇 ○普通文○日記文○はがき文○和歌○俳句○お笑草○新考物○友達會○筆蹟○スケッチ

正價 一冊がたつた金五錢 六冊郵税共金廿七錢○十二冊金五十四錢（郵券代用一割増）

▲每號少年習畫帖 山中古洞先生 吉木雅美先生 執筆を附録とせり

少年之友

五月一日發行

●五月人形……記者
◎菖蒲の話……園丁生
◎ぼくの日記……ぼく生
◎皆さんから皆さんまで……太郎
◎屋根の草……記者
◎ロングフェローの生立……はくう
◎黄金の林檎……竹蜂
其他懸賞作文澤山

發兌元 東京神田區旅籠町一丁目 文光堂 （振替口座壹九五五番）

賣捌 東京堂 北隆館 東海堂 良明堂 上田屋 外書店



小石川區高田豐川町所在　日本女子大學校卒業生　(明治四十年)



小石川區竹早町所在　東京府立第二高等女學校卒業生　(明治四十年)



淑德高等女學校卒業生

小石川區表町所在　（明治四十年）



日本女學校卒業生

本鄉區龍岡町所在　（明治四十年）

芝區三田四國町所在　東京高等女學校卒業生　(明治四十年)



京橋區築地明石町所在　立教女學校卒業生　(明治四十年)



府下澁谷村所在　實踐女學校卒業生　(明治四十年)





神田區一ツ橋通　共立女子職業學校卒業生　（明治四十年）



牛込區市ヶ谷町所在　成女學校卒業生　（明治四十年）



京都淑女高等女學校名譽牌受領の本年卒業生

誌友おもかげ(十)



(山梨)角田紫叢



(陸奥)堀口不二子



(札幌)山田鈴子



(紀伊)池見俊子



(靜岡)中川順子



(宮城)上田秀子



(埼玉)境野增子



(武藏)牧野邦子



(長野)中村まさじ

(續々御寄贈な願ます御都合て御返し致ます)

好機逸す可らず

博覽會紀念特賣

本居東宮侍講題詠　小杉文學博士序文
下田學習院女子部長題歌　小森松風君編著

女子文學全書壹編

美文作法

全一册洋裝　正價四十錢　紀念特賣價廿五錢　郵送無料

中央新聞評　女子文學全書の第一編として出でしもの總論に於て美文の起原名稱種類を説明して叙事文抒情文に關する古今文士の文例を出し、次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小説との關係を述べ更に美文辭譯法、漢文の素養、讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳述したり美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし

坪井理學博士序文
山田美妙先生序文　小森松風君編

女子文學全書二編

言文一致文範

全一册洋裝　正價四十錢　紀念特賣價廿五錢　郵送無料

論より實地明治式の新文章言文一致體の好モデルを各部門毎に掲げ傍ら起源發達種類熟練法等迄面白く説いてありますから是で充分練習試作が出來ます文範作例は皆當代名家の粋英實用雅美綴帶の言文一致體は清新の思想を發揮すべき明治女性の必要機關又家庭文房の珍としても錦簇花園の觀ある此文範をおすゝめします

報知新聞記者　中村木公君編

實地精査

女子遊學便覽

（三十九年精査）

全一册洋裝　學校長肖像入　正價金三拾錢　紀念特賣價廿錢　郵送無料

萬朝報評　都下各女學校の世評と、其校則の概要を掲ぐ、坊間幾多の遊學案内が、麗々しく改版と稱し訂正增補と號しながら數年前の舊規則を掲げたるものに比すれば調査は善く行屆けり、尚ほ職業案内及學費の概算をも加へ、殊に無鐵砲に東京遊學を皷吹せずして、東京遊學の危險なるを説き、嘗て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段等をも書き添へたれば上京に念ある女學生と其の父兄とには頗ぶる便なるべし。

出版元　東京京橋區大鋸町　女子文壇社　（郵便振替貯金口座第壹七二九番）

元賣捌○東京堂○北隆館○至誠堂○前川文榮閣○上田屋○東海堂○良明堂

好機逸す可らず

▶博覽會紀念特賣◀

河井醉茗君著　山中古洞君畫

詩と美文

玉蟲

目次

全一册新式製本色クロース金箔、色箔入頗雅美

（正價金六拾錢）

紀念特賣價參拾錢　郵送無料

鈴木秋風君著　太田三郎君畫

小說美文

朝晴

目次

彩色挿畫

薔薇　潮の音　詩集　大川端

全一册新式本綴製

洋裝密畫入頗優雅

（正價金四拾五錢）

紀念特賣價廿五錢　郵送無料

出版元　東京京橋區大鋸町　電話本局六〇七番

女子文壇社

特約元賣捌○東京堂○東海堂○北隆館○前川文榮閣○至誠堂○上田屋○良明堂外書店

好機逸す可らず

博覽會紀念特賣

本居東宮侍講題詠　小杉文學博士序文
下田學習院女子部長題歌　小森松風君編著

女子文學全書壹編

美文作法

全一冊洋裝　正價四十錢　紀念特賣價廿五錢　郵送無料

女子文學全書の第一編として出でしもの總論に於て美文の起原名稱種類を說明して敍事文抒情文敍景文に關する古今文士の文例を出し、次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小說との關係を述べ更に美文辭譯法、漢文の素養、讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳述したり美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし

中央新聞評

井上哲學博士序文
山田美妙先生序文　小森松風君編

女子文學全書二編

言文一致文範

全一冊洋裝　正價四十錢　紀念特賣價廿五錢　郵送無料

論より實地明治式の新文章言文一致體の好モデルを各部門毎に揭げ傍ら起源發達種類熟練法等迄面白く說いてありますから是で充分練習試作が出來ます文範作例は皆當代名家の粋英實用雅美兼帶の言文一致體は清新の思想を發揮すべき明治女性の必要機關又家庭文房の珍としても錦綉花園の觀ある此文範をおすゝめします

報知新聞記者　中村木公君編

實地精査

女子遊學便覽

（三十九年精査）

全一冊洋裝
學校長肖像入
正價金三拾錢
紀念特賣價廿錢
郵送無料

萬朝報評　都下各女學校の世評と、其校則の概要を掲ぐ、坊間幾多の遊學案内が、麗々しく改版と稱し訂正增補と號しながら數年前の舊規則を掲げたるものに比すれば調査は善く行屆けり、尚ほ職業案内及學費の概算をも加へ、殊に無鐵砲に東京遊學を皷吹せずして、東京遊學の危險なるを說き、嘗て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段等をも書き添へたれば上京に念ある女學生と其の父兄とには頗ぶる便なるべし。

出版元　東京京橋區大鋸町　女子文壇社　（郵便振替貯金口座第壹七二九番）

元賣捌○東京堂○北隆館○至誠堂○前川文榮閣○上田屋○東海堂○良明堂

▲此方どれでも見本に限り一册わづか金六錢で差上ます

女子文壇

第三巻壹號（一月分）

價金拾錢　郵稅壹錢

口繪（○新年附錄…粲と姿（岡田三郎助筆）○水彩畫…新年の富士（三宅克己筆）○繪手本…羽子板○繪はがき…美の神、外誌友おもかげ外數葉入

女子文壇

第三巻二號（二月分）

價金拾錢　郵稅壹錢

口繪（○水彩畫…雪のあした（三宅克己筆）○繪手本…梅花○繪はがき…早春、外誌友其他寫眞數葉皆優美

つぼ菫

第三巻三號（三月增刊）

價金拾錢　郵稅壹錢

口繪（○水彩畫…山村の梅花（三宅克己筆）○繪はがき…外誌友其他寫眞數葉皆美

三巻一號より増刷取揃あり

女子文壇

第三巻四號（三月分）

價金拾錢　郵稅壹錢

口繪（○水彩畫…大和の花（三宅克己筆）○繪はがき…桃花（長原止水筆 ○繪手本…菜の花外誌友其他寫眞數葉

女子文壇

第三巻五號（四月分）

價金拾錢　郵稅壹錢

口繪（○水彩畫…菜の花（三宅克己筆）○繪はがき…菜の花と蝶（村上爲俊筆）○繪手本…春の野外誌友其他寫眞數葉

女子文壇

第三巻六號（五月分）

價金拾錢　郵稅壹錢

口繪（○水彩畫…雨後の山水（三宅克己筆）○繪はがき…博覧會正門（長原止水筆）○繪手本…机の上其外誌友おもかげ寫眞○都下六大女學校卒業生寫眞（府立第一、跡見、女子奎文、東京裁縫、三輪田、女子美術）各女學校優等生寫眞

發行所

東京京橋區大鋸町十一
振替口座第壹七二九番

女子文壇社

賣捌全國各地雜誌書店最寄に無は本社に注文を乞

ゆりばな

與謝野晶子

青原の野風の中に深山より來し香まじりぬしろ百合の花

赤城山百合しろかりしふもと野の夜明をおもふほとゝぎすかな

いつの日か若さたよわさふさはしき君とつみける白百合の花

六月の箱根の水に山百合のはなおほく積み船かへるかな

小雨ふる赤城平の百合の花なでしこまじり百合まじり咲く

うぐひすとほとゝぎす啼きしら雲のとざせる山の百合つみてきぬ

女學生の變遷

文學士　三輪田元道

女學生と云ふ言葉の出來たのは近來であるが、女學生なるものは、決して昨今に出來た譯では無く、女子にして學問するものは、ずつと以前から有つたのである、徳川時代の女學生といへば、現今社會に活動して居るものでは、私の母(三輪田眞佐子刀自を指す)などが、まづさうであらう、其時分の女學生は、今と違つて、非常に少數ではあつたが、現今のやうに流行の爲に學問するのではなく、眞に學問を好み、從て其意志も非常に强かつたし、人格も高かつたのである。

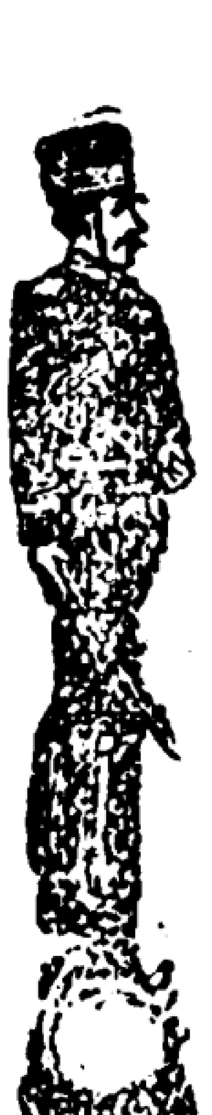
明治の代になつて、女子の學校が建てられ、女學生なる名稱が出來たのは、明治七八年から十二年頃のうちであつて、此の頃の學校は、主に宗敎家によつて建てられた、現今まで繼續して居るものでは、横濱のフエリス女學校、其他餘り世の中に名の知られて居ない、西洋人に依て建てられた學校であつて、皆耶蘇學校であつた、其敎師の如きも、社交上の關係から重に西洋人が多く、其結果は自然西洋主義を直接に生徒に傳へたので、其頃の生徒は之に倣つて、頻りに英語を話す、靴を穿く、髪も西洋風に結ふといふやうに、動作も活潑で、風采もハイカラて、極めてお轉婆であつたのである。

其後、追々政府の當局者も、女子の敎育と云ふことに注意を拂ふやうになつて、此の重大なる女子敎育の事業を、宗敎家にばかり委ねて置く可きでない、と云ふところから、明治十六七年より二十年頃に渉けて、官立の女學校を建てる、女子の敎育家の必要を認めて、師範學校に女子部を設けると云ふやうになつて、今迄宗敎家の手に在つた女子敎育は、玆に漸く政府の側に遷つて來たが、さうなると、學科も前とは變つて、今迄專ら英語を敎へたのが、國語に重きを置くやうになり、其他、生花、琴、の如きものをも學科のうちに加へる、生徒の髪も日本風に結ひ、服裝も質素な日本服

になり、前の反動として、一時風俗動作總てが、元の昔氣質に戻つたのである。

近來になつて、官私立の學校も非常に殖へ、女子教育の主義方針も深く研究せられて、日本在來の教への粹を拔き、西洋の教育方の醇なるところを採り、猶其上にも改善を加へて、東西兩洋の長所を發輝するに務め、從つて女學生の氣風も追々變つて、今日のやうになつたのであつて、言ひ換へれば、明治の女子教育は、之を三段に分けることが出來る、即ち最初が何事も西洋的、急進的であつた積極時代、次が、在來の日本主義に後戻りした消極時代、現今が右の積極と消極との兩極端を、程よく調和した折衷時代、と、斯う三つに區別されるので、從て女學生の氣風も、此の三段に遷り變つて來たのである。

然らば、將來は如何なるであらうかと云へば、私等の考へは、之からの教育は何うしても、各學校が互に其特色を發輝する、所謂特色教育の時代になるであらうと思ふ、現今の狀態では、官立と云はず、私立と云はず、皆一定の規則があつて、何れの學校も其規則に則つて造らへられてゐるので、各異つた階級、趣味、境遇を有する學生が、皆一樣の鑄形に箝められて居るのである、外國などでは……例えば、英國の如きは、劍橋大學でも、牛津大學でも、其他有名の學校が幾らもあるが、それ等の多くは皆私立であつて、各自由に其學校の學風が定まつてをり、生徒は皆相一致して、其學校の學風によつて社會に活動し、又學校の事業をも助けて、各自の學校の特色を益發輝するに務めて居る、日本の今日の各學校と雖、それ／＼多少の特色は有つて、技藝を主とするものとか、精神修養を主とするものとか、あることはあるが、將來は益其區別が明かになり、特色が鮮かになつて、所謂此の特色教育と云ふものが、盛んになるであらうと思ふ、又さうなるのを望むのである。（文責在錄者）



源氏物語の名媛

文學士　吉岡向陽

二　夕顔

きのふまで詠めし花もいつしかに、けふは我身と夏草の日にぞ萎るる憂き思ひ、せめてあはれと夕顔の、露の命とかれては知れど、知らではかなき夢の世や、袖の涙の乾く間も、泣いて明して山時鳥、一聲空にさえ渡り、日の鏡は照りながら、曇り勝なる胸の闇、えゝまゝならぬ娑婆世界、早や更け渡る鐘の聲、迷ひも晴れて死出の旅、急ぐ心は夏の夜に、涼しき方の道のせを、照したまはれ三の燈火。（古今節）

夕顔は三位中將の女也。母は疾う失せにしかば、中將いとどらうたがりて、さるべき緣もと思ひたりしに、其身さへえ堪へて、これも失せにき。夕顔は心細き孤にて其日をすぐす。

頭の中將なる上人あり、時の右大臣の子也。未だ少將にてありし頃彼れを見初めて通ひつく。行先永く相見んとにはあらねど、尙ほあはれなるものに思へり。女もうち憑めるけしきなり。幼なき者も生れぬ。

女世の人に似ず、物包みする性にて、人に物思ふ氣色見するをこよなく恥しきものに思へり。されば男の杜絶ゆることあるにも、まめ〴〵しく恨みたるさまも見えざりき。親もなくて、ものはかなげなる境遇はおのづから此性情を作り成しゝ也。

されば男も心長閑けくて、暫く通ひ來ざりしほどに、此北の方より、嫉ましさのおどろ〳〵しさをなさる便ありてかすめいはせたりける。女わりなき心にせん方なく思ひ懼ぢ、彼の幼き者のあるにも思ひ煩ひて、瞿麥の花を折りて男がりやる。其歌

山がつのかきほ荒るとも折々にあはれはかけよ瞿麥の露

男驚きて行くに、例のそらもなきものから、さすがに目には涙の玉を綴りて、荒れたる庭の露繁きを眺め居り。「久しき杜絶を恨むなりけり」と思ひて、「幼き者もあれど、尙ほ妹には」など女の心をとる。女

うち拂ふ袖も露けき床夏に嵐吹きそふ秋も來にけり

されど、男は遂に「あらし」の意をえ解かざりき。かくて又もとだえおきたりし程に、女は跡もなくかき消えて失せにき。時は秋也。

* * * * * * * * * * *

あくる年の夏也、源氏の君五條あたりに住める乳母の、此頃いたく煩へりと聞きたまひて、訪ひたまふ。門ひき明くる程、大路のさまを見渡し給へば、此家の傍に、檜垣など新しくしたるに、青やかなる蔓延ひかかり、白き花所得顔に咲きほのめきたり。いとものはかなき程なるに、彼方の簾より若き女の透影あまた見えてさしのぞく。如何なる者にかと御心にかゝる。

門明けたれば入り給ひぬ。乳母と物語などしたまひて、歸り給ふとて、乳母の子の惟光といふを召し出でて「此隣の家には何人の住むぞ」と問たまふ。惟光「え聞き侍らず」といへば、宿守なる男に問はしめ給ふに、亦「詳しきことはえ知り侍らず」といふ。君切に知らまほしくおぼす。

日頃ありて惟光まゐる。いふやう「西なる家のこと、知りて侍る者呼びて問はすれど、渉々しくも申さず、「此五月の頃ほひよりいと忍びて來し人ありげなれど、家の中の人々にだに更に知らせず」とのみ申す。時々中垣より若き女の透影見え侍り。昨日夕日のさし入りたるに垣間見侍りしかば、顔よき女の文書くとて居て侍りしが、いと物思へるけはひにて、かしづく人々もうち泣きてこそ侍りしか」といふ。君いよゝ知らばやとおぼす。

秋になりぬ。惟光案内よく見取りてまゐる。「其人とは今もえ思ひ寄り侍らねど、彼のかしづかれし人と思しき人、時々南の長屋にわたり來ること侍り。ほのかなれど、貌らうたげに侍り。一日前驅おはせたる車侍りしに、童女ども走り來て、「中將殿こそわたり給へれ」といへば、侍女だつ人いで來て、「いで見ん」とてはひわたり侍りき。御車は頭の中將のなりし」などいふ。

こゝに至りて讀者は既に思ひ寄りたらむ。其人は彼の夕顔にあらずして誰ぞ。夕顔はかの恐ろしきことの出で來しより、暫し西の京なる乳母の住めるにはひ隱れたりき。それも見苦しきに住み佗びて、この五月の頃よりかゝるあやしき所に物しつる也。されど中將のこととえしも思ひ離れず、門わたる車の音にもなほ胸轟かすなりけり。あゝ夕顔はあはれなる女也。

君いとゞゆかしくて「乳母の訪ひにものせん序に垣間見させさせよ」とのたまふ。惟光君の御心に違はじとおもふに、いみじくた謀り歩きつゝ、遂に忍びて通はせまつり初めてけり。

君はさして何人とも尋ね出でさせたまはず、又われも名乗らせたまはて、女の御在所あらはさんと尋ぬる

をもそてはかとなく歩き惑はしたまふ。されど此人のむげに御心にかゝりて晝間の隔ても覺束なく思し煩ひたまひつゝ、いとゞしば〳〵おはします。

八月十五夜、月は隙多かる板屋漏り來て、見習ひ給はぬさまもめづらし。曉近くやなりにけむ、隣の家々に賤しきしづども目覺して、なりはひの事ども言ひののしる。踏み轟かす唐碓の音も唯枕上に聞ゆ。くだくだしき事のみぞ多き。遣戸ひき明けて、諸共に見出し給ふ。ざれたる吳竹前栽の露はかゝる所も同じ如きらめく。虫も亂りがはしく鳴く。

君はなほも打ち解けて見まほしく思さるれば、にはかに御車引き入れさせ、女打ち乘せて、あたり近き河原の院にわたりたまふ。御隨身右近隨ふ。右近は女の侍女也。

院におはしつきて、見給ふに、荒れたる門の忍草生ひ茂りて、たとしへなくを暗し。霧も深く露けきに御袖もいたうぬれぬ。西の對に御座などしつらはせ給ひて、しめやかに語らはせたまふに、其日も暮れたり。

格子おろし、大殿油まゐらせて、すこし寢入り給へるに、御枕上にをかしげなる女居り。いふやうは「われをば尋ねもおはさて、かゝる賤しき女をらうたうし給ふ、めざましや、うしや」とて、御傍なる女をかき起さんとす。「あ」と驚き給へれば、火も消えたり。太刀引拔きてうち置きたまひて、右近を起し給ふに、それもいと恐ろしと思へるさまなり。宿直人起して、「紙燭もてまゐれ」とのたまへば、「闇きにいかでか」といふ。「あな若々し」とて手うち叩かせたまへば、山彥の答ふるも疎まし。人々も聞きつけたらぬにやまゐらず。女は汗もしとゞになりて、我にもあらぬけしき也。

右近を女に侍らせて、西の妻戸を押明け給へば、渡殿の火も消えたり。院の預、例の隨身起して、紙燭もてまゐらせたまふ。歸り入りて探りたまへば、女はさながら臥して、右近ぞうつ伏したる。「あな物狂しのものおぢや。狐などやうのもの〻脅さんとて氣恐しう思すか」とて、引き動したまふ。紙燭もてまゐれり。召し寄せて御覽ずれば、夢に見つる貌したる女面影に見えて、ふと消えぬ。添ひ臥して、「やゝ」と驚したまふ。

夕顏はわりなく物懼する女也。されば曩に中將の北の方の嫉みにもえ堪へて、はひ隱れたり。いかでか此物怪に堪へむ。物怪は源氏の通所六條の御息所の怨靈

といふ。いかでか此怨靈に堪へむ。彼れが命は玆に絶え果てにけるなり。あはれ一たびあかぬ人に別れて、胸の思は人遣りならず。後君に見顯はされて、時めかしたまふにあへど、つひに晴かすときもなくて已みぬ。夕顏はさゝやかなるむくろに重きねたみを負うて死せる也。噫夕顏はあはれなる女也。

君は女のいふかひなくなりぬるを見給ひて、泣き惑ひ給ふこといみじ。つとなきがらにとり付き給ひて、「あが君生き出で給へ。つらき目な見せ給ひそ」などのたまふ。右近は況いてわなゝき死ぬべし。

なきがらは惟光が知れる尼の東山にあるに送る。一日おきて葬などあり。

君は御胸迫る心地して過ぐし給ふ。一日右近を召し出でゝ女の上を聞きたまひて、かつて殿上の雨夜に頭の中將が物語りたりし人のことと思し出さる。「幼き人あり」と中將の憂へしが、「さる人やある」とのたまへば、「しか、一昨年の春物したまひき。女にていとらうたげに」などいふ。「人に知らせで、我に得させよ」とのたふ。はかなかりし人の形見にはぐくまんと思すなりけり。空うちくもりて風もつめたし。いたく眺めて、

見し人の煙を雲と眺むれば、夕の空もむつましきかな

と獨言ちたまふ。（夕顏終、次は明石の上）

實用の文章

一記者

文字の活用。世間が忙しくなるにつけ、郵便の活用が烈しくなり、葉書の文章、手紙の文章なども、到底昔風の候文や、一筆啓上ではをさまらぬ。成るべく、形式的の冗の文字を省いて、實際の用足になるやうな文章を必要とするのは當然の理で、一方で文藝家が美文を工夫するやうに、一方では此實際の用に立つ文字の研究もせねばならぬ。獨り郵便の文章のみでなく、此の文字の活用と云ふ事は、世間の仕事に伴うて追々に變つて來るであらうし、新しい工夫も積まれるであらう。今日、多くの文章が言文一致になつて來たのも、自然の必要上、此方を利便とするからで、時勢の進歩に伴ふ結果である。廣告の文であるとか、案内の文であるとか、品物の説明とか、最も實際的に

使用される文字は、美文以外に又進歩しつゝあるので、初學初心の間から此種の文章に就いても、多少の智識は具へて居らねばならぬ。

はがきの文。

郵便中の郵便、實用中の實用とも云ふべきは、郵便葉書であらう。東京だけでも日に幾千通の往復があるか計られぬ、此葉書の文章は、第一に短く書くこと、二に明かに書くこと、此二つは最要件で、書くべき場所は僅に三四寸の紙面であるから、此中に用事の要領を得るやうにするには、何うしても文句を短くし、餘計な事は書かないやうにせねばならぬ。今日でも未だ田舍などから來る葉書を見ると、拜啓から初まつて、時下晩春の候云々と時候を述べ、高堂各位御揃ひ愈よ御淸健奉賀候と挨拶を云ひ、次に平素は御無沙汰を謝し、まだ〳〵私方一同無事を報告し、それから漸と本文の用事に移る。初めの紋切形の文章の爲に、狹い葉書面の半分も三分の二も取つて了ひ、肝腎の用事は後の方へ小さく書くと云ふやうなことになる。葉書には用事だけの事として、挨拶などは拔にしたい、拜啓の二字位で、挨拶の語を代表せしめ、直ぐ本文の用事に移りたいものである。挨拶の文句などは習慣的に使はれるだけで、書く方も、讀む方も、無意識に書き、無意識に讀んで居る。下宿屋住居の人へ高堂愈よ御揃ひと書いたり、悔み狀に御安泰奉賀候と書いたりするのも、畢竟は此の習慣から來る誤用で、ろくさま文字の意味もわきまへずつまらぬ用文章の本を稽古した通りに書くものだから、此んな間違ひが起る。葉書の文章は勿論、其他凡ての書簡文には手本や、文範をたよりにする必要は少しもない。只自分の思ふ通り、言ふとする事を在のまゝに、書くのが一番宜しいのである。大抵の用事は然うごちやごちやと書かなくても、主な部分をかいつまんで、其點だけを念を押て置くと間違ひは無いもので、譬へば電話で話をする時に、餘計なことや、迂遠いことを言つて居ると、對手が迷惑する許りでなく、用事も足りないやうな事になつて了うやうなもので、葉書を書く時には、上手に電話を話す心持で書くに如くことはない。文體の如きも成るべくなら言文一致を用ひる方が、實際的で可い、明夕御光來被下度候と書くより、明十六日午後六時に入らつしやいと書いた方が親みがある、殊更にしやれたり、美文らしくしたり、むつかしい文句を並べて見たり、氣取つたり、字を知らぬと

思はれるのも口惜しいと無理にむつかしい字を探したり、皆禁物である。分らぬ字は假名で書くに限る、文句がむつかし氣になりさうだつたら、話のやうに書くに限る、能く手紙などを書くのに、文句は何う書いたら宜だらうなど丶思案する人もあるが、誠に愚な話である、文句を考へる間に、話の筋を明確とさせ、其通り話のやうに書けばまちがひはない。今の世の中は未だ舊式の敎育を受けた人が多いから、葉書や、手紙の文章でも候文でないと禮を失するかの如く思惟して居る人もあるが、諸嬢の時代になれば言文一致で押とほして見たい、世間が皆然うなれば誰も不思議には思ふまい。今の處では混交であるものだから偶に言文一致で書くと變に思はれるまでゞ、大勢は何れ然うなるにちがひない。

手紙の文。 手紙の文章に就いても大躰は葉書と違はない、只葉書より、書く事が混雑し、內容が多くなるべき筈のものだから、同じ實際的と言つても、少しは餘裕のあるやうに書ける、然ればと言つて手紙の文章でも、だら〳〵と長たらしいのは不可い、矢張文章は簡單に、飾り氣なく書いた方が宜い、手紙の文章と云つても、嚴密に區別をすると、美文の性質を帶びたものと、然うでないものとある、叙事的の文、乃ち用事を主としたものと、抒情的のもの、乃ち感想を主としたものとは、其性質が異ふから、文躰も異つて來る。用事を主としたものは、葉書文と同じ心得を以て書き、紙が長いからと云つて、冗を交へては不可い。多少美文的の性質を帶びても宜しいものは、其心得を以て書けば可い。忙しい人の許へ、形容澤山の詩的文字を並べた手紙を出した處で、冗骨折となる、親友の間とか、文學上の交際とか云ふ場合には、如何に實際的の手紙文とは云へ、極り切つた挨拶は面白くない、時候の挨拶でも「春暖の候」など丶言はずに「今日庭の木蓮が一時に七ツ咲きました」と云へば、自ら暖かな事も知れる。「先は取急ぎ早々」と書く處も、「もう學校へ行く時間ですから是で筆を止めます」と云へば愛嬌がある、此邊の文致は必ずしも長短を論じなくても手加減で長くなつても、くどくないやうには言へる、短く、短くと云つても餘り短くして、念の足りない書方は却つて事を誤るものである、短くてあるべきものを短くせよと言ふのである、昔、斯う云ふ話がある、或る人、文面は短いのが流行ると聞いて、松茸を贈るのに左の樣な手紙を添へた。

送進ずる十八本松茸恐惶謹言

平井伊賀入道

圭侍者

如何に短いのが宜からとて、是では滑稽になり、殆んど文章を成して居らぬ、此點はよく〳〵心して過不足の無い手紙文を書くやうにせねばならぬ。

電信の文。 郵便より電報は猶ほ言葉を短くし、意味を分るやうにせねばならぬ、何しろ假名ばかりで意の通ずるやうに綴り、其上十五字とか、二十字とか字數に制限があるのだから、随分苦しい、併し電報で用事を足す場合に、上手に綴り得るやうになつたら葉書などは屹度上手に書ける、電報の文句を旨く綴り得ないやうな人は、葉書を書かせても下手な人だ。直ぐ來いとか、明日行くとか簡單なものは別に論ずる程の事もないが、少し混雜だ用事を電報で辨じる時に、綴り方の上手下手は大いに用事の上に影響する。安産を知らすのに「ダンシアンサンオヤコブジアンシンセヨ」と綴れば長くなるが「コハヲトコ、ハハモブジ」と云へば母子無事も分る、無事なら安心するのは當然でアンシンセヨなど〻添へるのは冗てある。又他に招かれて斷る時なども「サシツカエアリフサン」と通り一變の返電を打つよりも「ユキタイガヒトガクル」と言へば、其招待に同情した事も分り、差支ある仔細も分る。成るべく同じ字數に綴つても、文字を活かして使はねばならぬ。それから電報に於て最も注意すべきは、漢字の音そのまゝを使ふことを避けるやうにしたい、言葉のまゝの方が間違はない、なまじひに漢字などを使うと飛んだ誤解を起す、時間、場所、數字なども能く氣をつけないと、先方で解釋のしやうに依つては飛んだ行違が起る、電報の文句なども、まさかの時に狼狽ないやうに平素から稽古して置くのも、一つの工夫である。

案内の文。 凡ての招待狀、商店の案内文など是は直接諸孃に關係はないが、讀者の立脚地に居て其文章を讀んで御覧なさい、實に不得要領なが多い。招待狀なども何うせ活字に印刷するのだと思つてか不必要な挨拶や、馬鹿叮嚀な文句を並べ、而も招待の主意が分らなかつたり、時間に掛値を書いたり、空文を弄する點が多い、此等も將來は言文一致にても改め嘘を書かないやうに、定り文句の無意味な文字を並べ

ないやうに、どし〳〵改良してゆかねばならぬ。

請取の文。　作文なら作れるが、受取は書いた事が無いと云ふ青年男女がある、身其境に居らぬから當然のやうてあるけれど、受取の文句位は書けないと云つては耻辱てある。一寸注意して置けば、請取文ぐらゐは何でもない事てある。更に請取の內でも、銀行爲替の裏書とか、郵便爲替の認め方であるとかは、熟れないと矢張勝手が分らない、此等もそれ〳〵一定の認め方があるのだから、平素から少し心掛て、書くやうにせねばならぬ。殊に女子には郵便局、銀行、役所、會社などて物を書くのに、まご〳〵する人が多い、女子てもそれ位の所へは平然て用足が出來るやうにならねばならないのだから、從つて其等の場所て用ゆる一定の書式などは、心得て置く必要がある。

以上の外、實用の文章として研究すべき問題は猶ほ有るやうに思はれるけれど、今は其主なるものに止めて置く。

かげろふ物語

横瀬夜雨

星美しう輝いた晩だといひます。

お祖母さんが十七におなんなすつた年の秋栗毛の駒に鞍を置いて、前にはけんもく槍も立てたのでせう、振袖に花をやつて籠にゆられゆられ、樫ばかり澤山に生へた宅へお嫁入した時、持つてらしたお布團ださうてすが。

其頃は何といふ名だつたか、地はオリヴの濃い色て唐獅子に牡丹の花の三つついてる大摸樣なのです。それを四隅四角に引ぱり合うて廣間の炬燵を中に、兄弟五人が、私が首をすくめてゐると、皆眞似をしてすくまつて暖つてゐました。

外は雪。ガラス戸を透して內庭を見ると、池の上へ被さるやうに茂つた五葉の松に、ちらちらと白いのがかゝつては消える。其下から二番目の枝に地鷄が四羽牡鳥を中にしてこちら向いてやつぱり鳥も寒いのてせう首をちゞめて。

私の右に仰向になつて、足をばた〳〵と櫓の下て暴

れさせては、疲れると私の膝の上へ持つてくる、粲四郎さんは七歳だが何といふ腕白か數が知れない。眼の玉が誰よかも光る子で寒いのに足袋がきらひて、それて氷渡もする竹馬にも乘る。

美いちやんと呼べばいつも莞爾と笑くぼを見せる眉の美しい子、十にもなつて紅い手をくぢくぢ緋の絹糸を環のやうに縺らかしては二重瞼の目をきよろんとさせてるし。

謙太郎は大きな形をしながら左の手で耳たぶを丸めては放し丸めては放し誰かのお伽噺をふしをつけてうなつてる。何かといふと姉さんなぞはお蠶はどうして繭の中へ這入て行くか知りもしないてと惡口をきくですもの、きこひ。

人を魅するやうな柔かい眸の光に射られては、誰でもきやうだい中で一番可愛いのは房代だと仰しやる、袴をつけて路を行く時には桃色のりぼんが極似あふ。うす櫻の花のほんのりした頰を布團へひつたりと埋めて「東する雲見る毎に」とうたひさして、つと外方を向いてしまつた。

私は涙がこぼれました。なぜにとお問なすつてはいや。

たゞ、はしをりかゞむ同胞同士、かうして同じ火に暖まりあふのも何時までやら、自分はまだやつと二十歳になつたばかりだけれど、男の子達は父と同じ運命に陷るであらう、妹だちはまた母やわたしの悲みをくり返して泣かねばなるまいとやうに思はれるのです。杞憂でせうか。

深き林の道をくぐりぬけて遙に西の坡に傾きかゝる夕日を見、それの落ちぬ前に坂を上つてしまはうと、せつ〱と急いだけれど、草にまろぶ紅爐盤は跳つて浪にかくれ行く兎のやう、私の坂に驅け上つた時はなごりの光を紅の霞に留めた瞬間だつたので、袂を嚙んでしばらく草の中に佇んだとがありますもの。わたしはきつと暗い路ばつかり歩いて行くのでせうよ。暗い路——暗い路、それはどんなにか寂しいでせう思うてもぞつとします。

が、辛い今の身の上を忘れてをりにふれては幼な子の昔にかへる夢を見ます。紅い糸を毬にかゞつて廂低き倉の前で雨を怨んだ時代は御座いました、始めて靴をはいては、女のざいに生いきなと男生に埃をふりかけられて泣いたこともありました。

私の毛は握るにはあまるほど多く、ほどいて逆に櫛

をあてると膝もかくれる位長い。朝に梳き夕に梳りて艶やかにあげとくのだけれど。

かげろふもゆる春の野にすみは一人眸を草にてらして蝶のやうに前にうごく夢の影を追ひました。

白いけれど紫鹿野の山にかゝれる雲は重さうに山の腰を繞つて、いく度か霜柱が立つては麥の根をもたげたらう野は冬の睡りからやつとさめたとやうに、かげろふは小石からも塊からも、さては旅人の捨て去つた古草鞋からも立つてゐる。

空は碧瑠璃の鏡の影をたゝへて、晶には見えるけれど、地に遍き陽炎は、たとふれば月淸き海上の夜とやうにきらめくので、柔かなる春の光は天にもかげろふと共に充ちてゐるのでした。

『すみ！』

誰なれば人無き野路に、

立よどんて聲のした方へと眼をたどらしました。

そすと、あらびやんないとの繪にても有りさうな、屋根の圓い、窓懸のどれも皆みどり色な、石造の大厦を十歩の前に認めました。

人が二人。

蔦のいろ〳〵這ひ纏うた入口の石階の上に抱き合ふやうにして、女の方はそら色の服にきらびやかな裳裾を長う石の上に垂れ、あらはなる腕を人のうなじに纏きて——

恥かしき人を見つるかなとつとかくれるやうに石の柱の蔭に入りていかめしき鐵門の扉に背をあてゝ立ちました。

うち見る庭のめぐりは、くろーばあの綠、壁の色と映りて苑には薔薇の白いのやら紅いのやら。

『すみ！』

また呼ぶ——

呼ばれたのは今石階の上に幻の如く立つて居た美しの人でございました。

『すみ』

兩手をかけて、脇から背へ、輕々と抱いては耳に口つけて、すみと呼びなすつた、現在は遠き國なるなつかしの人を、俤に見たのてす。

すみとは現し世に負はされた現し身のわらはの名てすもの。



作れるやうになるまで

梅澤あや子

何ごとに致しましても、一角のことを爲さうと致しますには、一通りならぬ苦心が御座いますが、殊に此の文學上のことは、取わけて他のものよりは六ヶ敷いと存じます。文章や詩歌の道は、深く存じませんが、ただ妾が日頃斯うも致しましたらば宜しからうかと、心がけて居りますことを、ざつと申上げましやう、極く平凡なことゝては御座いますが、妾は先づ第一に、書物を。

▲讀め

よく種々な書物を讀まなければなりませんと存じます一言に讀むと申しましても、書物の數はなか／＼數限りもありませんので、何も角も悉く眼を通すといふことは、到底も不可能のことで御座いますから、之から書物を讀まうと思召されるお方は、先づ最初に何ういふ書物を讀んだならば善からうかと、充分に自分の讀むべき書物を選擇されることが必要で御座いましてこれはよく自分にも考へ、又先輩の方々にも聞き正して、定めるのが宜しう御座います、それ／＼自分の研究する方面によりまして、讀むべき書物も異いますが何れに致しましても、古來有名の書物は是非一通り讀みまして置きませんければなりません、又、同じ書物を讀むにも、書物によりまして、一々見方を變へなければなりません、譬へば、或る書物は、其書物全躰の意味よりも、寧ろ一字一句の小部分中に言ひ得られぬ妙味があるとか、又或るものは、小さく分けては割合ひに味が薄いけれども、その書物全般に渉つて表はされて居る思想に、價値があるとか、各その書物によりまして、それ／＼異いました特點が御座います、自分が之は讀まうと思ひまする書物に就きましては、一番最初に此の書物は何れの點に注意して讀めば宜しいかといふことを、能く考へてからかゝりませんと、同じ書物を讀むに致しましても、大變な損得が御座いましやうと存じます、それから唯書物を讀んで、種々なことを知るばかりでなく、次には、世の中のことを

▲視る

よく活社會の狀態を視察致しますことを、忽せに致してはなりませんかと存じます、書物でも一通りのこ

とは分りましやうが、現社會のことは、實際に當って見ますると、書物で讀みましたのや、自分の想像致しましたのよりも、大變に違ふたことが多いので御座います、能く世人が、「彼の人は生きた字引だ」などゝ惡口を申しますことが御座いますが、それは畢竟其人が書物の上には明るう御座いましても、世の中の實際に經驗が御座いませんからでありまして、何事によらず何物に限らず、能く細かく、精しく、深く、注意致しまして、物の裡面までも視拔く力を養はなければならんかと存じます、目下開會中の勸業博覽會などに就きましても、一寸表面から見ましただけては、たゞ奇麗な立派なと申しますだけに止りませんが、今一歩進んで觀察いたしますと、只今では何ういふものが世間に流行致して居るかとか、わが國民の手や頭腦は、何ういふものを製らへ得る力がありますかとか、或は之を今より五年なり十年なりの過去に較べて見まするとか猶之によりまして、將來を想像して見まするとか致しましたならば、非常に趣味もありますし、且又大層有益なことゝ存じます、と、申しましても、まだ〱視るばかりてはいけませんので、今度は澤山に

▲聽け

よく注意して種々の物ごとを、聽くことが肝腎で御座います、聽くと申しますれば、人樣よりお話を聽くことや、世の中の噂を聞くことゝて御座いまして、是等は時によりますと、書物を讀みましたり、種々なものを視ますよりも、猶一層爲めになりますることが往々御座います「百聞一見に若かず」といふやうな諺も御座いますが、仲々さうばかりで御座いません、世の中が日々に進歩致してまゐりますにつけまして、單に自分が書物で讀んだり、眼で視たり致しましただけでは到底も逐ひ付きませんやうになりますから、少しでも餘計に樣々なことを人樣から聽きまして、自分の智識を廣く致しませんければなりません、又、之は少し六ケ敷いことでは御座いますが、單に人樣からお話を聽きますばかりでなく、無聲に聽き、無言に聽くことをも習はなければなりません、よく心を留めて居りましたならば、無性物ともいろ〱な話が致されましやうし、又、いろ〱なことを聽きとることも出來やうと存じます、之は高尚な情や智の働きでありまして、少しく六ケ敷いことでは御座いましやうが、精々心がけ

ますれば、屹度出來得られることとて御座います、猶其次には、務めて

▲話せ

よくお話することも、充分お稽古される必要が御座います、お話のお上手なのは、お話する御當人も愉快で御座いますし、又、相手のお方にも快感を與へますのて、お話は社交上の一大機關であるばかりて御座いませず、このお話することが、又、文章を作ります上におきまして、一大修養になりまする、と、申しますのは、外でも御座いませんが、人樣とお話する場合に、よく順序を立てゝお話するやうに、始終心がけて居りますと、終ひには其癖がついて、知らず〱一つの習慣となりまして、何ういふお話でも、始め終りが整然と筋道が立つて、一つの纏まつた立派なお話が何時ても出來るやうに成ります、さういふ癖がつきますれば從て文章を作ります場合にも、自分の知らぬ間に首尾の纏つた見事なものが、易々書けるやうに成りまする、それには平生務めて上手にお話するといふことが最も肝腎なことゝ存じます、而已ならず、前に申上げました、よく人樣に物ごとをお聽き申します場合にも自分がお話が上手て御座いますると、大變人樣に伺ひ好う御座いまするし、人樣の方でも又、此方が上手に出ますれば、言はふと思召しなさらぬことまでも、遂調子に乘つてお話し下さるといふやうなことが、屢〱御座いますので、此のよくお話するといふことは、右の兩方面から致しましても、是非心がけねば成りませぬことゝ存じます、それからは、一歩進みまして

▲考へよ

よく物ごとに付いて考へる必要が起つてまゐります、考へると申しますと、極めて範圍が廣う御座いますが此處には重に智的の方面のことを申しますので、自分が讀んだり、視たり、聽たり致しましたことを綜合致しまして、これに智的の見解を下しまして、初めて玆に自分が一家の說を立て、主義主張を發表するといふことになりますので御座いますが、此の考へまするといふことは極めて六ケ敷いことで御座いまして、物ごとを深く考へます場合には、可成頭腦を冷靜に致しまして、可成廣い見聞の中から抽象致しませぬと、公平な見解を得ることは出來ませぬので御座いまして、之には平素の修養が最も必要で御座います。

（つゞく）

山雀

野口雨情

向う小山の
木瓜の木は
春にならずば
芽が出ない
藪の椿の
赤い花
日の暮れるのに
咲いて居る
椿の下に
寝てゐれば
藪の小かげの
鶯に
こんな古巣の
山雀
山に歸れと
呵られた
山にかへれば
一〻の
藪の茨に
さされるし
母は他國の
山雀
父が戀しく
なりました

さゆり葉

潮みたぬまの〻濱路の小百合葉もいりぬる礒は浪の下草　寂蓮法師

夏の野のしげみに咲ける姫百合の知られぬ戀はくるしきものを　坂上郎女

とも し火の光に見ゆる小百合花ゆりもあはんとおもひそめてき　萬葉集

わきかれし草深百合もありけりと花さきてこそ人もしろらめ　經家卿

筑波根のさゆりの花のゆどこにもかなしけ妹ぞひろもかなしげ　萬葉集

路の邊の草深百合の花笑に笑せしからに待といふべしや　萬葉集

懸賞當選圖畫(其七)

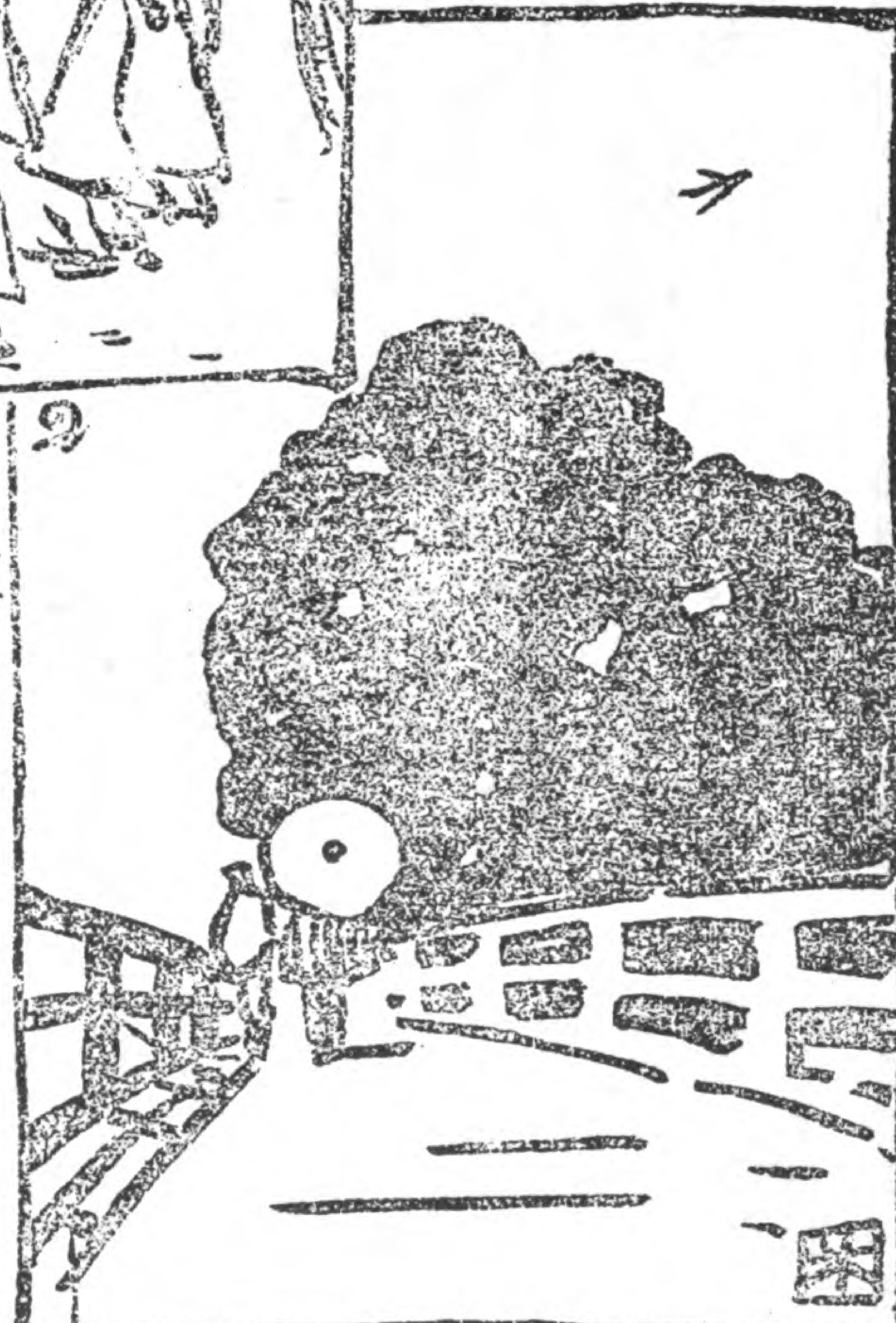
山中古洞先生選

(1)お花見(二等)
下谷區谷中初音町四ノ二六　佐野良子











(2)新綠(三等)　矢　名

(3)渡し場(四等)　京都市椹木町通り室町西入　豐井きく子

(4)あひ傘(五等)　愛知縣寶飯郡一宮村一宮二四　近由みつ子

(5)露店(五等)　京都市西陣紋屋町　濱部郭公

叙事文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○うしろ影

三河　柳子

「光や、」といつものお優しい含み聲が、此夜は取分けて懐かしう聞えました。奥様は女中部屋の腰障子を靜に開け、ランプの光をも、避けるやうにしてお坐りなさいましたが、私が差上げた座蒲團さへわきへ取つて、お敷きなさらうとは遊ばしません。

「まあ、奥様。」

「否え、可いのよ、お前だつてお敷きぢやないもの、私ばかり何うして、」

「あら、御主人様と女中とは違ひますわ。」

「光や、私はもうお前の主人ぢやありませんよ、これからは友達なの、何時迄も仲よくしませうね、」と淋しうお笑ひ遊ばして、「呼捨にするのだつて、失禮なんだけれど、口癖になつてるもんだから。」

「まあ、奥様、何う遊ばしましたの。」

「お前も大低お知りでせう、私はね、只今お父様から、一度實家へ行くやうにッて、お話を承つたの。」

「えッ、」とばかり私は仰天しました。奥様は唇を嚙んで、打ちそむけるやうになすつたが、堪へて居らした涙がほろ〳〵と落ちるのが見えました、雪の頸にこぼれた後れ毛は、幽かにふるへて居るのです。

「奥様、」と呼んだが勢一ぱいで、慰めねばならぬ私は、忍び音に泣入りました。奥様のお痛はしい境遇を日毎見て居れば、直ぐに悲しい御離緣と知つたのです。

「光や、私は明日の朝參りますよ、こゝで寢るのも、今夜限り、二度と此屋根の下に住む事の出來ないのもよく知つては居りますけれど……。」

こんな事になるも、皆私の至らぬからと、身を悔むより他はありません。置いてさへ下されば、例へどんな思ひをしても、私はこゝで死ぬ覺悟でしたが、其れも愜

はないから、生きては歸らぬつもりの實家へ、おめおめと戻ります。

お前には一方ならぬ世話になりました、陰になり陽になり、私の事を氣に懸けてくれる志は、決して忘れはしませんよ。

何事も夢なの、私はもう覺悟して居るから、あゝ、お前も泣いておくれでない。」

私は胸が張裂くばかり、御返事も出來ないのです。

「何かお別れの紀念にしたいが、あ、こんな物でも。」

びつくりして顏を上げた時には、奥樣の藥指に輝いて居たものは、何時か私の手にありました。

「まあ、飛んでもない。」

「いゝえ、可いのよ、つまらないものだけれど……。

私は何だか氣がわく／＼して居るから、もうあちらへ行きます。今夜はあの、下の座敷にやすむから、お前あとで來ておくれな、お名殘に、寢物語でもしませうよ。」と靜かに仰つしやつて、呆氣に取られた私を殘して、奥樣は出ていらつしやいました。

其後で、私は正躰もなく泣頽れたのですが、旋て心を取直して、深更に奥樣の御閨へ伺ひ、枕を並べて寢ました。

其夜も、奥樣は、旦那樣や親旦那樣御夫婦を恨むやうな事は一言も仰せられず、皆自分の愚なからとお泣き遊ばしたのです、私も枕に冷く涙を落しました。

輿入の時のお荷物を見ても知れます、奥樣の御實家は近郷に知られた豪家なのです。世間では旦那樣が、其お藏を目當に奥樣をお迎へ遊ばした處、思ふやうには引出せない、其口惜紛れの御離緣と、後に噂するのを聞きました。旦那樣には新町に深い御馴染があつたのです。

せめては長かれと祈つた其夜も明けて、奥樣は愈々御實家へ行く事になり、程なく俥が參りました。

後のお叱言を承知で、私は裏口からそつと出て、町外れの柳の陰に、其お俥を待つて居ると、間もなく、お供の男のと、二臺馳せ來るのが見えました。

「奥樣、」と呼びますと、俯向いて居らした顏を上げ、涙の目に微笑んで、「まあ何うして此處にお居でなの。」

お聲と共に、ぴたりと俥が止りました。

「あの、しみ／＼お見送り申しませうと存じまして。」

「然う、嬉しいわねえ、何卒奉公大事に勤めて下さいよ、それからあの藪入には屹度ね、待つてるから。」

「はい、」といふのも漸くの涙聲。

奥樣はさりげなう、「ぢやお別れしますよ、左樣なら。」

「御機嫌宜しう、」と佇んで見送る程に、黄金を一面敷詰めたやうな、菜の花畠、田舍道、颯と流れた薄霞に、乘るかとばかりすら／＼と、忽ちに遠ざかる、轍の痕に陽炎燃え、白い蝶々がひら／＼と、御俥は旋て山の

裾近う、黒き點のやうになつたけれど、此日限の丸髷に紅い手絡が美しい、うしろ影は目に殘つた、此後とても私は、其姿をば胸に刻んで、長く〳〵忘れ得ないのでせう。

（評）維愈々圓熟の域に入り、破鏡の歎に沈む奥様の悲みと、主をおもふ下婢の心根と、兩つながらよく描かれたり。

五等

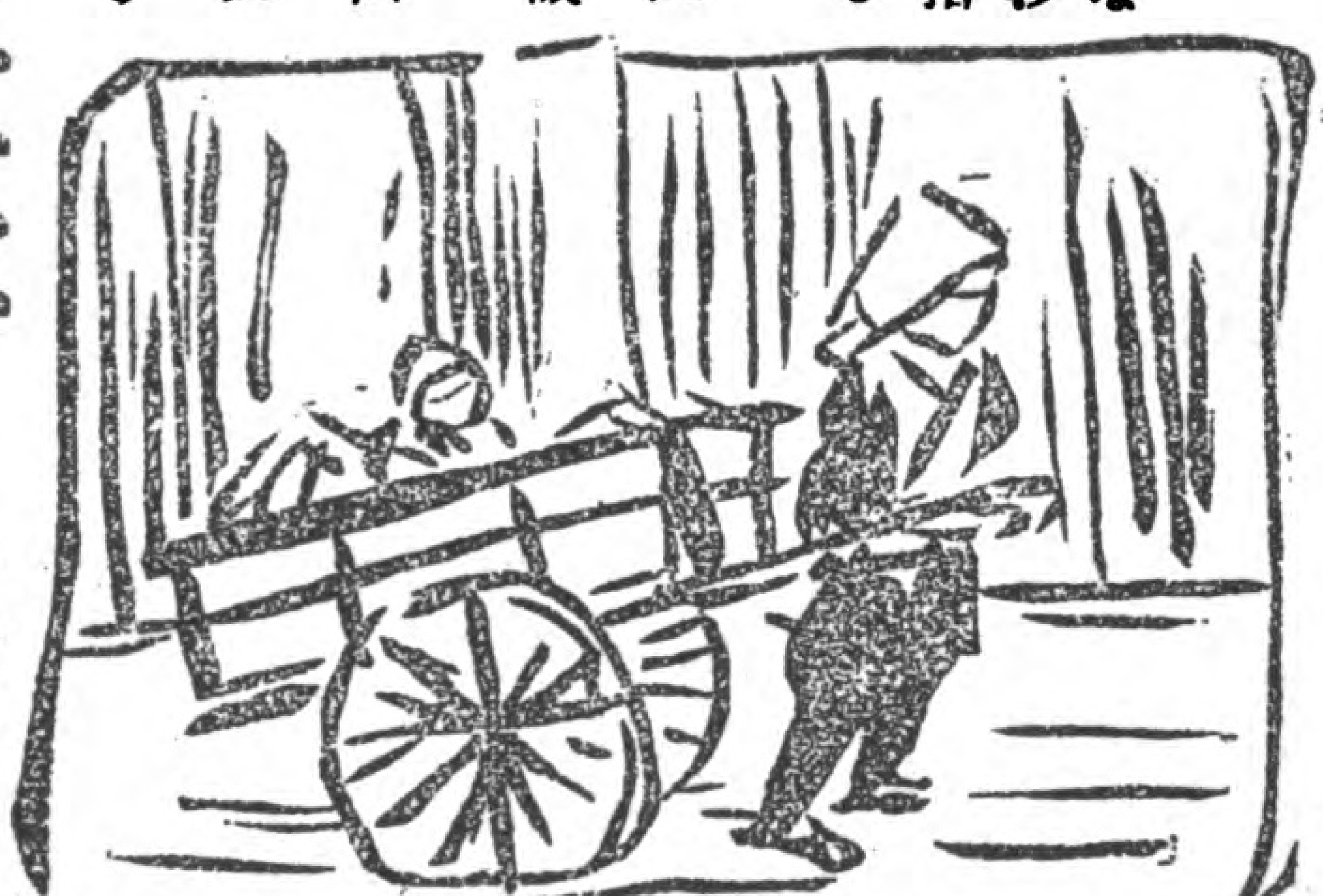
○茶摘み

赤阪區檜町一四　森　英　子

見渡すかぎり青々とした茶畑、新しい芽は心ゆくばかり萠えて、空はあをくふく風に茶の香はたゞよひきたる心持よい朝景色、「娘島田に蝶々が止まる蝶々とまれや花ぢやもの」、清いすゞしい聲がきこえる、東の方、日のうらゝかに照るところには早や十六七の少女がしきりに茶の芽を摘んで居る、白手拭赤だすきは綠の間からちら〳〵と見える、うらゝかな朝日はいつかくまなく照り渡ると、彼方此方にすうつと茶の葉を分ける音がして、三々五々うちつれだつた少女の群は匂ひこぼるゝやうな黑髪を白手拭に包んで、十字にあやどつた襷に、あらはに見ゆる眞白の腕をのばして茶の芽を撫でながら集つてくる、簀にのどかなるは彼等の心と此景、「お早う」、「餘りお早くもないね」、「これでも私にしちや早いのさ」、「私しやあ、もうこれだけ摘んだよ」、と鼻高々とさし上ぐる籠の中に新芽美しう、「おやお花さん、お花さんてば」「あいあい何んですよ」、「どれだけ、お見せ」「もう二籠さ、えらいもんだらう」餘念なく嘻々として摘む少女の數は、はやかぞへつくされぬ程になつて了つた、「花ちやんはよい聲黄いろいこゑよやがて煎じるお茶の色」打そろうてうたふ中に一きは高く西の端の少女がうたへば、其隣りなるがおとらず聲張り上て、「雪ちやんもよい聲おふといこゑよばん茶のいろか何の色」、前にうたつた少女と顔見合せてからからと止め途もなく笑ひ出す、うたひはやすこゑのやゝ靜まると、ほち〳〵茶の芽の摘まるゝ音が起る、日はうら〳〵と茶の木の上にてり渡つて、摘む手も暖かそう、一心に摘みとる少女の顔は櫻色になつて遠き岡にちる花よりも美しい、さつと渡つてきた春風に茶の芽はすうと少女のからだをかこんでは、はなれる。

（評）茶摘唄の聲聞ゆるやうなり。

なわ拾ひ　大阪　倭文子



秀逸

○伏屋

靜岡　白　蝶

日は今午、庭鳥がゆるやかに時を作つた。

紅梅かつ散る納屋の軒下には、折からの和らかい日を袖無の背にうけて、半白のおばこの老婆が、頻りと白い足袋をさして居る。

肥えた三毛猫が、どこからかのつそり、現れてのびをした。

「今日は暖いなあ」、くはへ煙管て、今ひるげを濟ましたらしい太郎さんは、母屋から出て來て、かう云ひながら、母親の敷いて居るむしろの端へ腰を下ろした。

コヽヽヽ、突然けたゝましく雌をよびだした鷄小屋の傍には、紅い襷がけの齒を染めた嫁さんが立て、洗ひ流しものを撒いて居る。

「梅がちるで麥がのだつたのう」、眼鏡ごしに、垣根からつゞく廣い畑を見やつて、媼さんは太郎さんに振むいた。

今迄耕して居た水車小屋のあたりは、からからと陽炎もえて、置いてきた鍬が畦みちに光つてる。

「大分ふくだつて來ましたゞ、どうか六俵もとりていと思ひますだがのう」、笑ましげに眺めて、掌にはたいた火玉をころ／＼と轉がして吸ひつける。

ちよん／＼と母屋の庭に梭の音、嫁さんが洗ひ物をしまつて、機にかゝつたのだ。

「たんまりだらうよ、今年はお前が精根して作るで…」ずつと針を遠くへ離して、穴へ白い糸を通さうと苦心しながら……。

「みを入れたら、ちつとばかりちがうだ、でねえと、おつ母、一人ふえるでのう」、膝を抱へてくるりおふくろの方へ向直つて笑つた、此時うつむいて、切れ糸を繋いで居た嫁さんは、ハッと顔をあかめて、いそいで梭をとりあげながらちらと見返ると、まだ笑顔を收めないで自分を眺めて居る夫と見合つたので、ます／＼紅くなつて、あわてゝそむけた。

「アッハッハッハヽヽ」と太郎さんは一きは高く笑ひ出して、ぬつと立上りさま、腰に挾んだ手拭をぬきとつて、ポンと一つはたいて、頰被りをした。

「ホヽヽ、麥とお産と、どつちが早いかのう」母親もくゝみ笑ひをして、さし終つた足袋を箱へしまつた。

廣い肩をゆすつて、畑へ下りてゆく太郎さんの後ろ姿を、嫁は熟と見つめて居たが聽てほてつた頰を手の甲で抑へて、嫣然した。

（評）麥の收穫はたんまりあるし、可愛いのは産れるし、今年の夏は太郎君萬歳だ。

○蘇山の曙光

熊本市　たけ子

筑紫の海の浪の音に夜の靜寂漸く搖れて、暗黒の夜の幕は其の幾襲ねを一枚一枚に剝ぎ取らるゝやうに明け行けば、東の空、朝靄の上に浮び出てたる日向路一帶の連山、今や長閑けき曉の夢より醒めんとするなり。

蜒蜿として銀蛇のさまに肥筑の曠野を縫ひて、うねり行く白河の岸に立ち、おぼろ〳〵の朝霧にまかれつゝ、流れを遡りて遠く東を眺めやれば、まだ明けやらぬ薄灰色の空に衝き立ちて巨人の姿に轟々として地軸を揺りつゝ、千歳盡きぬ白煙を濛々として吐き上ぐる阿蘇の大火山。さながら其のかみ魔の神が天軍に果敢なくも打破られ身は數個所の傷矢を負ひて魔界を驅り立てられ、忿怒の形相恐ろしく、一念凝つては遂に此の山と化し、天に向つて消ゆる期もなき呪咀の吐息苦しげに吐き掛くれば、忽ち萬丈の噴煙となり永劫天を衝く、かとぞ覺ゆる。

朝日は漸く蘇山の頂上に顯はれぬ。紫の雲ゆら〳〵と山軸を湧き出てゝ靆て流れて南へ北へ、見る〳〵擴ごり行きて肥後路日向路の山脈は包まれ終んぬ。忽ちにして燃ゆるが如き噴煙は曙光に映え、炎々として熖亂るゝ三惡道の火の柱かと怪まれ、一天盡く燒き盡くさずんば止まじと荒べば、肥後路日向路の雲は爛壞れて半空俄に唇紅となりぬ、慰安の夜の夢より醒めし覆載間の萬象は希望ある今日の營みに新らしき歡喜の聲を上げて、空翔ぶ鳥は金色に、鋤を肩に野良行く農夫も、若菜積み荷馬車引行く賤の男も、馬の吐息も皆一齊に朝暾を浴びて紅に映えつ、遠近の村さては野末の伏屋より朝の炊の煙立ち遂に麓の霞となりぬ。顧みれば日は蘇山の頂を離れて既に一竿。

（評）緊密、女子の筆に似ず。

○春の一時間　森　孤菫女史

讀書に疲れて窓の障子をさつと開くと、丁子の香がプーンと鼻をついた、あゝ何といふいゝ匂ひだらう、見處もない我庭にも春は隈なく行き渡つた。あちらの隅にある木瓜の花は紅く、丁度今が見頃だ、其開いたのは恰も妖婦が媚笑を洩したやう、其蕾は漸く二八計りの少女が、しかと結んだ唇にも譬へやうか、緋桃はいつしか亂れ散つて、地上は春の舞姫が衣をぬぎすてられたやう、彼岸櫻は今が眞盛り、桃にかはつて通る人の目を引くであらう。生暖い風が吹いて來て、鬢の毛が頬をなぶるを池にのぞんだ柳の糸がゆるやかに靡いた。なんだか目に霞が懸つた樣で向ふの方がはつきりしない、いくら拭つて見ても同じだ。

何處からか眞白の蝶が急しげに飛んで來たが、つと横に、垣を隔てた菜種の花の中にかくれてしまつた。向ふの畔路を二三の少女が兩の袂を頭にのせ、其上をおさへて小急ぎに歸つてくる、ふと軒をすかして見ると、はつきりしなかつたも道理、霧を吹ひた樣な小さな小さな春雨が降つてゐる、マア何時から降り出したのだらう、やがてだん〳〵雨の脚が見えだして、柳の糸が

しつとりと、緑の色が濃くなつた、さつきの蝶はどうしてゐるか知ら、うまく羽を濡さないでさけてゐるだらうか。遠方に眠そうな牛の聲が聞える、再びゆるやかな風が水面を渡つて、和かに頰をなでた、われはうつとりとして、自然と融け合ひ自然の懐に抱かれて、今や夢境にいらうとすると、忽ちぽたりと落ちた物がある、驚いて見れば椿の花だ。暫くして雨は全くやんだ、春色ます〳〵濃やかに、仰げば夕月夢よりも淡く、櫻の梢にかゝつて、野寺の鐘がゴーンと一つ……。

（評）降るともなき春雨のおもむき、かなりに描かれたり。

○千歳橋

周防　秋ぞら

赤い玉蜀黍の實を乾してゐる軒の低い藁家が並んで、田舎の町はもう盡きそうだ。最前から自分の前になり後になりして居た老人は、何時か見えなくなつて、外には旅人は一人も居なくなつた。家を取り除けた跡らしい桑畑に、白い手拭を被つた女が枯草を引いて居るのを左に見て、狹い町を右へ回ると橋の欄干が見えた。おや此麼處に川が、と思ふとはや目の前に巨人の樣は大擬寶珠、淡黒い墨跡は辛うじて、千歳橋と讀み得た。河岸の上下は斷續した竹藪、向ふ岸は河岸の堤より低う、死濕りの藁屋の棟が見える、川幅は一丁もあらう大半は砂洲で、水は極淺く、砂洲の間を縫つて流れて居る、川上は雲煙模糊として、所々に靑い松の森と、白い壁とを見る許り、川下は直ちに海に連つて居るのが近く見える。欄干に倚つて下行く水を眺めた。あゝ砂の淸らかなこと、折りから浮び出でた二羽の家鴨は、雪白のつばさ雌黃の嘴、雌雄でもあらう互に睦じう語りながら水を下つて居る、其下には靑竹の筏がある、先刻降つた小さい霰がまだ殘つて居るのも面白い。主は見えず小さい火爐の中からは細い〳〵煙。橋の中程で眼を放つて遠く眺めた。河の兩岸が喇叭狀に擴つて居る眞中の沖合に、小さい島がある。暗代赭色の草の色と、劍を閃めかす樣な波の崩れ、又は鯨の潮吹く樣な波のしぶき等が日に榮えて美しい。遙かの沖に鳥位の白い物が仄見えるが、海が輝くので定かには船の帆とも見えぬ。向き替つて北の方を見れば、屛風の樣な一帶の山脈がある、其麓三分許りの所から松の粗らな小山が、數限りもなく錯綜して其間には人家や山寺が散見する。その奥まつた一つの谷あひから此の川は流れ出て居るのだ。何處の花嫁やら華奢なショールに之れは又不釣合な古びた傘をさし、逍歩ゆたかに橋を渡つて行く、自分は

それを追つた。

橋が盡きると二十戸ばかりの村落がある。藁葺きの軒が皆低いので、一見冬の寂寥を思ひ浮ばす、眞中に立つてある青竹は酒屋の目標、其隣りの稍高い瓦棟はお寺である、寺と酒屋、酒屋と寺、何だか妙だなと思ひながら立つて居ると、途端目の前へ駈け來た一臺の辻馬車。

「あ、馬丁さん、待つて頂戴!。」車窓から見返つた千歳橋は、又新たに落莫の感を起さした。行く人もない欄干の霜に、ひゆうと一吽り冬の風!!。

(評) 描寫微を穿てり。

○樂しき團欒

とよ子

はなやかなる初日の、すきもる影と共に、春の風にもまさりて、溫かき我が家に、新らしき年はめぐりきたりぬ。

まだほのぐらきに起き出てつ、清き若水に、面さへ、改まりやしけんと心地よし。鏡のまへに髮は手づかねのSまきに、水色のリボンかざし、み園おしろひ淡く粧ひて、梅ねずみ色紋羽二重に、大きやかなる梅白う出だせる上着に、白無垢の肌ざはりも心地よく打ちきて、手にあまる厚板の廣帶、しめんとするに、いつ起き出てけん、弟妹の、こも美しう着かざりて『姉樣おめでたう』とは、常のいたづらには似もやらず可笑し、妾もいとまじめに『おめでたう』といひかはしつゝ、佐倉炭の香高き火鉢に同胞四人、八つの手かざして、凧よ羽子よまりつきよと語り合ふ時しも、大よろこびに喜び居たる姪の英夫の、眼すりつゝも、ほゝゑみて起きて來れるに、溫かき湯に面清め、小さき筒袖の紋附着すれば、『やあお正月が來た來た』と、手打ちつゝ喜ぶに、『五つになつたね』といふに、『まだお雜煮たべないから』といふ、皆々うち笑ふ、『お雜煮が出來ました』との聲に、まづかけ出せしは末の弟と英夫なり、『姉ちやん行かう〱』と、今日は妾の手ひきて、とび石つたひ、座敷へと急ぎ行く。床の上には、亡きお祖父樣御秘藏の松竹梅のかけ物、下には小さき福壽草の、われは顏にほゝゑめるも、時に合てをかし、障子は全く開け放されたれば、華やかなる初日は、木犀の木の間もれて、新しき疊に、暖げなる影うつせるもうれしくて、あゝ樂しき初春かなと、ひとりごたれぬ。やがてお祖母樣、父樣、母樣、兄樣もそろはせ給ひ、家例により紋附召し給ひぬ、『おめでたう御座います』



おしごと　麹町　川村のぶ子

と、嬉しき面にもこれのみは、あらたまりていひかはしつ、黒塗高足のお膳の前へと進み、屠蘇くみかはして、お雑煮などいたゞくに、餅の香、屠蘇の香は室にみちわたりて、こゝにお祖母樣は七十六、父樣は五十六、母樣は五十、兄樣は二十六、弟は十六、妹は十三、末の弟は九つ、姪の英夫は五つ、守夫も無心の中に二つの春を迎へ、下女の秋は二十二、妾は花の十九となりにけり、父樣は屠蘇機嫌美しう、例のお謡も出ぬ。小さき弟の『僕はお雑煮たべて、大きくなつて軍人になる』といふに、父樣お謡のこゑとゞめ給ひ『なに、さうか、今日は年の始めだから、皆の將來の目的を、きいて見よう、兄さんと豊は分つて居るが、お前は』と弟に問ひ給へば、『工業學校に入つて、あの川に鐵橋がかけて見たいです』といひ、妹は『良妻賢母になります』といひ、英夫は『大將になりたい』とぞ答へぬ。『姉さんは、良妻賢母にはならなくつて』とは妹、兄樣の『姉さんだつて』と、ほゝゑみつゝ、妾を見給ふに、何とはあらず面の赤うなりて、父樣の樣なり。『それぢやあ秋は』と弟のいへば、『どこにも參りません。一生お宅に置いて戴きたう御座います』といふ。父樣の『よくいふてくれた、だが己れがきつとよい婿を世話してやる』と、いひ給ふに、『アラ又旦那樣のあんなことばかり』と、これも赤うなりて、逃げ出せるに、手うち笑ひさゞめき、果ては『年の始』の、歌唱へなどするに、家庭の暖かさは、室のうちにみち〳〵て、床の上のいかめしき鰕さへも、心なしにやほゝゑめるかに見えたるもをかしくて。

（評）目出度美しき家庭なる哉。

○田舎の朝　上毛　關根意磨子

まだ太陽は出ない、金山の色も黒ずんだ紫である、そして、農家の朝餉炊ぐ烟が、ゆるく茅屋根から立ち昇つて、樫や松や杉の木を廻つて、續き續いて金山の麓を、取りまいてゐる、其上の空は、淡桃色に染め出されて、何ともいへない、西の空には、スッと一刷毛、胡粉で輕く撫でた樣な、淡い月の影が殘つてゐる。赤城山は眞白に雪が降つて、高潔な容姿をして、北の方に立つて、今眠から覺めた樣、西の方の雪は積つてゐるが、淡黒色の淺間山の頂からは、今噴き出したばかりの煙が、譬へ樣のない純白な、大輪の牡丹の花の樣、それから南に連なつた秩父の山の上には富士の嶺が、そびえてゐる、此美しく雄大な景色は、實に朝でなければ見られない。

足下に、滔々たる響幽かに、流れてゐる川の岸には、水際の枯草の葉に、氷の玉が連なつて、優しの女神の頭にかけた寶玉でゞもある樣、そして水面からは、水蒸氣が、ホヤリ〳〵とあがつてゐる、川端に下りて、

水晶の樣な水をすくつて、顔を洗へば、まるで顔が切れる樣、思はず身震ひしさうになつた、然し手拭でよくふいて、空を見上げた時の心地は、何ともいへぬ。

一田圃距てた向ふの村からは、家毎に烟が立ち昇つて、そこからもこゝからも、鷄の聲が聞える、さうかと思ふと、霜の白く降つた田圃の、所々に生へてゐる桑の木には、頰白がチヽと鳴いてゐる、鎭守の森の方からは鳥の聲が交つて聞えると思ふと、葉の無い柿の木には雀が囀つてゐる、實に平和な、のどかな、田舍の景色である。

川沿の道を向ふから、馬の鈴の音リン／＼と、この寒いのに、早や鼻唄交りに來るものがある、見れば村で評判の稼ぎ手の權さんである、ほんとうによく働くことだ。

東の空は金色に變つたから、早や太陽が出るには間も無いと思ひながら、家に這入らうとして障子を開けると、遙るかに聞える勇ましい嘶、今權さんが牽いていつた、あの馬であらう。

（評）淡々たる中に詩趣あり。

○夏の夕

羽前　朝岡溪外女史

力なき夕陽の光が山寺の五重の塔の頂きを照らして居たのも少時の間、しきりに鳴いて居た日暮しの聲が一つ減り二つ減つて、何處の鐘かかすかに暮を告げて居る、もの靜かな夏の夕、こゝは淋しい鎭守の馬塲、年の春秋二度の祭に村の者どもが草を刈るばかりて、其外には誰も掃除をする者もなく、又誰も參詣する者もないので、馬塲一面は草生ひ茂つて見るかげもない憫れなさま、其兩側にくづれかゝつた杉垣の間から、月見草が二つ三つ月待ち顔に蕾をもたげて居る、此の靜かな、しかもこの淋しい鎭守の馬塲を、年は十六七でもあらう、やつれた青白い顔に亂れかゝる後れ毛を夕風に吹かせながら、鎭守堂の方へと辿て來る一人の少女がある、丁度その少女が蔦蔓の匍うて居る少さな鳥居の下をくゞつた時、其上を友に後れた一二羽の夕鴉が、ガア／＼と飛び去つた、其かげが遠く西の空に消えるまで、少女はもの思はしげに眺めて居たが、やがてまた思ひ出した樣に、スタ／＼と苔のむして居る石段を昇つて、其側に流れて居る筧の水に手足を淸め、後れ毛をかき上げながら恭しく鎭守堂の前に伏して

「どうぞお母樣の御病氣が一日もはやく癒りまするように……」

庭の糸櫻は二三日前に散つて、春雨がちなる淋しき夕此の世の中にたゞ一人、杖とも柱とも賴む母親が、風の心地とて床に臥したが因となり、日毎に重る病の看護に日夜心をくだく甲斐もなく、昨日よりは今日、今日よりは明日と衰へ行く病躰は迚も藥の力で助くることは出來ぬと思うた娘のお道は、村の鎭守樣へと願をかけて百日の日參跣足のまゝて、雨のふる日も風の吹く夜も、親を思ふの一心から、自分の苦痛を露ほども厭はぬ孝行娘、今日は丁度百日の滿願て、彼も定めて

あり難い御利益を頂かうと思ふのであらう。

「鎭守さま…今日は百日の滿願でございます…どうかあり難い御利益を頂かして下さいますように……鎭守樣お願ひでございます……」

やがて彼れは其側の柱にかけてある御籤箱へ手をかけて、チャラン〳〵と二ふり三ふり振り動かした、其音が、うす暗い境内の寂寞を破つてひゞき渡つた時、引き出した一本のみ籤は、そも凶か吉か、うす暗くて讀みにくいのであらう、今手にさし上げて見つめて居た彼れが、不安の顏色は見る〳〵うちに美しい笑みと替つて行くさまは、丁度青白い曉の空を旭のひかりが彩るかの樣に、やがては滿面溢るゝばかりの笑みを浮べて、嬉しさに堪へぬのであらう、其み籤を押し頂きながら、手の舞ひ足のふむ所を知らずと云ふあり樣、その嬉しさうな顏といつたら、それは〳〵靑春の詩人が、美はしい春の野に、理想の佳人と出遇うたときでもとてもこんなうれしい顏は出來まいと思うた、それも其はず。

十二大吉……波をさまりて帆は順風に向ふ

といふありがたいみ籤だもの、やがて彼れは其みくじを元の箱に納め、再び堂の前に伏して

「有りがたうございます……鎭守さま誠にどうもあり難うございます………」

美しい顏に無限の喜びを浮べて、前に倍した足並でサッサッと出て行つた後姿が鳥居のかげに消えた時日は全く暮れて、堂の後で明日の日和を告ぐる梟の聲が、ホーホーと二こゑ三聲もの凄くきこえた。

（評）神も孝女の心根をあはれんで冥護を垂れるであらう。

◎春　　さぬき　しげこ

◎花。朝日の影に匂ひ出でゝは、大和心のいさぎよきにたとへられ、遠き高根に咲き亂れては、雲か雪かとあやまたれて、諸人のみやび心をあくがれしめ、神代の昔より、かず多き年月をふれども、花にあきし春なく、咲くを待ち、散るを惜み、なべての人に、こよなう愛でらるゝは、いかなる花の幸にか有らむ、世に花は多かれども、櫻に勝るものなし。あはれこの花は、とつ國には匂はずと聞けば、遠き國々の人にまで、もてはやさるゝも、げにさることぞかし、されば此の花の咲き匂ふ吾が國人の心は、たれも、かくぞあらまほしき。

◎野遊。日頃苦める神氣をはらさばやとて、親しき友と廣野にあくがれしに、こゝにも春の光の滿ち渡りて霞も匂ふばかりなり。芝生の道をのぼりゆく、名も知れぬ小草のわかやかに生ひ出でたるが、ゆかしければ暫し立ちどまりて摘むに、今日は摘草には來ぬものをと友にかこたれ、あわてゝ翻す袂を、くゞるらん樣にして蝶の舞ひのぼりたる、心なしのものやと、いとゞ

にくし。
◎梅月。おぼろの月にあくがれて、行くこと一丁ばかりにして、梅雪園あり、薫もゆかし梅の花、折も折とて笛の音の、雲にひゞける心地して、花も散るなり笛の音に。
◎春月。峰に積れる白雪も、ふもとに消え殘る泡雪もいつしか花になりゆく春の日の習ひとて、いみじう、打ちかすみたるに、夕ざれば、照りもせずくもりもはてぬ月影、煙の末にほの見えたる、いとうれし。月の匂ひか花の光りか、おぼろなるけしきなりや。

（評）「花」すぐれて美し。

○見返橋

石見　人の子

麗かな春日和。花といふ花の花粉を取て、若草萠ゆる綠の野に飾ひ落した樣に石州街道の右と左とに擴つてゐる田圃を、同じ色に染出した菜の花は今が盛、幾十町とも限り知られぬ菜畑の向には、薄紫の衣を纏てゐる石見富士が嫣然と霞の間から笑を洩して、勝利者の胸に輝く金鵄のそれにも似たる春日の光を浴びて居る。田畑の畔、森の影、村の人家、薄霞の中に點々として一幅の畫を廣げ、十里の山村水郭、宛ら靜なる湖の如くである。大津停車場へ通ふ三臺の馬車が、木槿垣に沿うた路上の土烟を煽て、けたゝましく過去つた後には、橫頰冠のきよろりとした鼻の高い田舍老爺が何やら獨ごちて行くのと、どんよりと霞んだ空の間から、雲雀の聲が聞える許り、靜かなる田舍の午は再び元の寂寞に歸つた。庚申塚から凡そ十丁、滑かな街道が少し宛勾配を持て稍高まつた處に一條の野水が眞綿を引はへた樣な雲影を宿し乍ら、街道と十字形をなして流れてゐる。其川の名は何といふやら、固より川巾も五間に足らぬ位なので、春の歌に耳を傾けぬ里人は殊に此川に名づけなかつたらしい。只もう一條の名無川水は綺麗に澄渡つて、白い小石が碁石を並べた樣に透徹つて見えてゐる。川の邊には一本の柳が青々と芽を吹いて風に靡いてゐる間から日傘がすら〳〵。つひ此間迄架られて居た危い土橋が今は立派な木造の橋となつて塗立のペンキの惡臭が鼻を突く樣、白文字で『見返橋』と橋の名迄鮮に！。と見れば低く綠の襞を疊める山々遠く薄靄こむる峰々笑めるが如く吾を空想の中より迎へた。炊烟立昇る小村落や、こんもりとした村の鎮守や、恰も水銀の色彩の底に漂はされてゐるかの樣、夢

山と海　大阪　西端芳枝



かと許り薄靄の中に浮んだのが見える。静かな春の一日！。

（評）一層の洗錬を望む。

○春の日の記　神田　長井漣月子

朝。春雨しと〳〵とふつて、町で雞が一羽ぬれた尾を引きづゝて、クッ〳〵と鳴きながら餌をあさつてゐる、どこからか、手風琴の音が聞えてくる、雨の中をビショビショと郵便屋さんが忙しそうに通ると後から燕が一羽雨をくゞつて來て向ふの酒屋に入つた。

蛇の目の傘かたむけて十七八の奴島田の娘が通つた、雨は斜めになつたようだ、あゝこのふりでは桃山の桃も散るであらう。

晝。雨はいつしか止んで屋根や庇から湯氣がポッ〳〵と上つて居る、向の人が金井とかいてある傘を四五本日向にほした、小雀が三四羽塀からとび下りて傘のかげて何か拾つて居たが人の足音に驚いてぱつととんだ時、一人の男が露しげき緋桃や白椿や菜の花蒲公英等を車につんで、花や〳〵と呼びながら引いていつた、さつきからチン〳〵とひゞいてゐた鐘の音は、近よつて來て十四五の小巡禮が一人歌を唱ひながら、筋向への家の前に立つた、日はやゝかたむいて巡禮の後姿にあたゝかい光をなげてゐる。

夕。赤々と燃ゆるような夕陽が向ふの森に沈まんとして、屋根も庇も障子も人も小犬も皆赤くした時、かすりの着物に短い袴をはいて編笠をかぶつた二人連のほふかいや、一人の笠の紐の赤いのは女であらう、二人は月琴と琴をかゝへて、背には刀や旗等をおふて、何か面白そうに話しながら通つた。

日は全く沈み果てぬ、刻一刻と夜の靄は朧に淡くこの静かなる町を包み終るのであつた。

○春寒　札幌　杉山萩枝子

冱えた二十日月は、瑠璃の樣に澄み渡つた中空高く、青白い光を下界になげだしてをる。

妾は今工塲の歸り、春とは名のみて、冬にも増して寒い夜風に、顔の半ばをショールで包んで、例の大路を急ぐのである、晝ならば馬橇の鈴、馬の嘶き、馬追のドラ聲に、それはそれは喧しいこの街路も夜は流石に静かである。

妾が工塲へ通ふ樣になつてから今日で二十日、今夜で二度目の夜業、吁々情けないことではないか、か弱い婦人に生れた者が、男でもしそうな勞働、如何に運命が拙いからとは言へ、思へば厭になつて仕舞ふ、が併し一人の母君が病床にある事を思ふと、そんな弱い心になれないのである、と思へば疲れた身躰も活々として、眠い眼も冴えるのである。

何時の間にこゝまで來たのだらう、此路次一つ向へぬければ妾の家だ、嘸やお母さんは待つて居らつしやるだらうと急ぎ渡つて路次へはいらうとする途端。

「ほんとうに、今度のお母さんは怖いのねえ、姉さん、」貸家の貼札のある、庇の出張つた軒の下、淡暗うてよくは見えないが、年の頃十二三に十才ばかりになる哀れの少女、二人は姉妹てあらう。隅の方に小さく成つて居る。

「此間なんか、ほら、お父さんがお役所へお泊りの時にさ、ほんとうにねえ。」

今更忍るゝものゝ樣、戰慄したのは姉で、苦しそうな溜息を吐いて襟の中へ首を縮めたのである。

「兄さんは東京のどこに居らつしやるんだらうねえ。」

姉は獨言の樣に言つたが、是又首を縮めた。

妾は是より聞くに忍びなかつた、聞かなかつたのが寧ろ幸であつたらう、が併し可憐なる彼女姉妹の身の上に就いて略推察が出來る。

ゴオン／＼と力のないしわぶきの聲、ハッと思うて見れば、妾の家の門なのてある、あゝもつたいないお母樣は妾の歸りを待つて居て下さつたのか。

妾のお母さんが彼女二人のお母さんだつたら。

○友の姿　長野縣　山田くに子

「くにさん!!!」とやさしき聲が戸の外で聞えるので、誰だらうと開けて見ると、まあ嬉しい事、私には二つまさりの、懐しき友芳子さんてした。

芳子さんは本年數への廿歲、しかも私とは魚と水の如く、親しき／＼仲て有ります。

此度御良縁あつて御嫁入遊ばしたのですが、此三月のお節句に、お里へ歸つてお出たのてす。

それだものですから、夫人と成つた芳子さんに、此度が始めての御對面。私は一種異樣な感にうたれました。

さあ／＼こちらへと室に入れて、後にまはつて吾妻コートをぬがせ、紅メレンスの座ぶとんを進めました。

あゝ、見れば見る程艶な、花嫁樣にお成なすつた事。ふつくり結た束髮が、やゝくずれかゝつたのを、紫のリボンで危く支へた昔と異り、毛すじ一本亂さない赤の手がらの丸髷、銀の平打かんざしと、金蒔繪の中形櫛、頭にどこやら品がそなはつて……。

薄玉子色の風通のお召物、厚板の丸帶キユウとメめて、帶止のルビーが殊に美しく、濃小豆絞りんずのお羽織しなやかに、肩の邊スラッとして……。

「芳子さん見ちがへたわ」と思はず口を辷つたので、互に眞赤に成つてしまひました。

話はおさだまりの昔戀しやて、とても／＼はてしが無い、小學校の運動場で、「垣根に匂ふ山茶花の――」と、美しき聲で歌ひ乍らテニスやブランコに餘念なかつた、其頃の樣がアリ／＼と目に浮んてきます……。うその樣だ／＼と私は再三くり返しました。ほんとに女は一度は、かう成らねばならぬのですけれ共、私はどうしてもうその樣で……。

三時間の樂しい時は、短く／＼流れ去つて、もう六時ですから別れねば成りません。

芳子さんを送つて村境の、橋のたもとまで來てしまひました。
「さようなら」と手を握つたまゝ、熱き涙をハラ〳〵と手の上へ落しました、又いつ逢れる事やらと思つて…。漸くはなした手と手とは、あゝ又いつの日か握り合されませう。
ふり返り〳〵行く芳子さん。私は橋に彳んで、ジイッと見送る…あゝ二人の胸！美しい丸髷も、こげ茶のショールもだん〳〵薄れて、つひに全く夕靄の中に溶けて行つてしまひました。なつかしの人の影なき靄を茫然と見つめて立つた私の目にキラリと光る物は何でせう、み空の星が宿つたのか、はた草の露が甦つたのか、冷い〳〵二つの玉が………。

○臺灣の春　臺灣　吉田喜勢子

麗かな春の日に、友達と手を携へて、ほど遠からぬ野に遊びました。內地とは、ことかはり近頃の暖かさ、けれどほこる梅も櫻もありません、たゞ緑したゝる小山の間に桃の花が今を盛りと、色をほこつて、ゐるのみです。そして黄いろかつた田は一面に水と化して、丁度湖水か海の樣、まづい筆には中々かきつくすことはできません。又、緑の毛布を敷いた樣なひろ〳〵としたところには、水牛が三々五々おいしそうに草を食つてゐる、其の間に水牛守の子供等が樂しそうに面白い歌を歌ひつゝ其の脊に乘つては下り、下りては乘り遊んでゐる。內地では見えない風致でせう。

いろ〳〵の話にあいて
來れよ友よ野にいてゝ

歌つてゐますと、どことなし、君が代の唱歌、ふと、ふりかへると例の土人の子供、…其の時には何んとも云へない感じがしました、誠に北の端から南のはて、至る處、君の御惠によくして、君が代祝ふその聲ののどけさ、と。
私等は今更らながら、明治の御代のありがたきを感じました。

○宇治橋　近江　宮城梅子

自分は今、薄ら寒い春の川風に吹かれつゝ、宇治橋の上を、とぼ〳〵と行きつ戻りつしてゐるのである。
山に倚りかゝつたやうな小綺麗な宇治の町。その遙背後から、夢のやうに覗き込んでゐるのは、河内の金剛山であらう。金剛山から西北へかけて、烟つたやうな山脈が、天王山や、男山を波立たせて、まるく倦う遠捲きに、長閑な空に蜿蜒と匍匐うて、その正面は少しばかり山が缺けて、どんよりと霞に消えてゐる。霞の向ふは大阪であらう。
足下から山までは、廣々とした一帶の平野。青々とした美しい麥のシートが、鍬を擔いだ人や、白い姉樣冠り

や、さては白壁、藁屋根の入り交つた村、こんもりした木立などを、遠く近く浮模様にして、目も遥に展ぜられてゐる。宇治川は、春の日影をくだきつゝ、緩くこの平野を、夢のやうに霞の中へ流れて行く。

上流の方は、面を壓して山又山。石を嚙み、木の根を洗つて、琵琶湖の水がはるばると、この橋の下をくゞるのである。鴨長明が棲んでゐたと云ふ日野の山つゞき、宇治山の松の木の間から、ちら〳〵と、風雅な家が見えて、溫い湯の氣が、絶えずたなびき出る。こゝには溫泉の浴場があるので。

平等院は手に取るやうに見える。御堂の棟に、古びた一雙の鳳凰が、聲もなく、くるくると風に廻はつてゐるのが云ひ知らず寂しい。

自分は今、蜘蛛手に流るゝ歴史の潮の、そのたゞ中に立つてゐるのである。

━━眩ゆい初夏の日が天王山に落ちた。夕暮の色がひし〳〵と襲つて來て、淋しい鐘の音が、濕つぽい空氣を顫はして水の上を渡つた。

寶塚溫泉　大阪　米子



○高原の秋　　下野　津和野道子

林を辿り盡ると眼界がぱつと開けて、はてしない薄原、千丈ヶ原千丈ヶ原と皆異口同音に云つた。妾等の進んで行く道は、此のはてしない原の遠くに、淋しげに立つて居る落葉松のまばらな林に消え入つて仕舞ふ。噫！何と靜寂な原ではないか。此處にあるものとては、茶屋が一軒、たつた一軒ぽつちりと豆のやうに、そして落葉松林の他は、皆一面に尾花で南に北に白うなびいて居る。

羽を休むるものが無い故か、此の上は鳥さへ越さぬ。青鈍の秋の色を帶びた雲の、いくつかちぎれ〳〵北に飛んだ。「飛ぶものは雲ばかりなり石の上」の那須野のそれよりも、妾は之を淋しく感じた。先生も友どちも同感なのか、誰も聲無く沈默をつゞけて歩むばかり、ふと神經質の田村さんが、沈んだ聲で「まあ、高原の秋は淋しみの深いものですねえ」。

夕は近づいた。臥龍の樣な前白根は、白妙の姿を薄紅に染めて、千丈ヶ原の盡る西の極に横たはつて居る。

夏のよりも秋の夕日は華やかで無いと思つた。

灰色雲のいくつかは、紫金の糸にくまどられて北へと飛ぶ、そして又元の冷たき灰色となる。後を向けば男躰山は大きな體軀に嚴然と夕日を浴びて、赭色に薫じ、

此の野に王と告げるが樣。

落葉松林は目前に迫つた、然し原は未だ半分も盡きないのである。林は枯れたのやら倒れたのやら、其の儘に積み重なつて、踏むとじめ〳〵した氣もちの惡い音がして、足は半ば沒して仕舞ふ。先生は原始的だと云つた。それは眞に太古のまゝの樣で、此の積み重なつた下の下には、何か大なる神秘でも潜んで居る樣に思はれた。夕日は力無う薄らいで野の寂寥はいよゝ增して來る。

鳥が一羽キキーと鳴いて朽木を出てゝ朽木にくゞつた。其の聲は、長く〳〵餘音を引いて、林を越え野面を渡つて、はても無う消え去つた。

濃紫に高原は暮れて、紺色の空には淡わい利鎌のやうな月。

○其　夜

伊豫　福井さゆり

寢床に入つて、ウトリ〳〵と夢路を辿る折柄、忽焉として天外聲有り、安眠の夢は空しく破れた、蒲團の中で耳を澄ますと、つひ先程迄寂として極く靜かで有つた天地は、時の間に物悽い風の音、恰も魔王が其暴威を振ふかの樣、吹くは吹くは、庭の松の木は折れそうな聲、岸打つ波の音は刻一刻と音高く、荒れに荒れる大風は戸を叩き、障子をゆすり、宛然家をも吹き仆しさう、暫くする内沖の方には、しきりに人聲が騷がしく、果ては助けを呼ぶこゑが、風のまに〳〵聞ゆる、海岸の事なれば潮につけ風につけ、時々大難が持ち上るので、今宵も俄かの大風、不意に押寄せたので、又も難破船が出來たのでは無いか知ら?、今は家內中誰一人も寢て居る者はない、猫も杓子も此大風では目が覺めずには居られぬ、餘りに海が八ケ間敷ので海岸に出た、折しも十五夜の月は中天に皎々として、凄い樣な光りを投げて居る、荒れに荒れる西風は、砂を卷き、波のしぶきは、大雨の降るよう、面も振り向けられぬ有樣、數多の小舟は木の葉の漂ふ如く、一上一下波の山谷を昇降して居る、村の舟持は、荒れ狂ふ波を事ともせず、必死と働ひて居る、遙か沖の方、白浪渦卷く中に、一艘の荷船が波のまに〳〵漂うて居たが、見る見る錨が引け出し、アワヤ其船體は、惡魔の如く白波をかみ碎きつゝ有る岩角の爲めに、打ち破られねばならぬ運命に陷つた、危機今や一髮、船員は頻りに大聲を放つて救助を求めるけれ共此大風暴波如何共し難いので有つた、左れど俠氣の村夫等は之を棄てるに忍びず、意を決して小船に打乘り彼の船を望んで漕ぎ出した、山なす大波を押切つて!!漸く本船に至るや否や、エイヤエイヤの聲につれ、辛うじて波止場の內に引入れたので、幸破船を免かれた。跡には彌ます怒濤狂瀾、吠え嘯き岩も碎けんかと思ふ程、サモ恐ろしい勢で有つた。翌朝海濱を眺めると、あはれ昨夜の俤は、平和の曙光に葬られて、其荒れ狂ふた海面には、金波銀波を流して居た。

新體詩

河井醉茗先生選評

二等

○太陽の歌

牛込區鶴巻町五四九　岩谷　綠子

惡日なりや、鈍色の
雲髪低う地に垂れて
氷雨は濡つ、隱れ沼、
水面濁りて音もなく——

蘆の枯穗は低頭れて
惱める人の姿かな
ちかき白樺の木立にも
（寂寞）の翼擴ごりて。

かくして晴れぬ、雨はれぬ、
白樺の木々の間より
濃靑の空はほのめくや、
萬象は光に潤ひて——。

赫灼と照る太陽は
（歸依）（憧憬）を示しつゝ、
黄金色なる瞳こそ
戀の餘にもゆるなれ。

在巢の鳥は巢をいでゝ
日を仰ぎては歌ふなり、
水葉がくれの藻の花は
光をうけて醉ひごゝち。

——

冬籠する沼姫も
恥ぢ給はずに舞ひいでゝ
崇き尊き日の神の
あつきみ唇を吸ひ給ふ。

一躍進境を示す、君、北海に在りし頃より詩才凡ならずと見受けました、京に入りて新調を見るのもこれ當然でせう、幸ひに都ぶりに狎れたまふな（醉茗）

三等

○ありし琴

四谷永住町一番地　岡部なか子

君が心を思ひ草、
染めし模樣の琴ぶくろ、
とけば古びし糸きれて、
別れの其夜笛の音に、
あはしゝまゝのちのくばり。

そゞろ心地にうつむけば、
ぬかにこぼるゝ前髪に、
挿しかざしのぬけ落ちぬ、
琴にやふれしかすかなる、
糸はねをこそたてにけれ。

おとなしく、女らしい詩（醉茗）

五等

○越路の冬

小石川區久堅町七十四五十一片岡方　井上　勝子

幾日積りし白雪の、
寒けき衣の一色に
越路を走る山々の、
夢は眞白く凍りけり。

天そゝり立つ立山の、
白髪氣高き老武者を
眞中に守る山波は、
之や一坐の白蓮華
其一瓣の遠方に、

散りて浮ぶか佐渡が島、　遙に海の春にして
天のうてなを戀ふるかな
やがて夕日に花瓣の、　皆金色に燃えゆけば
涅槃に入りしみ佛の、　聖き骸もしのばるゝ

越路の冬、彷彿として眼に映る、佳作です、終の佛の聖骸は忍ばなくつても宜しかつた(評者)

秀逸

○破れしコップ

岩代　齋藤巴子

花草畵きし乳色の、　小さきコップは破れけり。
わが枕邊に夜を守りて、　寒さに水の凍りては、
脆き運命の迯へやらで。
寢られぬまゝに夜は明けて、障子に日影さしそへば、
魂はわづかに目覺むれど、　疲れはてたる身はつひに、
起きもえやらず横たへぬ。
痩せし腕をさしのべて、　碎けし破片を手にとれば、
痛ましいかな、美はしき、　魂はいづこに迷ふらん、
亡骸はとはに冷やかに。

破れしコップも好い詩材、惜い哉今一息の處があります、腕伸べて美くしく缺けたるコップを取てまてはよろしいが、魂はいづこに迷ふらんは少し變です、然う云はずに外に工夫はあつた筈です(評者)

○悲愴なる夕べ

横濱市　錦戶彩子

紫雲薄れて紺青の、　色に暮れ行く夕づく日
雲のみ袖のほころびを、　わが世と光る星のかげ
うつし流るゝ川の水、　滾々盡きず、とことはに。
夕べの煙模糊の間、　森のみ黑うほの見えて
塵の世いづら、かげもなく　森羅萬象聲音あらず
あゝ寂寥の夕べかな。
萬物やすむこの折に　何を憂愁の何を悔恨の
何を煩悶の若き子よ、　沈默の天空を打ち仰ぎ
流るゝ水を見下して、　胸の鼓動を抑壓んと
焦慮る乙女の膓たけさ。
兩手を胸に組み合せ、　天に祈禱を捧げつゝ
あゝ、今生の離別かと、　思ひ迫りて血の涙、
未だ二十年にみたぬ子が、　ありとあらゆる世の負傷
小さき肩に負ひにしが、　今耐へかねて身を棄つる、
乙女は投げぬ、身を投げぬ、奈落の底にや沈淪けん、
あゝ悽絕の夕べかな。
藍色流す川面に　漾ひ浮ぶ藻か草か、
怨恨の長き黑髮や。

暗き森蔭、寺荒れて、子を失ひし親鳥
憂に鳴くらん啞々の聲、あゝ悲愴なる夕べかな。

少し寫生文めいて、詩の要素が却つて少いために、あゝ悽絶の夕かなの感が伴ひません(酔茗)

○凌霄花

福岡縣　平塚あき子

木の葉の翠したゝりて、幾歳あをむかくれ沼
八尋の底に巣をくひて、鱗古りたる雌のおろち。
天上りけむ雄を追ふと、
風雨の夜半を紛れ出て、
綺羅のみ姿戀しさに
背てかゞやく星姫の、
老松まいて尾をうてど、
玉脊はれしかなしさは
雲呼ぶ力あらなくに、
さてかづらとはなりにけむ。
瞋恚のほむらそのまゝに、身をばこがして花と咲く
こは十丈の凌霄花。

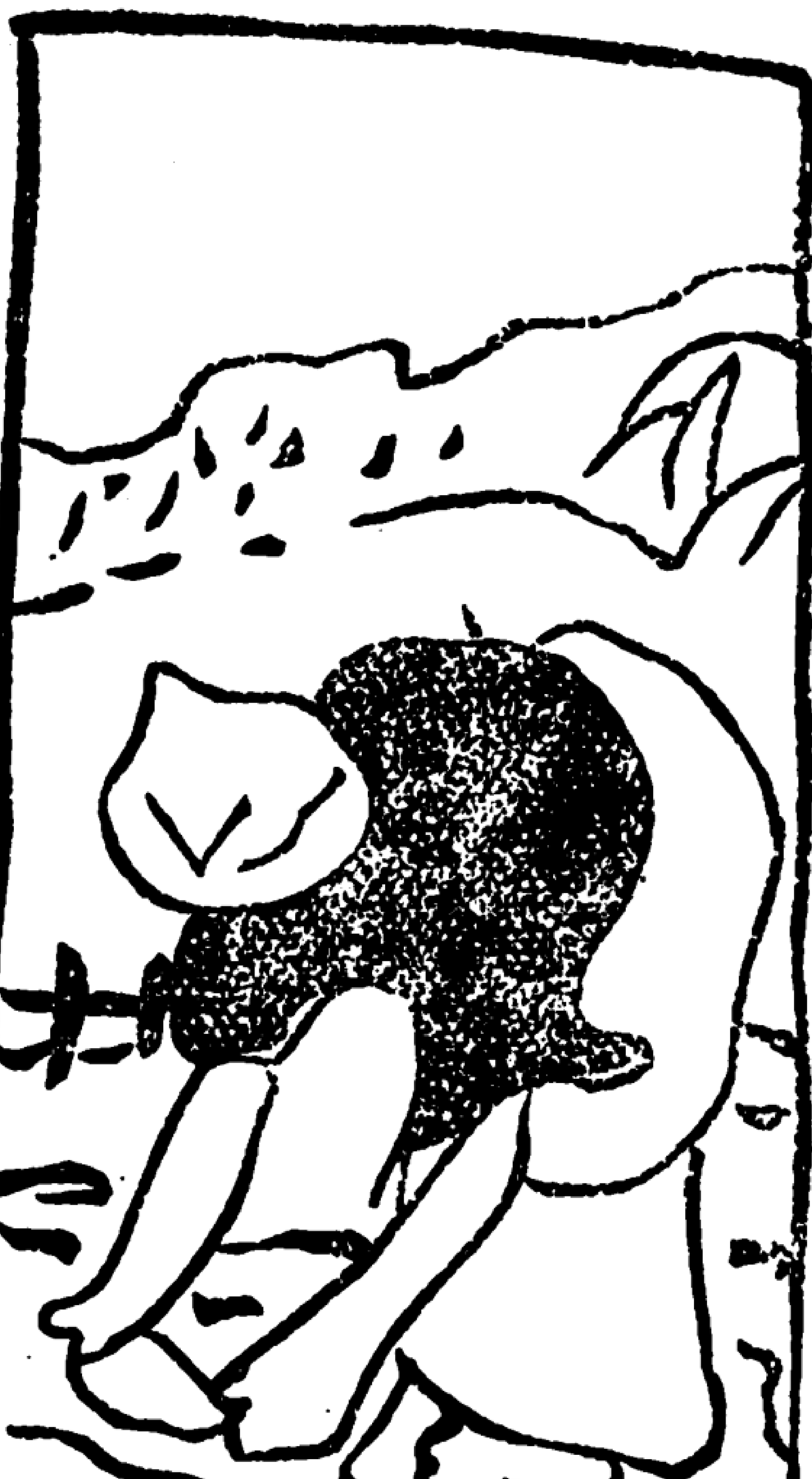
凌霄花はそんなに凄い花でせうか(酔茗)

○春の日

千葉縣　ふく子

鳥啼く聲につと立ちて窓しあくれば。
蝶ひら〳〵心の駒を遠に誘く。
今陽炎は野に焔えて若草薫り。
そよ風の幻をこそ運び來れ。
雲雀霞みて山笑ふ京の田舍を。
はなやぎて行きずり匂ふ櫻人。
また近江路の舊き道杉の臥木に。
腰かけて驚聞ける旅の衆。
菜の花匂ふ大和路をなづかしみ、
法螺鳴らし峰入すなる山伏等。
あるは長閑けき寧樂の晝。
鹿の子にされて大佛の鐘に興がる都人
病あがりの徒然を目にこそ浮べ
みな古りし記憶のかげの美しさ
風に飜れるつばくらや綸風を眺め
われは今瞬くひまをかく思ふ。

俳句から來たやうな趣味もありますが、春の日らしい長閑さの眼に浮ぶやうな句もあり繪畫的の詩(酔茗)



逃霞　福島縣　五湖なみ子

○夕榮

成田　波賤女　天波子

雲を彩る夕榮の暫し輝く様を見て、
人よ其の美を追ふ勿れ。
やがて懸らん夜の神の闇の裳に包まれて、

榮華の色も失せましを。
夕日にうするゝバビロンの荒涼とせし城址に、
昔の影を訪ね見よ。
風蕭々と星暗き阿房の宮址に古の、
榮の夢を探り見よ。
春長へに春ならで浮世の花のひと盛り、
穠むるに早き色見ずや。
人生一睡の夢さめて人永劫の門くゞり、
天の玉階に跪き、
短かき過去の歴史をば神の判決に享くる時、
人の子の叫を聞かん耳ありや。
彼の天上と此の下界光りはそこに通へども、
隔つや幾重、雲と地と――。

（暗鬱の痕はありますが、詩語の排列無意味でなく、一の形は整つてある（醉茗））

○常闇　周防　河村小藤子

永劫につゞく廣野は、　坦々と果しいづく。
青春き火に狂ほひし魂　躓きぬ――覺束なくも
歩み來し跡かゞなへば　朦朧と夢にぞ似たる。
吐息しつ惱みて立つは　常闇を死よりも黒き
妖雲のつむじて渡る　沙漠のそれよさなりき。
左より、右より、ひゞく、　魔の子らの誘ひの聲に
とまどひつ懷疑に惱む　わが命あたひあるらん。
値なき命いだきて　あらた世になり出でんずる
わが胸の底居の魂は　鳩の子の小きに似たり。
オワシスや、清泉、渇を、　醫すべきと夜を蹲まりて
手さぐれば先なる人の　足掻跡、しどろもどろに。
まつろへぬ想は寄せて、　とまどひの苦痛に堪へて
平和がん希望を嘲み　干戈とりて奮鬪はん。
わが魂は惡魔の鐵繩に　つながれて奈落深き
牢獄を去るすべをなみ、　叫べども反響はあらず。
永劫につゞく廣野は、　坦々と果しいづく。

（暗黑、暗黑、復暗黑、傑出した作は皆暗黑な作ばかりて、かたよる事を忌む選者も是ては何とも詮やうがない（醉茗））

○嫁ぎし春　岩代　三浦たい子

賤に生れし女なれば　何を望みてねがはんや
母のふところ安うして、　ことなく育ちし十八を
賤が男に我は嫁ぎぬ。
春幾度か迎ひたれど　こは初に逢ふ花の春
霞裳ひく青麥の　五寸をけぶる風にして
畑打つ鍬のはぢらひや　たづねんの人は父ならで
粟蒔く加減夫に習ひし。

眞情流露、野調ながら愛すべき詩(醉茗)

○病める友　品川　鈴木うた子

月落ちぬ、　沈默を通ふ夢の帆は
蒼褪め寒み——海は今　浪立ち嘆く
禍夜の、　底や——色なき埴の星
沈みつ消えつ病人の　鈍き瞬き

小さくても眞珠の光はあります(醉茗)

○おぼろ夜　近江　今村野百合

こひの文千巻積む　華はしの天つ宮、
おん主嫦娥姫　艶やかの玉のみ面、
み光りの溢れては　人の世に幸こぼす。
み垣守る衛士のむれ　星男らのはしたなみ、
さかしらの口評さ——　「美しやさは妙や、
妻とぞ呼ぶ幸あらば　この命捧げなむ、」

其の一人痴れ態に　斯くいひて打笑みぬ。
面影を見するこそ　なか〳〵の憂ひよ、
然は斯くとおん姫は　若き恥はにかみに、
羅の被衣召す　み光りの仄もれて、
春の夜は朧ろかな。

興じたる様は確かに見えます(醉茗)

○沼　土佐　潔子

名しらぬ草は醜女の如き、　時知らぬがにほゝけ立つ
一と草むらの陰にして、　妖けひそむと古沼見出でぬ。
ゆらゆら登る奇し氣に、　毒薬を溶かすとおのゝけば
水の面てのきら〳〵と、　人の子よわしと冷笑に似たる
神のかもしの美し酒、　そとふりまきて青錆したる
古甕たゝきて餘韻も高く、　野面にひゞかせなげにしか
あやしの色に沼底は、　夢の如くも際涯を知らず
小石ひろいてつとなげば、　何とも覺えずうめく
神話こもると詩人は云ひ、　さても奇しき古沼
名しらぬ草のほゝけ立つ、　一と草むらの陰にして

格調、詩意、双つながらわざとらしい處があるやうです、最もなげやりの作ではありませんけれど(醉茗)

○農夫　　札幌　杉山萩枝子

君、天地の靈にふれて　若き農夫と生れたれ
命運の神も田園の　幸をけがすに伎たらず
さればよ君が踏める土、　時にみどりの草をしき
ときに彩ある花をおき　趣味ある君が世をかざる
知らずやたかく朗に　あしたの鷄のうたふとき
戰ひすべき農人の　胸に神秘の音おこる
さては響の深きより　畠の小麥はみのるなれ
さてあたゝかくやはらか。　夕の夢はむすぶなれ
雨とそゝぎていと熱き　愛よむつびよ言はずあれ
青き葉がくれ野葡萄の　その紫の房を見る

天地の靈に觸れては少し、大げさてした、農夫の歌の起首としては外にあるてせうに(醉茗)

○春晴　　上毛　かるかや

春上つ毛の野は青み、　道ゆく笠も陽炎ひて
雲雀巢立ちし青麥は、　五寸ばかりも伸びたるに。
今日二荒のみやしろへ、　金幣まゐるみ使と
みやび姿のひと群は、　松のみ並ぶ海道の
砂になれし足並みに、　野をこそたどれ下つ毛へ。
草ふく庵の軒の上に、　かすむ筑波は小さうして
民みな謳ふよろこびに　公方樣日和のどけくて
ゆら／＼風も光るかな。

錦繪のやう(醉茗)

○君戀し　　德島市　知惠子

わが眼には、　地に下りて、
穢なき戀を、　淨めたまふ、
天女と見えて、　人を戀しぬ。
「ああ其人戀し。」

うら若き少女、　とまれいま、
わが慘虐を、　敢てせむ。
君を思ふの、　心の上に、
「あゝ君戀し。　大罪は犯すも！」

あはれ胞。　下手人の、
罪は負はさじ、　悖のかて、
捕へといふに、　何を拒むや？
「とらへむとまで、　あゝ君戀し。」

「君戀し。　其君戀し。」
夕まぐれ、　わがむねの、
いさゝ小川や、　細ながれて、
白塔あはく、　影いと長う、
水に搖らぎて、　しらけ失せぬ。
「ああ君戀し。　わが胸戚えしらけ――――。」

水に搖ぎて消えて行く戀の想ひ、情烈しくてことば足らぬやうです(醉茗)

○羽衣の賦

下野　鈴木雪子

野守姫に花守姫の
ま白ろなる絹につゝみし
美しき蝶の彩羽を
銀の籠にみたしぬ
紫雲英菫の花を
黄金なる籠にみたして
歸り來ぬ天の宮殿へと。
ひと日また梭の音して
花衣、羽衣なりぬ
野の姫はほゝ笑みながら
花守の姫をかへり見
美しき衣裳をもちて
佐保姫の宮殿に走りぬ
想像自在、詩才縱橫（醉茗）

銀と黄金の籠を
春の野の花に狂へる
終日をあさりあるきて
またひと日花野あさりて

○緋桃にそへて

さゆり子

彌生の風に桃の香ゆれぬ、
姫が賜びにし緋の舞衣
ほこりがに舞ふらん桃の精、
折りて結びてかざしませ、
歌の香あまき口びるに、
み詩封ぜし瓶に挿して、
咲けるは何處と問ひますな、

一枝うるはしき君に贈る

先づやわらかに觸れ給へ、
好みし聖き詩うたひませ、
往くことかたき夢の國、

朝の精凝る花の國
眞白の冠り嚴かに
深紅の冠り花やかに
霜雪霰と闘ひて
勝ち誇りたる花の國



教室　靜岡市　大石しげ子

○思出

姫がみうたの使はたせし、
ひめは十九からら若き、
美しき戀の太息か、
夢の大宮の玉の楷に、
うるはしと見しはさても此花、
君がみ髮にかざしては、
こゝほがらかに歌詞して、

ゑにしに許りて夢境に入りぬ
あくがれ心地何羞らひや
虹ゆらめきぬ藍のとばりに
姫が房髮すべりし響

いかにふさはめ桃のくれなゐ
それよ羽衣の曲舞ひ給へ、

麹町　山下里子

夕靜けき冬のころ
雲うちかくす村山に
赤う射したる夕日かげ
手活けし花のしほるれば
又もさびしき心かな
花には淸き思ひなる
咲くをうれしむそゞろゆき
香りゆかしき白梅の
あゝ風無きに花のちる
塚のあたりの苔むして
墓ながくひく母が家に
面かげ見ゆる目とづれば
さびしきまゝにおぼゆるを
たゞ思出とわれはなしなむ

○花薔薇

日本橋　宮島みちを

五千の官女集りぬ
薔薇のきみは立ちませり
びさうのきみは立ちませり
雨と風との威によりて
雄々しからずや朝の色

○心

常磐幸子

詞に綾を飾るとも
胸に包みし秘事は、
例えば廣ろき海原の
底白浪の奥なれば
神代の昔定まれる
君が心のすべてをぞ
許すも心許さぬも
探るにかたき人の子の
あゝこの心如何にして
あゝこの煩悶如何にして

戀は花と匂ふとも
あゝ我手で探りえん
いと安らかに見ゆれ共
珠玉や潜める海蛇や」
妹背の契り結べ共
あゝ我手で占め得べき
心の底の深うして
煩悶止む可き時もなし
永久に占め得ん術もがな
永久に忘れん術もがな

○戀波

本所　緑早苗

青葉さゆらぐ朝にも、
わが胸琴は高鳴りて、
濱の砂礫にむせびては、

花雲映る夕べにも、
寄する戀波とこしへに、
絶えずも君を思ひぬるかな

○山ずまひ

福岡市　河原白百合子

春とは名のみ山凹の
風は鬼を呼ぶ冬林
行きこふ雲の足はやき
訪ふものは病葉のみ
おとす涙はおそかりき
春は霞の七彩の
いとよき母を野に捨てゝ
今や獣想の糸きれて
壊るゝ如く毀れては
眠りはさめぬ二十歳の
子として呼ばん人やある
母は返らぬ遠つ世の

天台山の霧とけて
五重の塔のいたゞきに
雨に暮れては山住の
母に別れて現世に
青春き血潮の狂ひては
あこがれたりし幻も
砂の上なる塔の
心のさびを誰れか知る
母を慕ひて死なぬ身を
星は南に落つれども
すがりて母と一言も
許されざりし我れは罪の子

○虹の浦

北品川　丸山たつ子

金色ながす彩雲に、
漁の舟に揺られては、
ほそく笑みする海人の子の、
まばゆき眞砂白妙の、
波にたわむる鴻の、
亡き人戀ふる松浦の、

波の穂匂ふ朝明を
玉の宮居のやすけきを
唄ふになれし虹の浦
磯邊に寄する女男波
聲は浦曲にひゞけども
姫の御靈はいらへせず

○白酒

小石川　斐子

緋桃白桃美しう、
雛の數々白酒の、
君もと人に强ひられて、
思はず置きし盃に、

銀燭榮ゆる雛の殿
香に醉ひ顏におはすかな。
取る手もいたく戰けば
紅桃の花浮びけり。

○その日その夜

芝　川島たつ子

額に輝くあかき灯に、
婚姻の式も昨夜とすぎ、
處女心のなにとなう、
心おどりて口紅を、
その日その夜の忘れがたなと

羞かしかりしその宵の
今朝のうれしさ羞かしさ
失せもやらぬに言ひ知れず
指にうつして日記にしぬ

○早春

本郷　多滿子

わか栞の花に籠ふせて、
仰ぐともなき春畑を、
あけぬに聲をやはらげて、
われかの人にまどふごと、
楡よりそよぐ朝風に、
春のおもひは寒うして、

うす紫にさめし野の
雲は遠峯に流れたり。
牧の板戸に愛よべば
しばしを立ちぬ小ぐさ路。
わかき希望をうなづけど
雪消に愁む胸あられ。

○うき雲

小石川　馬場晴子

松まばらなるあら磯に、
かろきたもとをはらませて

立てる女のうしろかげ、
あだなる匂ひ送るなり。
筧の水の音すみて、
閉し勝なる下やかた、
たゞ身のけはひ思はれて、
もの丶あはれのふみにしも、
立ちてながむる松並木、
うたのみ長く殘るなり。
さゞなみしげき世の岸に、
やがて消えゆくうたかたを、
浮きたる榮はかなしみし。
葉ゑがき紅ぬりて、
知るや知らずやふりかざす、
夕日落ちゆく須磨の浦。

○梅

春立ちしより朝日かげ、
心と共に長閑にて、
花笑みそめてかんばしく、
開けば尊し父君の、
手植ゑられしと母上の、
よき御敎え聞きにけり、
今よりわれも此花を、
學の道にいそしまむ

○夜半

十六夜の月影朧ろ、
眼は冴えて若き希望に、
堪えかれて一人悶ゆる、
夢見る心地。
咽ぶが如く泣く如く、

夕しづけき汐風に、
いづくか遠き雛の聲、
あせゆく薔薇の花見れば、
さすがうみてか眞砂地に、
牛車かくる丶夕もやに、
白木綿花の亂れては、
ながむる時や浮雲の、
擲ぶるも春はうつらふを、
指環きらめく細き手に、

赤坂　森本はな子

さすや學びの我まどは
のきばにかざす梅が枝も
書の上までも香ふなり
まだうら若き御時に
いとれんごろの敎えなり
清き此花咲きにけり
心の友とちぎりつ丶

長野縣　芳枝

世は靜か更け行くま丶に、
憧憬る丶胸苦しさに、
枕べに通ふ音波、
絶え入る如き妻琴の、

我世をかこつ忍び音に、
やがて暗にと消えにけり。
面やつれ思ひに瘦せし、
我おてに行燈の心、
想ひある身はしかすがに、
啓示の聲と身に泌みて、

○姉を失ひて

あはれ傷き人の子の
女二十の春淺う
吁我姉は逝きましぬ。
三月胸を病みてより
惱みながらも身にひめて
よくも裂けずにありしかな。
かて丶加へて去年の初秋
病は不治ときくからに
月に泣きしも幾たびか。
梅咲きそめし朝より
身に代へてもと神かけし
あ丶姉はゆく夜見の國へ。
なやみの胸を抱きつ丶
暗き死の門とひ逝きし
み胸思へば泣かる丶よ。

○早春

永き悶えに我心
大地は凍て丶鐵と
深山を出し鶯に
我はしも今愛の光

夜半の寒寂は破られて、
いかなる人の手すさびか
手弱女が淋しき夜半の、
かき立て丶かきならしけん、
自然の母の眞ある、
深き思ひに沈み行く。

紀伊　田中文子

此の世の幸にうすうして
花の薫りの空しくも
堪へぬ想の二とせを
忍びしのびし其胸の
御身惱しうふし玉ふ
そゞろに姉のいたましく
病はいよ丶重りゆき
我願事も容れられず
五彩の雲の彼方なる
我に一人の其の姉の

三重縣　吉田仲子

氷室となりぬ冬の人
嗚呼白雪の榮もなき
一日眠りの夢醒めて
温き和風吹くとしみれば

朧月夜の白梅の　靈き薫りの只中に
春の泉の湧くに似て　詩人の胸は輝き初めぬ

三河　わくらば女

○節世帶

裏小路なり、いた廂、主人七十路、荒藁の
殊に寒き風情にて、縒れがちなる手をふるひ、
（とんとんと、とんとんと、まだるげにうつ筬の音。）
小ねずみ、そよろ這ひ出づる、上り框の冤束な、
餌を見て集合ふしのび音を、錆聲に叫びとつ追ひつ。
（とんとんと、とんとんと、筬打つ音は小止なく。）
あら目にあめる竹の床、仄暗がりの室ながら、
注文の藁か增く、古き香薫りぬ、濕りの香。）
（とんとんと、前よりは稍高き筬の音。）
霜どけ路に、跳泥飛てゝ行きずりに寄る小男の、
『蓮は未だ？』と軒にして促し顏の佇立や。
（とんとんと、うちもゆく筬の音は絕えなくに。）
『注文に追はれ、日に追はれ、身を病みたればゆるされつ、
延べて給へ』と口籠る、煩聲寒き老いの笑み。
（とんとんと、とんとんと、とんとんと、とんとんと。）
さはれ、客は絕えばこそ、入り違ひ來る客人は
注文の人よ、あゝ爲の老木に纏ふ過絡。
（とんとんと、音は低く、はた又高く懶げに。）
頭搔くものとは知りながら、節世帶の哀しさに、
五斗米儲る術なしらざれば、うけがひてこそ歸しつれ。
（とんとんと、打つ筬の、翠は微かに黄昏れぬ。）

福井縣　片山千里

○樂しき家庭

夫はひれもす炭をば燒いて　妻は毎日機をば織りて
留くなりとも休まぬ故に　着てる衣服は美しふない
食べる食物旨くはないが　狭いながらも家まで建てゝ
僅かながらも山まで買ふて　浮世の富など願ひはせぬが
神に佛に夜晝二人　お願ひ申した子供も出來て

神戸市　臺あや子

○琴

うらぶれの我れ明日よりは、かなしき旅にまよふ身の、
今宵一夜のこの曲ぞ、七年なれし汝に我が、
せめてと惜しむ別れぞや。汝は吾が友、吾が心、
十三絃の糸ごとに、通ひて知るか自から、
櫻にそゝぐ雨今宵、深きあはれに響くなり。
汝をのこして行く我れの、淚のあとに緒は朽ちて、
絕ゆるも淸き汝が魂は、自然の領にとこしへの、
無絃の音をかなづらん　さらばよ小琴淚の音に、
冷たき夢の破れては、松風通ふ旅の宿、
夜半の枕に汝が魂の、妙なる調傳へよや。

名古屋　白玉姫

○畜羊技師

鷄曉を高宣れば　棠香ふ露ゆれて
見よ東の大御座　發矢飛び散る金色の
瑞をこめたる彩光　野にも山にも廣ごりて
牧場の草は息吹きけり。
緋襷かくる少女子は　けぶる芝生の中にして
紅の唇ふるはしつ　國々空に高吹けば
集ふ小羊幾百頭　ほゝ笑ましげに列なすな
眺めもあかぬやさ少女。

佐世保　花田うらの

○春潮賦

若き戀の譜奏てつゝ　ひた／＼寄する春汐や
玉藻の匂薫りきて　行くとしもなき逍遙に
胸の煩悶を忘れたり

沖はみ空と語りつゝ
雲解けて流るれば
あゝ佐保姫の宮戀ひて
玉の櫂楫にいなさとり
夕日は名殘の征矢投げて
たくみはいとも鮮やかに
山の麓に謳迫る

○紅薔薇　信州　玉蘭女史

宵々の夢にひそみて、
人知らぬ悶抱かする、
くしや汝戀の睦魂。
美くしう花と咲きては、
小草野の朝を飾りて、
眞鏡に燃ゆる焰のこと、
湧きかへる血かくれなゐ。
試みに近うあゆめば、
裳にからみ袖にもつれて、
手强うも我にすがるよ。

○友を思ふ　芝區　智惠子

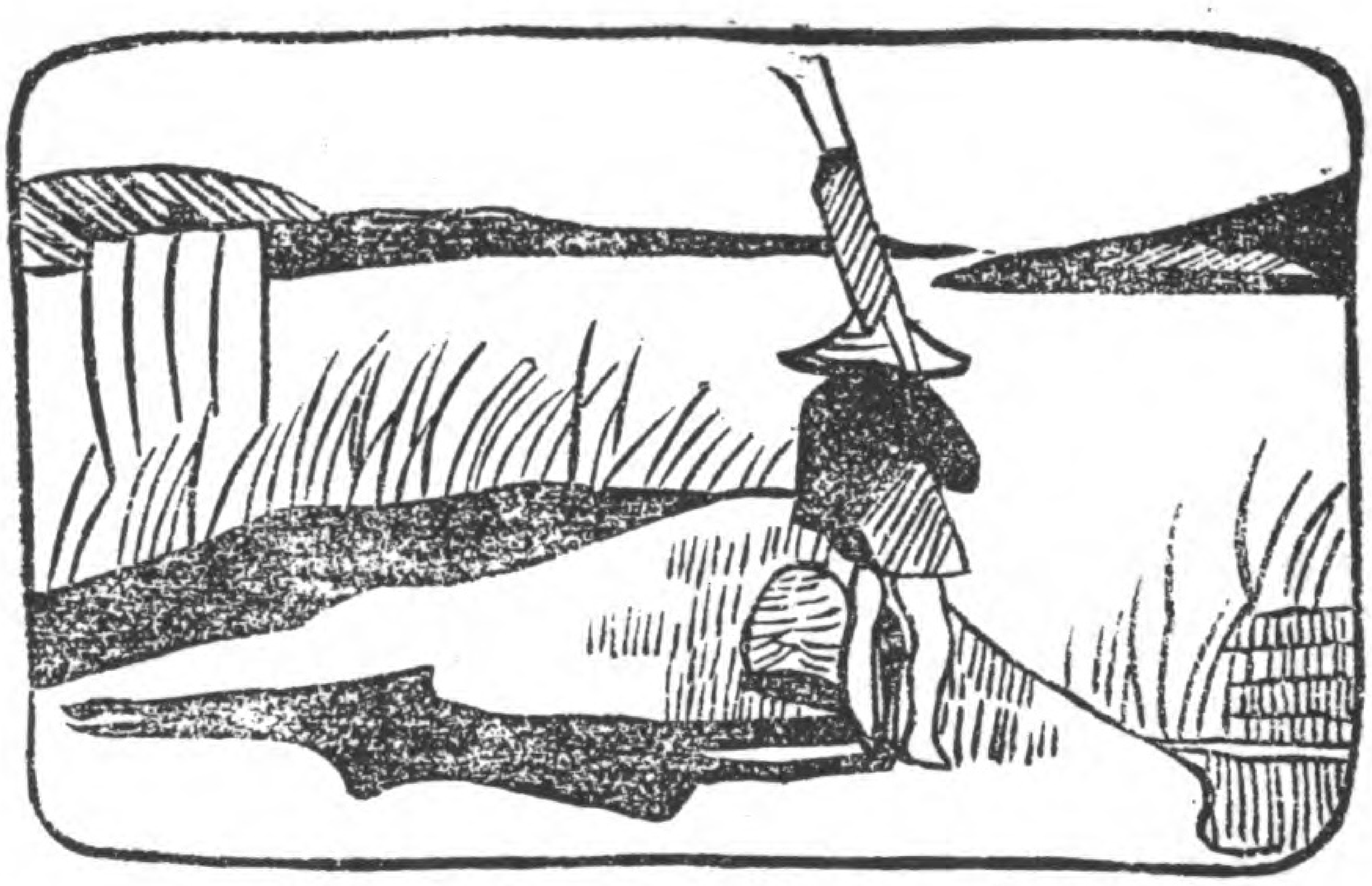
梅咲く春の風まどふ
今うたゝれの夢やれて
思ひは遠き夕空に

月かげ低き去年のよひ
もつれはなるゝ夕まぐれ

熱き泪やあふれけん
海は宛ら紺碧や
鷗は飛びぬ磯の邊に
欸乃高く謳ふなり
汐の光美はしく
磯の夕は和ぎて

ふたたび君と別れにき。

青柳風に吹かれては
淋しき袖をわかちしが



日中漁魚　遠江　大和櫻女

年はめぐりて又春に
雁の一聲ひくけれど
盛りの梅は寒ふして、

陽炎に若草煙り、
麗の歌も響きて、

おぼろの月を見てし時
君やいづこをまようなるらん。

○殘雪　近江　詩の子

今日しも降りし淡雪の、
名殘をとむるむら消や。
元より星のまたゝきに、
美き花結ぶ芽を秘めて、
育まれゆく菫の、
影をたのみの雪なれば、
四寸に充たぬ魂かな。
さもあらばあれ汝しこそ、
千草下紐とき初めて、
甘露漂ふうまし日を、
もの皆競ふ驕樂の、
夢現なる其時も、
教訓みちし冬姫の
情けのしもと忘るなの
深かきさとしと見つるかな。

○野　相模　島ふみ子

淡紅色の花の彩幕、
引き染えし武藏の廣野、
瓔珞の彩雲ゆりて、
雲雀誦す黎明の曲。

蒲公英や菫咲く野路、
風光る牛の斑や。

紅草履紫の波布、　爽じつゝ草摘む袖に、
ひら／＼と黄蝶白蝶、　もつれては夢とあと追ふ。
かしましう笑ひさゞめく、　一群は花見人らし、
假裝せる人も交りて、　春の野はいよゝ映えたり。

○春の曲　本所　磯野胡蝶子

うてや鼓を春の曲　無絃の琴を掻き鳴らし、
胡蝶は園に舞をなし　優しき花にたはぶれつ
庭の梅木に鶯は　緑の羽衣現はしつ
零れて冷しき朝風に　庭の初鶯引き去られ
仰げば高く碧御空　胡蝶は高く舞ひ上り
白雲しづかに動きつゝ　春の長閑をいやましぬ

○闇の夕暮　佐世保市　藤村しな子

春の夜なりきたゞ一人、　詩の香薫ゆれる四疊半
苦吟の情ひ走らする、　筆をしおけば春の日の
しづかに暮るゝ櫺見えて、　灯火うすろゝ油やつきし
ふと見上れば床の間に、　春野は黄なる菜畑の畫
今し消ゆらむ灯火の　菜の花にのみ殘るかな
薄黄に殘る春の日の　たゆたひがてにうすろれば
やがて沈默の夜としなりぬ。

○倒さ富士　熊本縣　松崎かた子

『櫻咲く國うるはし』と　白きおん手に瑠璃宮の
とばりかゝげて一の姫　下界のさまに見惚れしが
微吟のみ興おどろかし　雲髪をすべるおん簪。
雲を尾に曳く碧玉の　七顆おの／＼地を墜つて
あはや碎けぬ――精凝りて　さて湖ぞ成れりける。
おとを慕ひて天降らし　姫は眞中に座をしめて
芙蓉かざせる常若の　玉のみ姿あら尊と
七つの湖にうつしては、　笑みますさまの倒さ富士。

○戀の賦　常陸　島村露子

槍をすりて夜の神が、　星を鑄るなるそのみ火を、
盗みてし寃の運命ある、　人は燃えてかあゝ戀は。
緑の髪にさしそへて、　紅きを君に白きをば、
われにたとへし薔薇の花、　あゝ其の花散りて君逝きぬ。
散るべき花の戀ならば。　咲かせじものをあゝ吾れの
絶ゆべき糸の緣ならば。　結ばじものをなまなかに。

○雲　下總　山崎波南子

今しもくれん夕燒の　殘んの光色うけて
七彩香う彩雲の　西行く雲を眺めつゝ
旅にやつれし悶え子が　夕の窓に身を寄せつ
故郷遙かに見やる時　雲の行方はいづくぞや
あゝ吾まだうら若き其の昔　希望の星にあこがれて
幼心の思ひ出に　故郷遠く旅立ちて
仇涙荒き東路に　昔は星を宿せしも
蔽える雲のあつくして　希望の光消えはてぬ

○紅筆　島根　人の子

星は神秘の光清く　人の子とはに許し得れば
もだえあくがれ戀に戀ひて　淋しくうけし胸の痛み
こもるやさしき歎やあると　紅筆折りて水に投げぬ
怪し白玉亂れ飛びて　浮ぶなになる黑き姿
思はずすゝる衣のさやぎ　なのゝく胸の高き響
恐怖かあらずあはれ我は　我は少女と生れたれば

短篇小説

廣津柳浪先生選評

二等　○妹

周防國熊毛郡
淺江村山王原　岡部佐保子

高等女學校に通學さす爲めに、或る遠縁の家へ下宿させて置た妹が、頻りに轉宿したいと言つて寄越すので、一應事情を聽いた上でと返事をすると、三日目の今日、日曜でも無いに歸つて來て親同胞を驚かしたのである。湯から歸るのを待つ間、自分は書齋に考へ事して居るとやがて妹は母と一緒に這入つて來た。

「お母樣も御一緒ね。」

「はあ、お母樣にも聽いて貰はなきやあ。」と妹は莞爾する。

水に濡れた束髮を奇麗に梳いて、上氣した樣な兩の頰に紅を差したのが、灯影に映じて美しい。けれど何處となく皮膚に艶がないので、そゞろ平常の心の苦みを思はせる。

「まあお座りよ。あのう急だけれど、餘り氣に懸るから」——と言淀んで、「廣瀨の家は何故惡いの？。」

「何故だつて姉さん、仕樣がありやしないのよ。」と打萎れる。

「何うと言ふんだらうね。」母も心配そうに問ふ。

「御家內は唯三人でね。」

「え左樣よ。」

「お家は嘸有福だらうね。」

「夫れやもう、有福ですとも。」

「あゝ其麽返事計りして居ては解らないよ、早うその理由を話さなきあ……。」母ももどかしげに急込まれる。

「御主人は會社の重役ね」
「え、然して大變な正覺坊よ」
「正覺坊つて」
「はあ常も奥樣は左樣言つて居被るよ。もう素敵な酒飲みて、日に二升は缺さないて。夫れに一人でもお客があると、直ぐ近所の藝妓屋へ使を飛ばすの」
「まあ其麼」母も自分も呆れ返つた。
「だから奥樣が大變な嫉妬でね。そう妾が行つた最初に、奥樣そう仰言つたの。あの主人が呼んでも彼の室へ行つちや不可ませんよ、あれや大變な酒飲みだからて！」
「それに又恐しい粗暴な方なので、家の事などは鳥渡も構ひは爲ないの、全然奥樣は御主の監守！」
「困るね」
「其一人息子は美術學校へ通ふて居らつしやるがね、又恐しい自墮落て、多分親の遺傳と小い時からの寵愛が過ぎたのでせうよ」
妹はその情に熱した眼を擧げてほゝと淋しう笑ふ。
「それも最初の頃は頭も毬栗、着物も木綿のごつ〳〵てしたがね、此頃は見る目も可忌しい程、其の服裝と言つたら女子が及びませんね」
「ふーむ。」思はず嘆息の溜息を洩らす。
「夫れから種々な珍しい物買つて來ては、妾に下さるの。」妹は力なさ相に頭垂れて、頰を眞紅に染めた。
「學校へも一週に三日か四日、始終妾に附纒ふて繪なんか描いては下さるの、妾もう怖くて〳〵」
妹はほろりとして涙聲。額髮が顫へて居る。
「眞實にね」之れ限り自分は聲が出なかつた。
「何日ぞやも妾の居間へ來て：：：：：頭から妻になつて呉れないか！て、まあ苦々しい！妾可厭ですようて逃げ出すと：：：：：」
妹は遂にしく〳〵泣き出した。
「机の上に在つた本の表紙へも中へも、妻、道子、戀悶煩、なんど書いて、終に道子さん妻に成つて下さいよう！て。ほゝゝ。」之れには妹も自分も母も、涙の中から笑ひ出した。
「夫れを淡墨で隈取つたり、繪具を塗つたりして、終には筆を本の上に投げ捨てゝ置いて、墨汁が二十枚も浸み込んで了つてよ。あゝ口惜しくて〳〵、今思つても戰慄としますわ！」
灯影は水の樣に流れて、無言の三人を照した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

其の夜自分は妹と一緒に床に就いたが、その亂倫な一家を思ひ、其の中に飽くまで苦心した妹を思ふて、萬感縷の如く、遂に一睡も爲なかつた。

妹の無邪氣さは活寫されてある、世には斯んな家庭もあり、斯んな純潔な少女もあらう、筆端銳くと云ふてはないが、蠶の絲を吐くやうに、思ふ通りの事が出て來る處、亦好個の才筆。（選者評）


米子樣のおすがた　大阪　秋子

四等　○落花　近江八幡　今村のゆり

「三つ」現無く櫻花の散るのを數へながら、椽側に膝立てゝ、茫然と成つてゐる修念、頰杖の肱の痺に頤辷りて、不圖氣が注いた如に張のある眼を視張つた。風もないのに梢から、又花がはらはらと零れた。

「あゝ、私も今茲は最う十八だ」窃と溜息を吐く。幼少時分に此寺の和尚樣に拾ひ上げられたとか、何も知らぬ稚い時から、和尚樣の情けとは言へ、佛弟子の身となつて、あゝ今年既に十八、若い身には憧憬の空慕はしく、榮達の翼に千里の風を乘切り度い望みに、小さい胸には、得度の式には乃公が剃刀を採つたとの自慢話の和尚樣の情け、なか〳〵に恨めしう、行く行くは此寺の住持にとの、時に觸れての其れと無い持掛話に、修念は若い眉を人知れず顰めるので有つた。

「こんな寺で朽ちるのは實に殘念だ、一層、一層……」飛び出さうかと、修念は心でつぶやいた。いざと言つて目途は無いが、東都には車引いてさへ、牛乳配達してさへ苦學する人も多いものを「何矣」と若い額には瑞々しい希望の影が……。

「修念や、修念や」方丈の方で咳が聞えて後、恁う呼ぶ聲がする、修念は緇衣の袖をいぢりながら立つて往つた。

「方丈樣、御召しで」障子を細目に開けて、叮嚀に額づいた。

「ホウ、修念か、今晚宗清寺樣が御座るぢやに依つて喃、碁盤をよく拭いてな」「畏まりました」修念はまた

靜かに立つて往く。
「御苦勞ぢや喃」他人に聞えぬ如な低聲で、恁う言た儘、方丈樣は書見、椽の方に當つて美い聲で、鷄の啼くのが夢のやう。
修念は復た椽に出た、何數へてか、指を屈なへながら太柱に倚れ掛つてゐたが、つと思ひ出したやうに、庭下駄を突つ掛けて、飛石傳ひに櫻樹の下に往つた。絕え間無う散りかゝる落花を、珍らし相に一心に眺め入つてる。
麗らかな春日和、見渡す限り涯から涯ては水色をして澄み切つた蒼穹を、眞白な額を俯伏しに、下界を瞰みながら、むつくりと眞綿のやうな膨れ雲が、ふはりふはり、西の方へ浮いて流れる。
上を向いてゐた額に、無心の花瓣が落ちたのを、頻さ相に袂手の儘で掃ひ除ける。
「花でも散つて終ふ」寂し氣に恁う言つて、掌に落英を受けて、ふつと吹く。若い盛りもほんの霎時だ、と修念は思つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

夜は宗清寺の和尚が來られた、終夜、淨房て碁石の音がパチ〳〵、靜寂な夜の眠に冱えてゐた。
翌くる朝、常例に似合はず晩く目覺めた方丈は、枕許に一通の手紙を見附けたのであつた。
封を切つて讀み終ると、白い眉毛を僅に震はして、
「ホウ、修念も未だ若いぢや」恁う吐いた。
手紙を捲き終つて、其人が居るやうに、
「困つたら復返つて來るが好いぢや」恁う言つて、方丈樣はまた、目を瞑ぢた。
修念は寺を昨夜、出てしまつたので有る。

苦もなくすら〳〵と書き終つた手腕、文章に修練あるものゝ作と認める、趣向は寧ろ古い方てあらうが、文章は新式、面白く讀まれる。（選者評）

五等　○嫁仕度

さよ千鳥

「夫ぢや日が決ればおしらせするわ」云ひ云ひ歸りゆく友を送つて靜かな宵を針とる母の前、物思はしげに座ると「花江樣は愈々お嫁入かい」「えゝ」「大したお仕度だらうねえ」「さうてせうても彼方は澤山着物持だからいゝけど妾みたいぢや仕樣がないわね、是てよく女學校を卒業しましたねえ」「だから卒業させるには普通の苦勞ぢやなかつたといふのだよ、お前ても早く小

學校へ勤てゐれば着物位に苦しまないのをやれ教師なんぞ嫌だつて、云ふ事はきかず……」いつか涙ぐみ乍ら「父樣さへ生きていらしたら何でもないのだが。いくら仕度が出來なくても餘り身分の詰らん者に嫁りたくもなし」「それよ母樣、妾の友達は皆學士だの何だのつて立派な處へ嫁づくし又父樣の昔を思へば、さう詰らない人には嫁きたくない……」「兄樣は直に夫は虚榮心だつて仰やるけど」「然しね、當世の人は皆、財産や身分が先でね、軍人なぞ大抵將軍と云はれる方の娘を娶ふし嫁く方でも親の身分のいゝ爲に結構な家へ嫁づく人もあるのさ。此方なぞ小學校の先生にでもなつて仕度の助して嫁づくより外ないのだよ、兄樣の今の身ぢや到底も纒つたお金の出來る的はないからね」涙まじりにいふ母を恨めしさうに眺めた娘の「母樣は二言目には小學校の教師ね、いゝわ仕度が出來なけりやいつ迄もゐるわ厄介者で」

捨て言葉の遂荒々しう潸々と落つる涙を母はみて「私はね唯お前が可愛想ていふのだよ、普通の着物も持たせないで嫁入らせたくないと思へばこそ。だが飽く迄厭といふものを無理にどうといふのぢやないから。唯私も段々年をとるしお前の身も極まらず兄樣に嫁も娶はないでは死んでも死にきれないよ。ほんとに情ないねえ」曇りがちな眼鏡を拭つて針をとる。苦にやつれた母の老の手に足袋の破れ繕ふ樣を見れば云ひもしらず悲しくなつて小さな胸のせまるやう。

遠音に流しゆく按摩の笛の染々と身にこたへては、お孃樣と云はれて夢のやうに暮したは十年の昔、父亡き後を人並の教育うけたも母の賜物兄の情、夫を思へば一日も安閑としてゐられぬを唯美々しう着飾つて嫁入りゆく友許り羨んで此年來の母が苦勞も思はなかつた不孝者よ、意志の薄弱から虚榮に驅られて思へばこの三年、空しく過したが云ひしらず、恨めしく口惜しいと、明らかな思ひのひらめく瞬間、美々しう裝ふて花のやうな友の誰彼、とみれば、紫の袴をさばいて心淋しう小學校へと通ふわが影がありあり浮んで嘲けられるやうな輕蔑まれるやうな口惜しい悲しい、さて寂しい思ひがむら〳〵とわき出て、厭だ〳〵と無我に叫んでふつと氣付くと、母は小さう肩を縮めて、まだ一心に針を運ぶ。

床の紅梅かげ朧に更けゆく春の夜物音なく、此頃を夜な夜な歸宅の遲い兄はまだ戻らず、時計は十時をうつた。

書き放してない事は明かで、一語一句、皆用意がある、短篇だからとて、何の用意もなく書き流すと、眼が惹かないけれど、是れ位ゐ努めて書いてあれば、直ぐ作者の藝術的真心あることが分る、此作中の人物に思ひ比べて、ホッと吐息する婦人も世間には澤山あるであらう。（選者評）

秀逸

○なきがら

名古屋　とし子

慥に薄命な婦人である。自分自身でさうと思つてる、それよりも、事實は尙且非常に悲慘なもので。彼女は泣た、否、泣て居る！

滿洲下だり迄恁うして態々此上もない苦勞を爲に來るはさて、土となるべく、働きに來た、それも、黃金！鄕土に居た時黃金さへ充分と迄は行かずとも、右に左く餘り不自由のない迄に黃金のあつたならば、なンの、西を向ても東を向ても、どちらを向ても悉皆見馴ぬ人許、氣毒なのは、何も知らない、おゝ、ほんとに何も知らないのだよと、彼女は傍の、豚の燈油に糸の芯、はやその油も、宵から續けて搔上た故か今は滋々と音するがいかにも小氣味惡い、灯影小暗きが中に熟睡する子の、なンてそれでも……これから長い一生を過じて、此上の辛さ悲さのあらうかとも知らず、罪のない、まだ妾の乳に縋つてゝ、浪凄き玄海灘の夢でも見てるのか、あの時も、何千噸と聞くからに恐ろしとみた乘船の、宛ら木葉と一上一下、浪のまに〳〵任されて、生た心地もなかつた妾らに引替て、此良一の、那の時嬉々と笑つたが——僅た一人の、かけがえのない、一人の父の死をも知らで、這麼に、てもまア！……とその可愛らしい軒を聞て、ても、「悲」を知る妾一人は……

云ひ知らず沸きくる悲しさ果敢なさの淚に袖を覆ふたので。

幾つ鳴るのか、程遠からぬ院の鐘が、雨氣を含んだ大氣にさびしう動搖を打て、何とも知れない、それはそれは、厭アな感じを誘き出す——。

これが彼の、櫻に名高い故國の法應寺の鐘でらば、そして、わが亡き夫を弔の鐘であつたならば、

其座には、今こそ音信も斷てはをれ、優しい〳〵母なる人、そして右に左く、血を分た同胞もある！、其みなの家族打寄て淚に盡せぬ名殘を惜んだならば、同じ悲の裡尙幾分の樂もあらう、慰もあらう、が、一躰何う爲れば可のだらう、これで此悲い今夜も淚に明

て、明日といふ光明の世界迎へた時には……、かくてはあるまい、いかに頑是ない良一とても、子供乍らの右まれ幾分の涙はあらう、今迄は、假し貧困に一家みじめな樣ではあつたけれど、右まれ事無う、恁うして今日迄送つてたのも、まゝ云はゞ夫のお蔭だ！あゝその夫は……。

更に止度も無う湧出る涙のうちに切めて一目と、覆へる白布取除く。

そして、偶と思出てこれは、と立つも力無く、小暗い隅の何やら箱をごたつかせてたが、やをら持出しは幾本の線香、夢にこそ、宵々毎に見もする戀しい故國の習慣であるよと、二本の線香に火を點てそれが枕元に恭しく。爾て、見れば見る程昔の面影の今は僅に口元に止めて、いかにも窶々敷其顏を、見詰ればまた涙である。

其始め妾の恁うした緣の出來た時、多幸者よと妾は朋輩に羨まれたもの。財産があつて男が好うてと、云はれるとの、甚麼に妾は嬉しかつたか？ほんの一時の夢ではあつたが……。

ぐるり今寐返りを打て吳れたら、瞳然、此眼をおあきだつたらと、盡せぬ思ひ、彼女は魂なき夫の枕頭にて返らぬ事と知り乍ら。

其時更に、第二の鐘は響き渡つた。あはれあの鐘の音を聞く、それが故國で、あはれな人を弔ふのならば……と堪へやらず、涙を袖に、揑と其塲に泣伏た。


お城　和歌山縣　津田三女

舞臺を新領地に取つたのは目新しいのと、文章が上手なのとは本篇の特色であらう、悲哀を描す文字としては、未だ奥底に達しないけれど、なかなか味ひのある筆つき。（選者評）

○かはりやう

三河　花江子

「渡瀬峯藏は妻を貰つた。」同鄕の者で近日く家を飛び出して來たと言ふ青年が恁う語つた。意外、實に意外である。越えて七日這麼意味の書翰が本鄕なる僕の下宿へ舞ひ込んだ。――「僕は妻を得た、隣村の百姓の娘だよ。僕は順良なる農夫の一員として靜に鍬を取

つてゐる」と簡單な文字、言ふ迄も無く渡瀨から、末尾に「君も最う今年で卒業だつたね、偶には歸郷して東京の噺でも聽かせ給へ、――グレイの墓畔吟から僕は新に或るものを發見したよ。」と付け加してある。序に言ふて置くが友はグレイの詩の愛讀者で、那の墓畔吟は覺めて唱し暮れて吟ずるのであつた。

渡瀨峯藏！　渠は僕と同歳で二十一、自分とは小學時代からの友達であつたので、僕が笈を負ふて都へ上ると一月程經つて友も後走せに上京した。差當り僕等は同宿する事になつて、本郷に下宿を定めたのである。僕等の下宿――それは丁度南に面した二階の一間で、障子を開くと神田の低地が望まれ、至極見霽の佳い室であつた。家内は主婦と下女が一人と、十八九のお花と云ふ娘との三人の暮しで、男は一人も無く、主婦は五十恰好の極めて良い人、色々と僕等の面倒を見て呉れた。其の子だけに、娘が亦非常に溫順い性質で、瘦削な眉の濃い、眼のパッチリとした、それで居て何と無く淋しそうな面持、意志の弱い女であつた。

其頃僕等は双方共中學へ通つてた。友は口きゝの少ない瘦せ態の才子風の男、試驗も毎に首席にゐた程、頭腦も明晰し、學力も有り加旃非常な勉强家で有つたので、宿の者にも可愛がられ、主婦などには鼻に懸けて隣人に誇つたほど、ちやほやされたものだ。

其後僕は都合の爲め新花町へ轉宿する事に成つたが友は依然开所に居た。二週間程經つて訪れると、友は女文字の手紙を机の上へ展げて何か連に考へてゐる。入りがてに、「莫迦に考へてゐるぢや無いか。」と訖くと「困つた事が出來たんで。」「一躰什麽したんだ。」「僕は歸國するかも知れん。」「えゝ。」「母が病氣だつて今日手紙が來たんだ。」と言ひ乍ら、机の上の書面を僕に見せた。御家流の尋にも餘る書面には病床の詫しさが縷々と書いてあつて、「此の頃は最うお前の事許り想ひ出して爲方が無いから是非一度歸つて呉れ」といふ意味で終つてゐる。

「それで何時歸るのか。」「いやそれに就いて僕は今考へて見たんだ、何だつてもう一年で卒業が出來るのだに、夫れを今斯うして歸國すると、二度と上京する事が出來ぬ樣に成るかも知れぬ、若し那麽ヿになると僕の希望も何もかも無茶苦茶に成つて了んだからね……」と力無さそうに、「併し母も思つて見ると不自由だらうよ。下女が有ると言つて他人のヿ、たゞさへ愚痴の出るころだもの、病氣つちや………兎も角僕は歸

るよ。」
「爾うか、——さうし給へ、そしてまた來るとするさ。」
「來るとも、來ないで什麼しやう、那んな草深い田舍に躊躇して何に成れやう、母の所置のつき次第僕は乾度上京するよ。」
此の時遠くの杜の方で梟が啼いた。「あゝ梟が啼く。」と何とはなしに淋しさうに云つたが「歸る、僕は歸國する今夜歸郷よ。」と目を潤ませた。
僕は友の平常を知つて居たので、——友は梟の啼くのをきくと、何事も忘れて了つて、一向に故山を戀ふるのであつた。それは渠の家が雜木林に續いてゝ、冬になると梟が連になく爲であるのだ——いろ／＼となだめて「準備も少しはいるだらうから、明日にしたらよからう」と言つたが肯かず、主婦が止めたが肯かず、娘が止たが聽かず、其夜竟に故山へ歸つて了つた。哀寂しい姿を新橋に送つて二日目、無事安着の報に接し、其の後毎週のやうに手紙をよこしたが、それに毎も孤獨の淋しさと、境遇の不平とが縷々と記してあつた。或る時の如き予は萬難を排して多年の希望を達せなければならん、と今に出京て來さうな事が書いてあつた、そしてまた毎回のやうに、那の下宿屋の娘の安否、樣子如何、の伺ひがつけ加してあつた。それだのに——、あゝ、悟つたのか、墮落したのか、自分は知らぬ。墓畔吟に得た啓示とは何であらう、梟の節に稱讃の辭を惜ま無かつた。

選者ではあるが、引しまりが無い爲め、豫定の行數より長くなつたのはいけない、爲に大半は削り去つた、梟の聲に故郷を想ふあたりは好い、下宿屋の娘との關係など短篇には無理だらうとわざと削り取つた。（選者評）

○姉の心

小石川　奈美木翠子

雨模樣の寂しい夕暮を、とある細い露路を、とぼ／＼と溝板を辿る十四五歲の娘がある。漸う辿り着いた我家は未だ燈も點かない薄暗がりを勝手元では母が心計りの晩餐の準備に娘の歸宅を待つのである。
「お歸りかへ雪さん、今燈を點けて進げるよ」母は手を拭き乍ら準備にかゝるのを、何時もならば「否私が」と元氣よく立ち廻るのを、忙然と未だ框に立つた儘て顏色さへ優れてゐない。
「雪さん何故其麼所に立つてゐるの、お上りなさいな、チエ雪さん！オヤどうかお爲かへ顏色がよくないよ、氣分でも惡いかへ」母が心配の色を見ては娘心にも追

に「ア、濟まない」と心に耻ぢて「否」と明瞭、母の側に座したがはや眼には涙さへ浮めてゐる。

「可笑しな娘だネ、何したの雪さんは」細い肩に手を懸けた母は氣遣氣に娘を覗くのである。

「お母さん、今日は……今日工賃呉れないの」憫れ遊び盛りの未だ幼い女の兒の早くも世の辛き運命に泣くのである。此一語に母は甚く當惑したが、さりげなく「さう！何好いやネ呉れないのぢやなし、先方にも色々都合があるんでせうから」「否そうぢやないのよ、取締さんが大層私消ッたんだッて皆がそう言ッてるワですから呉れるか呉れないか……」又しても沈むのである。母は餘りの可憐さに暫し思案に耽ッてゐたが

「オ、左樣々々姉さんから手紙が來て居たッけ」姉なる言葉に稍元氣附いた雪子は母が差し出す懷かしい封書に涙の眼を濺いで口元には嬉しい微笑さへ堪へてゐる。「今しがた來たのだけれど、雪さんが歸ッてからと思ッて未だ開けなかッたのですよ」燈近くすり倚るを雪子も可愛い肩を列べて延び上るのである。

一筆示しまゐらせ候濕り勝ちなる今日此頃を、今年は母上樣には例の御病氣も起り申さず雪さんもお變りなくお暮しなされをり候由何より嬉う存上げ候。御主人樣始め妾も無事に暮しをり候間御安心遊ばされ度く候。承はれば雪さん事過る比より某工場へ通ひ初め候由まことに〳〵悼はしう存じ侍り候。想へば何も涙に候妾事雪さんの年頃は明け暮れ乳母に侍かれ多くの人には孃樣よ花子樣よと、朝の風夕の雨にも心を配られ恙なく生ひ立ちし昨日迄は雪さんなどの思も及ばぬ女學校に迄振の袂を運び、樂みと面白き事の外は何も知らぬ幸多き身に候らひしを、ア、思へばまこと涙の種に候。父上樣みまかり如何に家運衰ひしとは言ひながら姉なる妾は親にも均しき情厚き御主人樣に御用とても知れた事、勝手元拭き掃除は皆お三の勤めにてほんのお奥の御用のみにて勿躰なき程の氣樂さ、それを未だ遊び盛りの雪さんの此頃は　ア、有難しとも勿躰なしとも昨夜一夜を涙に明かし申候。幼き妹の苦勞を察し候ては一時も心おちゐず足らぬながらも共に御側にあるならば少しは雪さんも慰むべく母上樣の御手傳をもいたしたき願ひに候まゝみ情深き御主人樣を去るはなかなか忍び申されず候へ共今はそれにも增して妾の心は忍び難き惱みをいだきをり候。何卒今月限り御暇願ひ下されたく呉れ〳〵も願ひ上げまゐらせ候別紙爲換は

妾がお小遣の殘りにて僅かに候へ共御送り申上候ま
ま雪さんの髮のものにても購い下され度お暇の儀は
ぜひ／＼頼み上げ／＼かして。

工場に通ふ妹も、奉公する姉も、勤めに二つはなく、何れ苦勞ある身の人の運命、一幅の中に收め來りて、彼や此れや讀者の胸を騷がせる、例のごとく小說には趣みある筆。（選者評）

○お高祖頭巾

岩代　服部水仙子

「イヨー酷く別嬪さんが通……」

途端、グイと顋をあげられたので、語尾は咽喉へ引込むでしまふ。三十男の頭を分けて、双子の筒袖羽織を着た具合は、何處か商舖の通ひ番頭といふ見得。

「……仙長の嫁さんでさあ」剃刀を持つた儘、反り返つて硝子戸越し、今隣りは吳服店、天水桶の陰にならうとした後姿を見送つて、主人の早言葉。

「彼女が？あのお小夜さんとか謂つた」と今更に鏡の面を覗き込んだが、表に止まつて居る人ぢやあるまい



女德　廣島　加藤初代

しと、自分で自分を可笑しむ顔の、出張つた腮は剃あと青い。と紺足袋に雪駄を穿つた足があまりに踏ばがつて居るのに氣が付いて、左の手に毛をこする剃刀の隙を、大急ぎで直す、序でに曲つた前掛をも。折から脊の高い茶斑の犬、のそりと現はれて、のそりと消えた。

「長さんは如何してるんだい……亞米利加へ往つたつけ」

「へ？若旦那の事ですかい、ぢやあお前さん未だ知らねえんですね」

「何を？」「死んぢまいやしたぜ」

「えつ、何日？……」

「何日つてお前さん、もう廿日にも……そう／＼早いものでさ、今日は丁度三七日ですよ」と切爐の灰を撫でゝ居た女房が、指を繰つて見て口を挿んだ。

「へゝえ、少も知らなかつた、尤も其頃なら留守な時だつたがね」と鏡に寫る主人が不格好な顔を眺めながら白衣の下に着物を幾枚着てゐるかを數へて居る。

「全躰、若旦那の彼の體で勞働なんて無理なんてさあ、

お可哀さうに仙臺屋の若旦那ともあろう者が、亞米利加くんだりで骨になつちまふなんて……其れも此れも皆あの後妻のためでさあね」

「また大旦那も大旦那でさ、いくら勝手で飛び出したんだからつて鐚一文仕送り仕ねえなんて、それで彼の次男にはから目が無しさ、ヘン文學士が聞いて呆れらあ若旦那があゝした事になつたのも、つまりはあの野郎のお陰なんでさあ、あのお小夜さんを自分のに慾しがつたんで……あのお小夜さんてあ、死んだ御新造の姪に當つてるんです。それが思ふやうにならなかつたんで、其後つてものは嬶と二人でお小夜さんに當り散らす、苛める、遂々心弱い若旦那あ見るに見兼て、己が居なかつたら彼等此樣と優しい手紙をお小夜さんに殘して其儘亞米利加さ、可愛い女房を義弟に呉れるつてんでさ、寧そ未練が無い樣にの心なんでしたろう可愛そうに」

若者が小聲のラッパ節もいつか止むで皆靜に耳を傾けて居る。四間間口の岬床、暫くは髮刈器の音、鋏の響爐の緣、開き過ぎた福壽草のかげには大猫がさも心地宜さそうに睡つて居る。

「お小夜さんも感心さあね、若旦那があゝなつてから出入二年になるのにあゝして指一本觸れさせないで居るんだもの、それだのにお可愛そうに……眞實にあのお葬式の時なんざあ、お氣の毒と言つていゝか何て言つていゝか……」と女房がしみ〴〵云ふ。

「そうよ、さすがは小針樣のお孃樣だわな、悼しい、お若けいにあのお髮をよ」

「眞實にそうですよ、此樣仕つちやつたんですよ」と持つて居た煙管で髷を切る眞似して見せる。

「それに如何ですえ、可愛さ增つて憎さが百倍ですね、云ふことを聞かばよしだつたのが、そうなつたもんだから……お小夜さんも意地になつたんでせう……遂々離緣ですとさ、それも呆れるぢやないか未だ一七日も過ぎないうちの話なんですと」

「せめて廿一日過ぎる迄はとお小夜さんが賴みに賴んでもう今日が廿一日でさ」女房が猶も言ひ續け樣とした時。

「や來やしたよ！」と若者の聲。言ひ合さずに表に皆目を向けた。さる程に、心强かるとも見えぬ吾妻コート姿嫋々と、打見たところ二十とは越えない、さぞや香の香の染みて居るであろうと思はるゝ手先に一寸袖口をからめて、捲つて、髷に高かるべき空色縮緬のお高

祖頭巾は、まことひつそりと。夫の墓前に、花を手向けて、香を焚いて、今日を限りの別れの涙はさぞやと合掌のぬかづき姿しのばする伏目勝ち。やがて影は見えなくなつた。

「あゝあの姿も今日限り見るとが出來ないのかねえ」

さすがに女、女房はほろりとした。

過失て溢れたやうに、霰はハラ〳〵と降り出した。

技巧に於ては申分ない、是れ位ゐ筆が立てば立派なもので、上手に任せて氣取らなかつたら、世を動かす作を成す事も難くない、君はもう或る鍵を握つて居るのであるから、藝苑の扉を開いて自由に其技倆を試みてよい、只つゝしむべきは小才に任せて小成功に甘んじる弊である。（選者評）

○田打車

岩代　大竹いそ子

今しもとある茅葺の家から、田打車を肩にして出た、二人の姉妹がある、姉は十八位の櫻色で、白い手拭を姉樣冠りにかむつた樣子は、大さうやさしい姿である妹も姉によく似て年の頃は十四五である。折からさし上る朝日は大さう鮮かに、田の面の稻の先に宿つて居る、露に映じて、何にも譬へられぬ善ひ心地である。

かくて二人は、次第〳〵に作場道の方へ行つて、田道を通り東の方へ急いだが、やがて自分の田と思しいところに車を下し、堤に腰を掛けた「たみちやん一寸休んでから始めませうね」と姉が云ふと「はい」と答へて、二人はむつまじく語り初めた。しばらく休んで仕事に取りかゝつた。姉は妹を慰め顔に「百姓はほんとにすべての職業の本だわね、之を嫌がる人は愚だわ」と云つた、すると妹も「ほんとにさうですわ、あのね學校の先生もさう仰しやいましたのよ私一生懸命に働いて大きくなつて人の世話になどならないで暮して行かなければならないと思ひますわ、」すると姉は「たみちやんさうなくてはなりませんよ」と語り合ひながら、車を以て田の水の中をがぼ〳〵させて働いて居る中に日はもう高く上つて、水も次第〳〵暖り、玉なすあせはぼたぼた落ちて來る。又着物は雨も降らないのに皆だらだらにぬれて終つた。木立には蟬の鳴く聲が喧しい、とかうする中に、寺の鐘がゴーンと鳴つた。二人はもう暑くて堪へられないところに腹が大そう空いて居るので、鐘が鳴り止むと、いそ〳〵として車をかついで我家をさして歸るのである、その途中仲よく語らつて遠やかに歌を歌ふ聲、又「オホヽヽヽ」と笑ふ聲も聞

えるのであつた。

短篇中の短篇、初心中の初心の作と見た、文章は稚いものだが、相當に思ふ事が畫かれてある、作中の人物と共に、此作者も田園中の美玉であらう、乞ふ幸ひに文章の稽古を怠りたまふな。（選者評）

○水仙

愛媛縣　繩田いせ子

ちら〳〵降る雪の中を、薪を荷うて息せき里際まで出た與作は、地藏堂の前へ來ると、投げる樣に荷を下して傍の石の上へ腰を掛けた。『あゝ重い、お富や、此處で一休するだ。それから乃公は明日の法事を頼みに寺へ行つて來るから、お前は少と休んだら、此處から直に歸るだ。』お富は雪の樣な顏を赧うて居る手拭を取り除けて、ほつれ髮を五月蠅そうに掻き上げながら、『父さん、妾此處で休んで待つて居ますわ。』『むう、それでも宜いだ。』夕日を浴びて銅色の赤黑い顏一面ににじんで居る汗を急しそうに拭ひ取つて、煙草を二三吹濟ましてから、ふと娘の荷に挿してある水仙に目を着けた。『えらー奇麗なもの取つてるだねえか』『はあ、少と前にあつたものですから、廣さんの前へ挿さうと思つてね、つい取つて置いたんですの』『おゝ其うだつたのか、廣一は水仙が好きだつたべいの。』既目には露を浮べて、鼻さへつまつて居る、『あゝもう云ふまい云ふまい。何とかすると直廣一の事を思ひ出して來るから、それじや乃公行つて來るべいよ』『そしたら父さん、餘り暗くなら無い内にね』『おゝ直だ』つと立ち上つた時、恰度女學生が二人連で通りかゝつた。『貴孃軍人が理想なの、そうだわ、軍人は幅は利いてるけど……然し妾こう思ふんだわ、軍人は一躰に荒つぽくて、愛情が少くはあるまいかつて』『そんな事は無いわ、第一不如歸の武雄でもそうでせう、』『あれは小說ですもの』與作は通り過ぎた後姿を眺めながら『何の事だ。あれだから今頃の女學生なんて云ふ者は、廢つてるべいと云ふんだ、人の居る前でも構はないだねえか』口前では罵つて、まぎらしたが、内心ではお富が甚麼感じを爲たであらうか、と、其心の中を思ひやり、且は廣一の事までも思ひ出して、ほろりとした。『あゝ可愛相に、家が昔の樣にあつたら、お富も此樣な事は爲して置かずに、女學校へも通はして、廣一も死ぬるまでの難儀は爲せずして、學校へ入れて、勉強を爲してやるものを、あゝ實に殘念だ、廣一は全く苦學の爲に死んだのだ』また堰止めもなく涙が流れた。それを押し拭ひつゝ、そつとお富の方を見たら、之も

うつむいて居る。定めし泣いて居るのだらう。與作は悄然と歩み出した。空には夕鳥が一二羽迷つて居る。

廣一はお富の爲には、嫁許の間柄であるが、彼れは憐むべき孤兒であつた。與作とは遠緣の因緣があるので、幼い時に引き取られた。固より貧しい家であるから、小學校へ通ふ時代から艱難と云ふ艱難は嘗めた。そうして獨立して成功せねばならぬと云ふ覺悟が、其柔かい腦へ深く刻まれた。で恰度三年前に都へ登つた。勿論苦學である。與作等父娘は、一生懸命に稼いで、殊にお富は荒い百性仕事に勞れた身を無理に押して、毎夜三四時間は賃縫をして洗つた樣な貧しい中から絞り出した金を修學の補助に送つて、其成功を待つて居つた。處が二月程前に廣一は病氣の爲に歸つて來たが、間も無く死んだ。

お富と與作の歎きは甚麼にあつたらう、光明は遂に奪ひ去られた。そうして之が弱い身で苦學をした結果だと思ふと、實に立つても坐つても居られぬ感がする。明日は其四十九日に當るのである。廣一は與作が請じに行た僧の讀經の聲よりも、此神の如き處女が眞情込めて挿した清い白色の水仙を、嬉しく享ける事であらう。

お掃除　横須賀　釜屋敬子



書きぶりが少しごた〳〵してあるが、悲しい話の筋だけに、少女の讀者は動かされるであらう、中間に女學生の道すがらの話を挿んだのは巧者であつた。（選者評）

○迷ひ道

土佐　深瀨　ます子

ありし浦曲の御別れより、今日〳〵と日數つもりて久しうなりぬ。君にはいよいよます〳〵御幸多き月日を過させ給ふよし、今日かくて驚かし參らすをいかばかりかあやしくもおぼしめすらむ、君よ我がなめげさをゆるさせ給へ心常ならねばなり。

君に別れ參らせてよりの吾がこしかたは思ふもかひなくいふもうたてし、沖に漂ふたなし小船の波にもまれ風に吹かれて、半碎けしそれにもたとへつべし。父を失ひ母を失ひ、我はたゞこの世に一人な

りと思ひし時の心細さ、推し給はむはたゞ君のみ、あはれ誰かありて我を救ひ給へ助け給へとばかり祈りし時、こよかし此所へ汝が心の悲しみは我よく知れり、其の涙拭ふべし、こゝへこゝへといはれなばいかにぞや、其時見もせぬ我をなまやさしういとほしみ給ふ人のまことに我を救はむとにはあらで、賤しき心は見えすきたりと敏しげにつらき言葉は、かへす〳〵も筆と言葉はうらうへに、勇み立つ駒の行方もしらず、狂ひ出し身を罪といはむか、過といはむか、これぞ迷のはし、口惜しくもあさましくも我と我が身のいとはしさよ。かくもかひなき身のはてをなほもおぼしすて給はずば我が生涯の御ねぎごと聞かせ給へかし君。今もしこゝに人の道を誤り世に反きておそろしき謀する人ありて、その妻となるもの、諫めて〳〵聞かれずばいかにかすべき、まことと夫といひ妻といふもかりそめならぬ契といふを、昔の節婦はかゝる時、一命捨てて諫めもせしとか、そはかへりてやすき事ながらいかがあるべき、遠く相別れて己れ一人を潔くすべきか、さらずば惡名を後の世迄も共にせむか、君よ我に清く正しき道を敎へ給へ、願ふはこれのみ、心みだれてあと先もなしとく〳〵燃き捨て給はむ事を。

手紙文の體て、小說を作るのは、多く自分を主人公にした場合などである、此作者は知らず、只餘のにほひ、正しく相當の女子敎育を受けた方と見受らす、花あり、實あり、文體もしつかりして居る。(選者評)

○月世界

秋田　小笠涙紅子

白き幕サラ〳〵と動くと見れば、まづ衣の端ちらと見せて立あらはれたのは、はる〳〵米國より供もつれずに來た、メリーである。その神々しい面影は月下に咲ける白百合の如く、後なる二三人の女は「日本人みたいだわね」「あいのこですとさ」これも小聲で囁やいた満塲寂として水を打つたかの樣、孃は靜かに日本語でおぼつかなくも說き出した。

「皆さん樂を奏する前に私の素情を聞いていたゞきたいてす、私金もうけに日本にきません敎を弘めるそれでもありません、たづぬる方あつてきました、私の母米人、父はなつかしき御國の方ですが、死亡なりまして母と米國にかへりました、其私の許嫁の夫と一所にかへりました、その御方日本人で米國のサンフランシスコの或る學校に居りまして昨年卒業するとすぐ日本へ逃げて歸りなされた」其時前の方にゐた高島田

の令嬢は思はず「まあひどい！」と聲を發した、メリーは其當時を追想して眼に涙をたゝへて、又つゞけた「母も心配してそれも果てました、私は天下に親なき孤兒になりました」と云ひもはてずハンカチでその美しい顔を覆ふた、やがて又顔をあげて「幸ひ私音樂少し出來ますので私の夫も音樂がすきでいつも月世界を歌ひました、今宵もその月世界を奏します、斯うして日本中を訪ねて歩く少女でございます、皆樣私も皆樣と御兄弟であります、御存じならば樂終つてから敎へ下さいませ」と丁寧に一禮してピヤノに向うた、今下りやうとする一指彈を待つまの聽衆の心中は皆思ひ思ひである、やがて彈きはじめたその曲の妙なる音に皆恍惚として居る内曲は終つた、と思ふ時、一隅より獨りの青年突然「許せ！」と人かきわけて舞臺に上つた、それと見たメリーはおゝ宮島さんと感極まつて泣き倒れた。

變つた材料、まことしからぬやうにも思はれやうが、此んな場合を讀者に想像せしめるだけの力は籠つてある、兎に角小說壇の單調を破る爲に、斯んな作も折々は拜見したい。（選者評）

○もらひ乳　長野縣　翠波女

上

「はやくおかへりよ、宅だつていそがしい中を」はやわが子を炬燵に添ひ寐の母が、突劍呑のもの云ひぶりはいとしとやかにいらへて、あはれ泣くさへもうゑに力ない須磨子を脊なに、自分も共に泣きたい涙を呑み込んで、わが罪ならぬ罪のむくひを姉よりのこされて、義理ある母に、はゞかりの、いふにいはれぬくるしい思ひのもらひ乳に、夕ぐれ小路、とぼ／＼通ふや可愛のおすゞ。

のこつたこの子に何の罪、厄介物とは母上のお言葉がなくとも知れてゐる。要るべき者、有るべきはづの子ならば、たれにはゞかる氣兼氣苦勞ぞ。うまれながらに父しらず母さへしらず、たれに向ふにも、私生兒てふ、弱ひ肩書をつけてのこされたこの須磨子、親のつくつた罪とは知らで、飢ゑに泣くこゑのあはれほそさよ、母上のあのふくよかな二つの乳ぶさ、あれは時夫がもの、皆とはいはじ、一房をだにめぐんでくださらばどんなにかうれしからうに、さり乍らそれも詮なきこと、いづれは日かげものゝこの子なれば、なまじいに世の憂きふしを知らして泣かせるよりは、いつそ自分も共に……と思つたこともいく度か。あゝされどなほ絕ちかぬる魂の緒をつらいうき世につながれて、

一日三度のもらひ乳さへひまつぶしとは。

さもあれ鬼ばかりの世にはあらじ、雨も降らうもの、風も吹かうもの、その間のくるしみは知らさじと被ふ袖も、あはれはかなや、このさきいかなる運命に弄ばるゝ身の上ぞ、やつれし若き叔母、飢ゑたる小さき子、やみは、やゝに寄せて、小川のしらべ、世のうきをかこつとばかり。

「――孃樣だか」

「あ、太一さんなの」、「乃公、あんまり遲ひからお迎へに來ようつたゞ、どうしたの」

「さう、御苦勞ね、すこし用事があつて」

「そんなら可えけれどお母がね、さむいから、風邪でもひかしつたじやなかんべえかつて、氣づかつてゐたから」

「ありがたうよ……もう夕御飯すんで」

「あゝ」と太一は前に立つ。

下

「ほう笑つしやるだ、おゝ嬉しいか〳〵、無理はねえだ、宅の餓鬼なざ、朝から晩まで呑みつゞけて、今がたやう〳〵寐たばかりだに、須磨坊なざ晝呑んだかぎりだないか、お、可え子〳〵甘味いか、よう呑まつせよのう。したが孃樣、孃樣が苦勞だのう私い察しますだよ、あの中で並大抵の氣苦勞じやあんめえに、はあ、いかい苦勞さつしやることだのう……いくつにならつしやるだね」

「ほゝゝ妾十六になるの」

「まあさ早いこつたのう、私が乳をあげたときには、まんだほんの赤ん坊だつたに」

しみ〳〵といつて、ふところの子を覗きこんだは年齡のころ四十許り、色のくろい、人柄のよささうな櫛がらみの女房。

「さう云やあ、あんたの母樣あ、いま何所にゐらつしやるだか、そりや何と云つてもあんな人あないが、あやつぱり因緣といふんだかね」

圍爐裡の榾火の消ゆるを忘れて、與作はしばし沈吟。

「姉樣が死なして、こんな子供が殘らしたもの因緣だあな、けんど今日までゞさい並大抵の苦勞ぢやあなかんべえが、まだ孃樣、このさきの苦勞が長うがすぜ、みんなおいとしいて云はねえ者はありましねえだ、それにしちやあ家の喉なだあ幸福者だあな、工場が辛らからうと思ふて、休日にかへりや仕度放題遊ばせて、木棉ぢやけれど、夏冬一枚宛の着物あ、身の皮はいで

も被せちやるしなあ、お藤」

思ひ出したやうに吸ひつけた煙管をぽんと。

「だがのう嬢樣、世の中あ、まわり合ひてな、さういつまでも苦勞がつゞくもんでもなけりや、惡運はいつまでも榮えるものぢやなえ、天道樣あまつ直ぐに照らつしやるだ、いかい心配するちゆうと病氣が起るだに」

「やあ、とう〳〵眠さしつたな」

「これいゝ安排に」覺えず左右からのぞき込む、片手にひだりの乳房をにぎつて、右の乳房におしつけた、ふくよかな頬、かすかな寐息の何を夢みてかにつこりとほゝゑむ。

「可愛いもんだな」と、ふし立つた拳に、須磨子の頬をなでゝ、

「惜しいがかへらつしやるか」と與作。

「このまゝ抱いて寐さしたいが」と女房。

「もう遅いから」とおすゞは立つて無言のまゝ、眤つと見かわした三たりの眼からは露が落ちさう。

「あら、いゝのよ、月があるから」

「なにそこまで見てあげますだ」

破戸をあくれば、さとふきしく風の妙へなれど、さびしい香りを送つて、春まださむい梅月夜。

文章に味なやる書きぶり、存外老成して居る、普通のもらひ乳てなく、姉の子と云ふだけに、同情も起る、樸實な老夫婦も善く出來て居る。（選者評）

お洗濯　豊橋　白井津奈子



○こぼれ梅

本所　茂子

三時のベルは鳴つた、夫と同時にドヤドヤと門を出た、富子も居た、富子は今年十五、細面で色白く品のいい背はすらりとして海老茶袴を裾長くクッをはいて、オリーブ色の風呂敷づゝみをかゝえて、しほ〳〵と歸つて行つた、雷門の前を通り、吾妻橋手前まで來ると、何したのか富子は急にうれし相な顔をして、ツカ〳〵と進み。

「先生！」

「おや富子さん今お歸りですか」「はい」とばかりに、もう其涼しい目には涙一ぱい一言も云はずに、チツト

先生の顏を見つめて居る。再び、
「先生」
「はい」
「先生何故お退校なさるの、昨日花子樣から聞いてビツクりしてよ、そしてね、二人で悲しいつて泣いたのよ、先生何故お退校なさるの、え、何して〱」と覗き込んだ。
「富子さん、許して頂だい是非ない事情で他へ行くのですから、けれども、時々は、遊びに行きます富さんもいらつしやい」
「はい有難うございます」と二人はしばし無言で力なく歩いて居た。
軈て向島の土手へ來る、すると富子は急に思出して、
「ねえ先生、去年先生とお花見に來ましたら、あの彼處に可愛らしい菫が咲いて其そばに蝶が眠つて居ましたね」と指をさす。
「あゝ彼處でしたね、さう云へばあの菫まだ詩集におさめてありますよ」
「そー先生頂だいな」
「はい上げますよ」と、又二人は無言で歩みはじめた、其中道の曲り角へ來たので富子は、
「先生此處でお別れ致します、何ぞ御身躰をお大切に遊ばして御きげんよろしう」
「もうお別れ富さん身躰を大事にね勉强して下さい
「はいさようなら」と、二人は別れて行つた。
此敎師は富子の親類の知人であつて、一寸ハイカラなそして人格のそなはつた、優しい〱先生で名を小川茂留とよぶのである。
其夜茂留は机にもたれて、以前富子から送られた、寫眞を見つめながら考へて居た。
「あゝ何してあんな優しい可愛らしい而も勇氣があつてあゝあの脣何時かキッスした脣實に愛らしい少女ああ夫をどうして、振りはなつて他へ行かれようあゝ先刻もあの凉しい目には涙が一ぱいであつた、あゝ可憐の富さん罪ない富さん思へば目前にちらつく」つと我にかへればもう十一時半急いで床についた。
其後度々富コから便りがあつた、が此頃メッキリないので心安からず、案じ暮して居ると或土曜日に突然電報、「トミコキトク」おどろいたのなんのつて急いで車てかけつけた而しもうおそかつた。

只あどけないと云ふだけて、別に深い旨趣もない、初めて作られたと云ふにしては、年齢の割に見込がある。（選者評）

和歌

佐々木信綱先生選評

三等

かぐはしき夢にまかれて象のむれ眠るがやうに霞む山かな

熊本市七軒町三六境志計方　島田たけ子

四等

陽炎は紅梅たをるよき人の玉のたゞむきすべりてもえぬ

福岡縣築上郡椎田村湊　平塚あき子

五等

志摩と奈良の若き詩人巡りあひて語る紀伊路のはるさめの宿

紀伊北牟婁郡尾鷲裁縫學校　野木ちとみ

秀逸

◎常陸　大和田清子

筑波根は夕の雲におそはれて藁屋に細き燈火ゆらぐ

◎岡山縣　梶川露子

小皷の優しきしらべいま止みて花散る窓に春の雨降る

◎松前のばら少女

我ひとり調ぶる琴の淋しくて亡き姉戀ひし十六夜の月

◎横濱　むらさき

紫に燈火かすむ春の宵少女美し白桃の花

◎弘前　華枝

夕鐘は微かに響き靜かにも小雨にくるゝ桃の村かな

◎佐賀　松本笛子

ゆく春や西施怨ずる琴の音に太湖かすみて畫舫かくるゝ

◎淺草　紫泉

夕づく日遊びにあきて子等はかへる利根川堤白帆のさむき

◎備中　菅森定子

ひとり居をわびつゝねむるほご張の障子はためく夜の吹雪かな

◎伊豆　野菊女

金屏に雪洞の灯のかげ映えて殿の雛の笑うつくしき

◎越後　松山けん子

よき人と言葉少なに分れたる夕べに似たるうす月夜かな

◎福岡　河原白百合子

春風はまろ山すべり野を吹きて桃散る夕べ鐘低うなる

◎加賀　山本あい子

由緒ありと聞つる家の屋敷あれて紅梅殘るくづれ垣かな

◎佐世保　田中要子

尼寺の御讀經やみて一しきり梅の花散る薄月夜かな

◎三重　松岡絹子

靜かなる雨の夕べを海棠のしづくする見て物思ふ人

○桃白き寺の夕は雨になりて讀經の聲に春くれてゆく　陸前　藤田はる代
○白梅や月ありあけてさめやらぬ十戸の村の夢あたゝかき　群馬　河内とめ子
○むらさきの糸のやうなる春雨に灯かげまたゝくさくら町かな　弘前　佐野てる子
○月菜の花道を笛に興じてたどりて行よ江を西に見て　弘前　彌井松江子
○紅梅や十戸の里の雨あがりかげろふ燃えて傘ほせる見ゆ　下總　石川りん女
○春の夜の丘越えゆけば家ありて灯火細き梅の窓かな　愛知　紅袖子
○老人がしひもの語り夜にいりて冬の雨きく下京の宿　牛込　井口敬子
○水仙のかをり薫ずる南窓ものあむ糸に小猫もつるる　筑後　萩子
○國の司三たび尋ねて遇はぬとふ隱者のいほの梅のはなさく　久留米　中原鐵子
○晴衣縫ふ手のたゆたひは許しませ亡き姉偲ぶ春の夜の窓　船津　松野みどり
○春雨や椰子の若葉に魂秘めて鳥家の孔雀のさゝやき聴かむ　麻布　瀧本まさ子
越後　詩狂女

○奇し馨り靈氣身にしむ奥山や神の御杉に白鳩あそぶ　武藏　青柳彌生子
○土蠻など黒稗食みて月を見ぬ王土のはての春のけしきに　新潟縣　山田さとし
○牧の子が笛にゑひたる小羊の夢のゆくへか白百合の花　高崎　長坂美子
○咲き出し桃の花蔭鶏啼きて吾家我里春靜なり　神奈川　守屋玉江
○あえかにも鼓いだきて人訪ふとふと思はれつ春の夜の月　常陸　酒葉貞子
○うす絹によく似しかすみ透かしたる常陸小筑波歌によろしき　大和　瀧子
○來ますたびかざしませよの願ひのみ日ぐるま植ゑしわが垣根みち　長野縣　鹽入優梨枝
○羽袖折れし蝶を悼みて歌おもふ窓にふり來ぬ菜の花の雨　千葉縣　秋葉流星
○聖天子この朝生れぬ梅の花高麗の博士は歌奉る　美濃　傍島敏子
○朝はれや花もよひせる姫三人かざしの鈴の音に百合さく　四谷　なか子
○春の夜を思はれ人のこゝちして君とあゆみぬ磯の松原　静岡　山口芳子
○繪日傘をのせゆく春の小舟かな花咲きみてるはなれ小島に

○尾張　津田こと子
北風と共に戸を打つ枯桐葉罪犯したる父思ふかな

○名古屋　志水白梅女
桃の里柳の村をさかひせる川に棹とり君渡さなん

○襄陽　兒玉華鳳
何となく胸の苦しき此夕小窓開けばさくらこぼるゝ

○大坂　伊藤淺子　子守　金澤　安井登子
神鈴の音のさえてのどけき春の宮白鳩飛んで梅薫るかな

○大分縣　ゑぐち女
あら玉の年の始めを着飾れど誰かは知らむわが胸の秋

○上毛　眞砂露子
花咲けど鳥はうたへど去年の春別れし人のおとづれもなき

○飛奈久枝
少女子がすみれつくしとうちむれて遊びにあかぬ春の野邊哉

○秋田縣　千葉みつ子
失せし子に似たる繪葉書もとめきて思ひ出に泣く春の宵かな

○奥市　栗原せい子
頰ゑみて乳房にすがるをさな子のふかきゑくぼに神やどるらむ

○熊本　もくづ
御情の言葉へる文の川にうれし涙の瀨とそゝぐよ

○石川　あけぼの
星一つ光るみ空に雁なきて我夢さめぬ文机のもと



○飛驒　ふさ子
すさまじき響して吹く木枯しのやがても霜となりにける哉

○兵庫縣　永島豐子
流れ行く秋をしばしと谷水にかげをとゞめし峯のもみぢば

○山口縣　萩　式部
徒然に窓おしあけて眺むれば君ます方の空ぞ戀しき

○下野　江面柳花子
風も月も花の香に醉ふ春の空朧小村の只鈴に似たる

○群馬　芳山和歌子
あら玉の年をむかへし賤が家のふるきのきばをかざる松が枝

○大阪府　神田信夫
たま〳〵にすみれ咲く野に君と見て語るひまなき春の夜の夢

○新田　豐原恒子
吹く風ははだに寒さを覺ゆるを軒端の梅に鶯の聲

○岡山縣　一安君子
花の露のしたゝる音も聞えけりねざめ靜けき春のあけぼの

○福岡縣　まつえ
藻鹽やく烟に暮る奈多はまや千鳥なきよるかゞり舟かな

○久留米　中原銀子
覺の神は光明求むる歌の兒の願ひの糸に霜被せぬらし

○安房　學の窓
たえまなく小雨そぼふる春の宵とのゐの君と歌がたりする

○石川縣　つむゆき
ふとりしよと我手をとりて笑みませる母のすがたのさても老いましぬ

○美作　性全　榮女

亂れ髮梳りつゝ思ふかな振分髮の昔し戀しと
○近江　北川　花枝女史

川上の綾瀨の千鳥聲更けて吉原堤月傾むきぬ
○府下　須貝はな子

土橋行く馬士のひな唄のどかにて川添柳春風のふく
○常陸　荒川眞子

吹く風にもの音ふよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり
○豐後　木のはな

なのみたつ彌生の空の風さえて寒けくもあるか地引ひくこゑ
○磐城　遠藤華子

春の夜や送りこされし京雛に都こがれしむ里うなゐかな
○芝　すて女

色あせしかざしの花の幾束を川に流せる秋の夕ぐれ
○安房　忍足松雨子

夫無き妻は二十の賤が家に風あたゝかく桃の花散る
○米澤　高橋ぬい子

あほぎ見れば雲の往來もたゞならず國に病む母今如何ならん
○淡路　伊藤紫浪

鐘守の鐘のひゞきに日は暮れて沖の小島は寂滅の國
○羽後　前田久子

花と見し雪の名殘は咲そむる梅が枝つたふ雫なりけり
○伊豫　伏見けい子

右み左み行きつ戻りつさまよへば人魂飛びぬ常闇の夜半
○安藝　六實蘭子

風寒く月あはれなるこの夕べ物思ひ居れば千鳥なくなり
○愛知　渡邊穆哲子

野あかあかと冬ちかき日の照りわたる空に淺間は山鳴りするも
○明石　田舍娘

折々は竹の折れふす音もして雪にあけゆく冬の山里
○阿波　蹤みれ子

冴ゆる夜の月はいり江にきらめきてあし間にさぶく鴫ぞなくなる
○印旛　芳子

冬枯の梢の雪のちる見えてあらしに冴ゆる月の影かな
○但馬　春蝶女史

いざ君と二人住まなん長しへに鶯來啼く谷深き庭
○相模　相樂なでしこ

乳母とふと青葉小路をたどり行けば一聲高くほとゝぎすなく
○常陸　はるか女史

あけぼのゝ鶯なきて限りなき春のねぶりは今さめにけり
○常陸　西野はる子

田吾作の畑打つ歌も春めてき山家つゞきに梅の花さく
○大阪　村瀨蔦子

罪けがれ天の御神に告んとか西へにしへとうす雲のゆく
○備中　大山燊子

人知れぬ思ひいだきて只一人みだれ毛かみて月に泣くかな
○小石川　君子

月かくれ怒濤岩かむまよなかにふとあらはれぬをとめ子一人
○會津　露月

うき戀を雨にふけゆく春の夜に君と我泣くすみれ咲く野邊
○牛込　阿部きぬ子

我背子の住へる方に行くものは雁の姿もなつかしきかな
○大阪　山田いな子

しづけくも春の雨降る淀の宿ことづてやらむ舟のまたるゝ
○埼玉　長澤秀子

須磨や松原黑く砂白く更けゆく月に千鳥きくなり
○高崎　長坂蝶子

かきくもる怨の潮風身にしみて冴ゆるや春のすきまなるらん
○岐阜縣　萬小夜子

友染の小袖つまぐりはじらひの我妹うつくし雪洞のかげ
○相模　中野香花

白綾の宮居に侍べる女樂師そのよき顏に七野しづけき
○麴町　原田花東

可愛ゆげの迷子指さす野の遠の櫻の中に月いざよひぬ
宇都宮　大隅順子

○若草は神のめぐみの日に生ひて野山に春の色添へにけり
丹波　葉山花子

○霜の落葉が上を行く見えてさえにさえたる冬の夜の月
羽前　細岡溪外女

○花の頃の日記のひと日に文字はなくたゞはさまれり緋桃一片
尾張　野田富子

○はらはらと花みだれ散る朧夜を文もちて行く人うつくしき
羽前　紅子

○罪のなき夢なさましそ春の風ふめるその頬に花散りかゝる
下野　翠葉女史

○もの事にたゆまぬ心もたまほしあゆみおそくも牛は千里を
紀伊　濱口さち枝

○うら街や干しならべたる鰯の乾魚に紛砂まひよる秋のくれかな
岡山縣　龍門光子

○松離木松の葉越の月の影我歌にせん此の夕べなば
福岡縣　古賀芳子

○朝日和ほのぼの秋のけはひ立つ海を北へと島のいく群
鹿兒島　郁香女史

○君が文人に見せじと燒く今宵みぞれの空の月おぼろなり
陸前　鈴木榮子

○百鳥の塒尋ぬる聲ばかり殘して暮む春の夕暮
菅　道芝

○思寐にうれしかりつる夢さめて手枕さむゝ梅かをるなり
周防　小藤女史

○朝月夜遠山櫻ほの白う屋上ゆたかに春の霞見る
信濃　桐原緻子

○嬉しさは君や如何にと思寢の夢に逢ひぬる時にぞありける
神戸市　杉山俊子

○春の夜や牡丹に似たるよき人の櫻さくらに笛吹きめぐる
羽前　高橋こん女

○春風に袂吹かせて心地よく歸る家路に菫花咲く
紀伊　厚みどり

○おぼろ夜の月影ふみてかへる道行きすぎがたく梅かをる哉
東礪郡　田中熊子

○世の憂を厭ひて住める山里に心も知らで咲ける卯の花
東備　坂東須美子

○友訪うて歌がたりする春の日の窓に香りぬ紅梅の花
深川　元子

○餘の晴衣の袖やふれにけん一ひら散りぬ鉢の白梅
埼玉縣　金室喜代子

○いたゞきゆく皷にふりぬ京の川灯あかき橋の春のあは雪
神戸　朝比靜子

○朝の露すゞしう含みほゝ笑みて芝生がくれに咲くすみれ哉
奈良縣　上杉蘭花

○草の屋も住めば都の思ひして玉の宮居の戀しくもあらず
千葉縣　金剛寺よしい

○鶯や深き谷より梅が枝に來りて初音もらしける哉
三重縣　森田初子

○遠山の芝燒く見えてあかあかと煙の中に月落ちんとす
秋琹

○まどの外に咲きつる梅の高き香と清き姿にわれ習はまし
丹波　室谷ひさ子

○くれなゐの壁のちまたを立出てゝいと心地よし磯の松かげ
上毛　關口翠子

○三とせぶりかへる古里あれにけり井筒くづれて桃の花ちる
美濃　紅梅女史

○花賣りの歸りし跡の門の邊に殘りて獨り蝶の遊べる
能登　しげ子

○亡き姉の姿やさしきうつしゑをみるたびごとに涙ぐまるゝ
巣鴨　本橋好子

○

冬ふかみ山田の庭の夕ぐれは雲より外にとふものもなき
○　長野　野村久子

病みませる伯母君いかにと案じつゝ一人行く野に秋萩淋し
○　伏木　梅操

野も山もみな埋もるゝ雪のうちにしるしばかりの杉の村立ち
○　京都府　吉田澄枝

山里の夕ぐれさびし人絶えて垣根の梧風なきに散る
○　東濃　露子女史

春雨にぬるゝ花こそよけれ共最と哀なり鶯の聲
○　神戸　足立あさ子

夏草の茂みの中におかしくも小萩が花のはや咲見ゆる
○　備中　井上花子

牛がなく片山里は冬枯てかなしくひゞくたそがれの鐘
○　明石　松村市子

亡き姉のみたまの前にひれ伏して手向し百合に雨降りそゝぐ
○　大阪　村瀬露子

花蔭につるぎ舞する美少年月は廂にそゞろ傾く
○　岩代　池上きわ子

花電燈ゆるゝばかりの拍采におどり了んぬ花の娘子
○　宇都宮　芳野靜子

幾度か思ひなやみつ佇みて鳴く鳥の音に涙こぼしぬ
○　磐城　村岡富貴子

心なき筆の使ひの清書に逝きし妹のまた偲ばるゝ
○　磐城　花月女史

亡き人のみ墓を守りてさびしくもこゝに三年の秋をおくりぬ
○　攝津　和久激子

玻璃の扉に春の日たけてそとのべし繪絹に瓶の紅梅散りぬ
○　千葉　ゆきえ子

琴の音の妻戸を洩るゝ高殿を仰げば空におぼろ夜の月
○　岩手縣　前田たき子

こゝろざしあしき友をばさけよとていひきかするも母の眞心
○　牛込　櫻花女史

日うらゝゝ桃の花咲く垣の内にひめ君たちておうな召し給ふ
○　日本橋　櫻井丁子

冬がれの眺め寂しき向山今朝めづらしき雪を見るかな
○　豐後　青柳子

いたづらに髮のみ延びて業ならず三年を空しく京にすごしぬ
○　米澤　樋口夏月

すゝみゆく世におくれじとをしへ草こゝろのこまにかはぬ日はなき
○　麹町　なぎさ

ほのゝゝと春の夜あけぬ島國の火を噴く山はうす紫色に
○　會津　雪月

亡き姉のかたみかなしき琴抱き淋しき夜半をひとり月見る
○　陸中　富士井操子

あたゝかき三年のゆめもさめにけり末はいづこの野にかさまよふ
○　尾張　秋香女

紅絲や蝶の金翅に歌かきて捧げまつらむ女神のみ前
○　若狹　長谷川英恩

落ちてゆく眉うつくしき若武者の涙こぼれて土筆もえ出ぬ
○　岩手　紅月女史

春風をまともにうけて白帆一つうな路をいそぐ小島がくれに
○　磐城　山川玉林子

十年ぶりに歸りて見ればふる里は人も變りぬ家もかはりぬ
○　豐後　鶴子

菜の花につゞく海原靜かにてかすめるあたり鯨潮ふく
○　福島　ふう江

日ごとゝゝ庭に散りしくもみぢ葉のかず増さりゆく我おもひ哉
○　周防　みどり

五月雨に身もよりくれてなくものはわれとみ山のほとゝぎすかな
○　米澤　相田つる子

あな嬉しけふの便りは故里のみなさけ厚き母の御言葉
○　野州　藤井よし子

東風ふきて梅が香匂ふそのあした鶯なきぬ我窓ちかく

○　攝津　龍川百合子

聲低うよき人二人かたり行く菜の花小路春雨けぶる

○　茨城　矢口はつ子

おとづれの文見る度に懷しや三年あひみぬ故郷のとも

○　下野　鹽田とし子

まどちかくにほひ初めたるしら梅の花にかくれてうぐひすのなく

○　伊豫　曉子

外面には木枯あれて人見えず霜夜の星のきらめきすごき

○　岩國　やよい子

胡蝶まひ草萌えいづる春の野に手枕ゆるぐ紳とかたらん

○　福島　長尾しづ子

荒磯の嵐も松も吹きたえてしづかにつもる雪の夕ぐれ

○　瀬戸町　津金糸子

君まさば淋かるまじ只ひとり思出多き冬の夜の月

○　京都　梅子

狼の吹ゆるににたる風の音枯野一里に月さえ渡る

○　赤坂　梅津治美

濱梅の色はかはりて十六の春まだあさき妹逝きぬ

○　播摩　岡崎はな子

賤が屋の煙とともに春立て鎮守の森に鶯のなく

○　能登　舟倉二三子

磯寺の夕べの鐘に淺銀杏の沖の帆影と散りてみだるゝ

○　薩摩　たま子

木の葉散りこがらし寒むき夕ぐれをもずなきしきる産土の森

山小屋　淺草　田村靜子



○　大阪　河原瀧子

窓近き竹の小枝にうぐひすの初音さやかにおとづれにけり

○　弘前　盤澤きよ子

けふ今宵逝きし父君偲ぶれば先だつものは涙なりけり

○　安藝　一笑子

亡き母のみ墓いだきて泣き伏しぬ雁きく秋の夕暮の雨

○　美濃　山田一江子

いつのまに雪も氷もとけぬらむみ空かすみて春は來にけり

○　京都　松岡里代子

なつかしの心をしばしかたまけて君へのつとのうた思ふかな

○　伊豆　すみれ女史

幼子が草に忘れしオモチャ小琴胡蝶とまりて靈靜かなり

○　下野　眞子

朧夜に何處ともなくさまよひてかをりゆかしき梅仰ぎ見ぬ

○　群馬縣　河内とめ子

山寺に望すてにしわれなるを袖にやはらぐ春の初風

○　高松　平尾信子

潮あみし人はかへりていそづたひさやけき月を一人みるかな

○　佐世保　薔薇花

鶏の屋根に上りて靈告ぐる秋の日高し豊年の村

○　海南　芳枝

白梅の小窓によりて唯一人筆流す子の笑み美しき

○　大和　樫根こう子

岡のべの梅にとびかふ鶯のこゑきく時は春めきにけり
○　伊勢　下村紫子
村山は靜々しうも明けそめて世はうつくしう春の風ふく
○　福岡　三葉女史
川添の十戸の村の春の王と高うかをりて梅の花さく
○　加賀舘　芳香女
なき友のしのばれて立つ西の窓千鳥啼きよりみぞれそぼふる
○　伊勢　中村てつ子
佐保姫は柳の影にふとうせて孔雀舞ひ出でぬ御苑の夢に
○　備中　紫霞女
春の月うすくれなゐの貝ぬけてほのめく如き磯のさまかな
○　越前　梅子
おもはずも語りすごして岡よりかへる坂みち露は積りぬ
○　伊勢　西村もと子
野島の方にとび行く白き鳥の行方ながめて磯に彳む
○　上毛　うめ子
まらうどは京の人にてゆるやかに語りあかしぬ春の夜なれば
○　常陸　佐野清子
はるのよに誰がすさびにや嘵々とつるのすごもりそゞろ身にしむ
○　麹町　田中小夜子
紅の裾高うかゝげて海士の子が貝拾ふ磯に春雨のふる
○　青森縣　三浦愛子
岡に暮れて梅の花ちる江のほとり大宮人の車去るらし
○　信濃　節子
雲の霞の遠の樂慕ひて我も蝶やと袖振りて見つ
○　明石　月澄子
しら雲の入野にとざしゝ谷の戸を春にあけぬとうぐひすの鳴く
○　南多摩　橋本しげ子
色香深き花に結べる其夢を問ふても見たき蝶物言はゞ
○　越前　新保光子
優雅なるや若きひじりのうたゝ膝にそときせまつる紫の被布

我こそは學びの庭に樂めど逝きにし君は如何に居まさん
○　近江　夢多子
おもひ寢の夢くりかへす曉の枕にたかき窓の梅が香
○　小樽　喜美子
梅の香に醉うて丸窓そと押せば飽なきぬ聲うらゝかに
○　千葉縣　石渡紫靈
たへがたき思ひのこの身このまゝにきえたらんにはと思ふ夕かな
○　小倉　柴田咲子
國のため露ときえにしますら夫のいさをはくちじ萬代までも
○　牛込　阿部絹子
數おほき玉の様なる春の星紅さしてゐぬ花の梢に
○　磐城　武者ゆき子
つめたさに持つ物さへも厭ふ身が手折りて過ぎぬ水仙の花
○　大阪　伊藤淺子
春淺く若菜覓る子の袖のゆきあはれと思ひふと呼びにけり
○　丹後　藤村春枝
菊酒に醉ひて吹かせし頰のほてりほてりさめずば詩の宮見む
○　伊豆　上原露葉子
桃の咲く伊香保の宿の白旗に追る夕の花ぐもりかな
○　赤坂　紅葉の里
ほとゝぎす啼くや卯月の雨模様雲脚はやくなりまさりけり
○　横濱　小笠原よし子
我せどの紅梅清く咲きたれど月日の外に訪ふ人もなき
○　相模　島海白蓮
うらうらと菩薩に似たる雲間より初日影さす君ます家に
○　美濃　市川小百合
夕まぐれまつ原いそぐ若僧の衣にさむくこがらしぞ吹く
○　福岡　坂口よしの
亡き母の折りてたまひし紙雛に敲きかせぬ桃のちる宵
○　山形縣　葉山秋子
○　筑後　春園女史

南縁やゝひろ靜かに鳥なけば庭の白梅はら／＼とちる
○福岡　大神はま子

入相の鐘きく毎ぞ思ふかな都にゐます君はいかにと
○福岡　坂口よしの

なつかしき亡き姉君の夢さめてかすかにひゞく古寺のかね
○南多摩　加藤〔一〕よし〔三〕え

庭の景寫生せばやと筆とりて窓そと押せば桃の花散る
○香川縣　田中名香子

破れ瓶にさしたる梅の一枝を君は繪にしぬ吾歌にしぬ
○廣島縣　鴻野龍子

山深み浮世の塵をはなれたる草の庵ぞ住みよかりける
○高松　四宮久子

たまもの浦聲もさむげになく千鳥立居は波の心なりけり
○南多摩　横倉玉江

花投げて笑む子愛らし春よき日子羊群るゝ牧の芝生に
○備後　たつ子

春來れば谷川の風吹きぬるみ梅のはな咲き鶯のなく
○下總　きかと女

新玉の年の始の祝ひとや今朝より鳴きぬ鶯の聲
○神戸　山崎美代子

月おぼろ何所なるかの笛の音に浮かれて出でぬ花の下道
○大阪　満壽美

何事もなしと見えつゝ涙あしのうきふししげき世にもあるかな
○沖繩縣　わか子

かねの音もいとしめやかに香るなり雨にくれ行くもゝの一村
○本郷　足利かの子



三河　成瀬傳子

舊年の汚れし罪も夢ときえ我にあけたり新らしの年
○備中　菅森露葉子

何げなく佇む萩のさゆらぎに里なつかしき風の音かな
○名古屋　花の舍女

妹かざす絹雪洞に花散りて軒端に笛の聲かすむなり
○三河　金田美津子

朧夜に銘ある笛を拾ひ得てそゞろに主のなつかしき哉
○三重縣　房子

たま／＼に訪れたりし師の家の人もあらずに梅の花さく
○〔三〕丹後　塩見千代子

雨降りて花ちる夕思ふかな幾日しへなば我死ぬらんと
○岐阜　篠田とみ子

人の世に己が守りはふたひらのまごゝろうつる鏡なりけり
○長野縣　中村まさし子

かけて待つ軒端のなすに音たつる風なつかしき秋は來にけり
○京都　政子

古里の春はいかにとおとづれのふみかく窓にうぐひすのなく
○岐阜　白骨女

子をもたぬさきにもしりぬ親の恩ふたとせごしのおもきやまひに
○紀伊　富美嘉

春を飾る雛祭りの宵の灯や二の姫若し緋桃白桃
○矢名

とく起きておばしま近う立ちよれば前の小山に鶯の鳴く
○神戸　水穂輝子

我が宿は梅の社に隣して枯桿高く黄鳥のなく
○伊賀　嬋涯子

月落ちて日はまだ出てず霞せる谷間に聞ゆ鶯の聲

○　長門　谷清水

春雲の寫る小川に花散りて胡蝶暫しは追ふても行きぬ

○　紀伊　阪本春江

妹に糸をよらせてあゝ我は母の看護をたどうけん身か

○　周防　𪉩神良子

いへごとにたつる常盤の門松にかはらぬみ代の色ぞみえける

○　高知縣　森岡日出見

故郷の母病みますと夢みしはみぞれ降る夜の明方の空

○　高山　山住愛子

風の夜は栗拾はんと弟等と語りつ寢れし日を思ふ哉

○　能登　森田美津子

わが胸にうきことありと知らずしてはひよる稚兒の笑もかなしさ

○　本郷　きく子

よしや今いさゝ小川に有ぬともやがては出てん大海原に

○　出雲　山本靜子

人に反き覺えず入りぬうばら路今日ぞ我世のせばみ知るかな

○　秋田　西村八重子

夕波や涙にぬれし我影の船と船とを結びぬるかな

○　丹波　栗山花子

消き野に今朝立つ春の光みちてたゞよひ初むるうすがすみかな

○　宇都宮　大岡春子

戀の絲覺神の呪ひに今斷れ我が戀人は永劫に逝きけり

○　群馬縣　小暮たつ子

長閑なる東風に誘はれ咲く梅の枝にぞ歌ふ鶯の聲

○　下野　岡さゞれ子

初若菜昔から實れぬ待つ子等に毬をや貿はむ帶にやせむ

○　秋田　佐々木更子

秋深き小庭の池の緋老いて蹈らずなりぬ柳ちりそむ

○　下谷　白香女史

佐保姫が衣更へます朧夜や花の戸今宵夢さたまらぬ

○　武藏　青柳彌生子

もえ初めし夢の若葉に霜見えて朝戸出寒し岡の邊の里

○　長崎　米時子

ちりの世は遠くはなれし心ちして四方清らけき霽の朝かな

○　松山　孤蝶女

亡き夫のかたみの梅の綻びてまたも涙に袖濡しけり

○　阿波　うす衣

霜の花咲ける垣根にひよどりの鳴く音もさびし冬のあかつき

○　横濱　みなと

初春の祝にいひし島田髮君笑みませばうらはづかしき

○　岩見澤　河合菊子

鶯の鳴きつる聲に誘はれて二ツほゝ笑む梅の初花

○　一關町　阿部とみ子

春と云へば年月知らぬ山家にも花咲き亂れ鳥謡ひ鳴く

○　青森縣　河村かほる

嫁かん日のなんとはなしに嬉しくて軒端の梅もなつかしきかな

○　弘前　田中千勢子

破寥に小雨みだるゝ夕ぐれはそゞろに戀ひし故郷の村

○　奈良縣　栗山英子

菊匂ふ花畑しらう小夜ふけて寒月清う窓てらすかな

○　磐城　片﨑しな子

小夜更けて戸たゝく音に出て見れば友にはあらで落葉なりけり

○　高崎　長坂蝶子

都人たづれこん日をまちがほに咲き匂ふなり里の白梅

○　埼玉　長澤節子

何となくわかれし友のしのばれて落葉のまどに文つゞるかな

○　會津　霽月

露しげき草原小笹ふみ分けて聟なき墓に涙手向くる

○　鮎來町　芳子

なりなりは光を隱す雲ありて月のにほひはいやまさるなり

○　高山　武満美代子

大杉の雪さと落ちて荒鷲の雄子つかみゆく深山ほそみち　○　京都　岩淵國子

十六夜の月もおぼろのはなれ家に琴の音ゆかし新年の曲　○　仙臺　三好まさる

雪止みて清う晴れたる大空を輪を畫きとぶ鳶の雄々しさ　○　神戸　ひさ子

棒白き空には星の美しく川瀬の音の淋しう聞ゆ　○　近江　松本綾子

一人旅淋しき丘に杖引けばなき父にだも逢んかと思ふ　○　阿波　大伏やす子

母ゐます彼方の空をながめては何故となく涙ながるゝ　○　芝　深川瀧子

死にし子は容貌よかりしと宣ひし人忍ばるゝ同じ運命よ　○　丹波　あき子

故郷に殘せし母は如何ならんふく風あらく霰は秡りぬ　○　大坂　山田いな子

我胸にあるかなきかのひそめきもすゞろはしきの春雨のころ　○　大阪　生田　みりの女

永久にさかゆる御代ははてもなし千とせの松も落かへりつゝ　○　長崎　木原すい子

初春の朝日の影にかゞやきて磯邊の松の色うるはしき　○　長崎　楓子

さすらひの我をかなしみ小雨降る今夜を母は泣きてかもあらむ　○　陸奥　若生すみれ

うすくらき燈火の許に只一人故郷の友の上忍ぶかな　○　出雲　白菊子

お節句　萩町　小園敏子



君が代の年立ちかへるあかつきに千代々々と鳴く小雀の聲　○　日根市　川井重野

古里の垣根のあとやこゝならむやつれて匂う白菊の花　○　栃木縣　波多野　金履子

行きあひし花見の人の袖の香に梅の盛りは問はて知らるゝ　○　牛込　阿部きぬ子

辿り行く道もこほりて山寺はあか汲む袖に風ぞさむけき　○　伊勢　濱出きみ子

しかすがにかよわき母を思ふかなみやこの空に吾病む秋を　○　金澤　渡部蕗子

さき匂ふ櫻の花に光りそふ吉野の山の春の夜の月　○　陸前　白藤女

奥の間に眠れる稚兒をそと置きて詩集繙くさみだれのまど　○　本郷　西岡古代子

笛の音は祗園八坂か淸水か五條の橋の春の夜の月　○　小石川　吉田斐子

妹の毬かがりやる窓の窓花花追ひて胡蝶まひまふ　○　廣島　森田峯子

木枯に吹鶏されて松が枝に獨寒けく月のやどれる　○　備中　小林政子

たらちれの病の床を飾らんと手折し花に胡蝶眠れる　○　備中　塚本流星子

佐保姫の惠の露にうるほひてけしきだちけり庭の梅が枝　○　小石川　君子

金波ながしのぼるあさ日を一人あびてこの世のほかのおもひになりぬ　○　陸前　野菊子

初日影さす廣前に額伏してほぎごとあぐる冠の人　○　備中　大山ますす子

世をすてゝ深山のおくの柴の戸に一人のがれてかくれ住まばや

○　翠子
いくつぞと問へばおよびをゝりそへてゑまひもふかき初春のちご
○　熊本　桑原蓬子
紅紐の菅笠つけし少女子が蹈ふみうたの春長閑なり
○　周防　津田直子
山茶花の花を見つめし妹にうすら差したる黄昏の色
○　仙臺　白花
いざさらば此のうらぶれの身を捨てゝ常世の暗に沈まなん哉
○　土佐　信子
春は月我が家の上にかゝりしと故郷の野をこひしみ思ふ
○　陸奥　柳田泉子
我が村も霞みて鷄の遠きまで土筆つみつゝ野邊を來にけり
○　信濃　玉桂女史
うら／＼と霞たなびく春の日に野邊の遊びの面白きかな
○　滋賀縣　宇野民子
故郷の池は荒れはてぬ山茶花のひとつ二つは咲き殘れども
○　備後　中山八千代
里川に洗ふすゞなにれむりたるあきつをとりて息吹きかけぬ
○　長野縣　富坂菊子
野も山も色かはりける春風の蝶より輕き人心哉
○　備中　菅森露子
おぼろ夜や垣間にひくゝ身をひそめ琴きゝをれば櫻散るなり
○　上總　鈴木眼子
春の川船には人の思ひのせ花の夕かぜ長ふも渡る
○　富山　みわ女
七日七夜よみの都に火は止まず風ひたぶろに増す思かな
○　佐賀　坂井繁子
咲きそむる軒端の梅のこずゑよりのぼる朝日のかげぞ匂へる
○　茨城　青柳愛子
滑やらぬ昔の戀を思ひ寢に君と逢ひ見てゆめをみしかな
○　濱田　飯村春子

振りかへりものをも云はて過ぎさりぬ秋葉したゝろ夕時雨かな
○　伊賀　山村夏子
白梅しづかに咲ける庭椽に衣ぬひます尼若きかな
○　大阪　齋藤芳子
御陵のあたり埋みて咲花の白雲深しみ吉野の山
○　和泉　呑海その子
しめやかにつゞき降り來る雨のごと晴るゝひまなきわが心かな
○　備後　片田久枝
夢さめて枕に月の冴ゆる頃鎌とぐ音の寒さ身にしむ
⊙　後志　竹林女史
なつかしきはゝの玉章みごゝろに小田に寫りしかりの文字かな
○　大阪　廣瀬つる子
枯れあしのほとりにつなぐとま舟の藁ふく屋根に月さゆるかな
○　麴町　柳花女史
春の闇朧ろ香ぞする夢のよに語りめづべき花あらめやも
○　和泉　楓の子
野の神の眠りもりにと曉をはな野めぐりて霞たゞよふ
○　三河　深美京子
若草の野に遊ぶ小馬數へつゝ机の山越す日はうらゝかに
○　筑前　花田うらの
亡き姉が形身の琴をそと出して泪にくるゝ薄月夜かな
○　安房　吉田花園
枯れあしのほ綿も寒う散る見えて入江にすさぶこがらしの風
○　大阪　鎌田春枝
何事もうつり行く世にかはらぬは春立つ庭の松の緑り葉
○　羽後　菊池柳子
一人旅朝露しげき野路行けば遠山霞み鶯の啼く
○　新潟　山村芳枝子
何の野ぞたてろは君と二人なり今ま運袍の夜は明けなんとす
○　相模　とよ子
謹や卯の花垣を微笑みて見返りつ行く京の人かな

文藝遊戯

花ことば（課題）

はしがき

本誌四月の號に發表しました文藝遊戯花ことば猶澤山原稿が餘つてありましたので、其中の面白さうなのを左に揭げます、物言ふ花のいろ〳〵の言葉を皆さんもお聞き下さい。（記者）

深山櫻　上野　微音子

妾は山深い谷川の岸に咲いた櫻なのです、浮世の人は妾が都を遠く隔れた山奥に咲いたのを左や右と申しますが、妾は此處に咲いた事を却つて幸福に思ふのです、もうもう妾は、名利に迷つた都人に愛されて眺められるよりも無邪氣な馬追ひ乙女に翳される方がどれ程本望か知れませんそして時々筏士は妾の傍に筏を留めて圓な夢を結ぶのでありますが翌朝妾が筏の上で遊んで居るときに筏士はにこ〳〵しながら棹とつて漕ぎ出します。

蓮華草　京都　松風女

私は田の畔にはかなく暮して居ります蓮華草でございます。こんな者でも春風の君はそよ〳〵と撫でゝ可愛がつて下さいますし蝶々姫は絕えず訪れて慰めて下さいます、まあ何と幸福な身の上ではございませんか、そして少女がたのお宅へ參りますと花輪とかにされまして柔かいお頸へかけて下さいます、こんな幸福者はございますまい。

朝顔　東備　坂東須美子

私しは朝顔の花ですが、夏が來て私等が此の世の中へ出まして、御孃樣方を始め皆々樣が愛して下されて、無上の光榮と考ます、唯私等の殘念に思ひますのは、櫻梅なんぞの花は時候のよい春、世の中へ御出てになりますが、私等は夏皆々樣にお目にかゝらればならぬ事と、折角みなさんが愛して下さるのに、朝の間て衰微して、つまらないすがたを、御目にかけるのとです。

藤の花　宇都宮　芳野靜子

私が庭の藤棚の下て、女子文壇の原稿を考へて居ますと、突然藤の花が『私は花が咲く度に考へますが、どうも萬物の長たる人樣の頭の上に咲いて、大切なお頭やお顏に觸りますのは、誠に畏れ多い事ですから、何とかそれを避けやうと、種種心配をして見たが、何時も好い考へがつきませんから、今年はお孃樣から、お力添を願ひます』と私へ賴みました。

菫　羽後　渡部みや子

一躰世間の人々は妾を何と思つてゐるでしやう？詩人の好詩題としてもてはやされ升が、曾て一度も金玉の名吟に與つたと云いません。それに曩には御寵愛下された春姫も榮華は漸々妾の育て上た黄金を飾る蝶乙女菜の花姫に奪れて未だ一度の情ある心もよせず却てそがみ靴もて踏れ升、されど妾は泣きません。

深山の梅花　梅

私は梅花で御座ゐます御聞きづらひでしようが目下の境遇に諸花樣御耳を御貸し下さいな私は誠に憐れな一人ぼつちて住居と申せば人足遠き城山の麓で樂しい春は來まして心計り着飾りしてもたれ一人として見向いて下れません稀に仲好の鶯樣が訪づれて下さるのと私を非常に愛して下さる孃樣が度々來らしつてお花や誠に賞ないが妾處のお床迄來て下さいなつて伺ふのわ私嬉しくて飛んで行きますが散々持ち慰まなくちや置いて下れないのよまあ其の間の辛抱と申たらでも是れわ諸花樣御覺えが御座いませう私まあこんな果敢ない花で御座いますのよ。

坊と梔花　愛媛　三浦敏子

坊「何んだつてお前は口がないの」

梔「ハイ先祖の罪で子孫が皆此樣に不自由な身に成りましたのです、花つたらさ淫美しくもありませず本當に〳〵口惜くて〳〵成りません、ネー、坊ちやん早く賢く成て不自由な私を他の花樣などゝ、お話の出來ますような、お口を付て下さいナ」口梔の花は靜に、問ふが如く坊の顏を窺ひました。

白椿　椿愛女

私は當家の庭で幸福にくらして居る白椿ですが主人が非常に愛しますので家中の珍重者とはや

まれて居ります。此間も嬢樣がおつしやいますには「世の中に美しい花はかずあるがお前程高貴で優美でしかもどことなく愛らしい花はないよほんとに花の王だよ」つておほめに預かりました時は實に天上したよりも嬉しく思ひました。

無花果　岩代　齋藤若草

梅桃櫻や蒲公英などは、姿もよし色香も優美で、人に愛され謳歌されますが、無花果は色香もなく見榮もなくて、世間からは殆ど知られない。夫に花が無くて實を結ぶからとて無花果と營かれる、情ないぢやありませんか。花許りの山吹などはありますが、花がなくて實のなる物が何處にありませうか。

梅　茨城縣　足立錦子

庭下駄をはいて、お庭の梅の木の側迄行て見ますと、漸くふくらんだ位。蕾が開いたら嘸美しい事だろうと思ふて居りますと、ホヽヽと上の方で笑ひ聲て「花子さん、妾が美しい姿になるのは、もう直ですよ、早く美しく咲いて、お上手な貴女のお手で、生けて頂きたいのですよ、そしてお座敷の　お床の上にすはるのを何よりの、樂みにして居りますよ。」

櫻の言葉　靜岡縣　鈴木千代子

妾は一重とおふ櫻で御座いまして八重子さまといふ美しいお姉樣が御座います妾共は奇麗にお化粧して人樣からおほめにあづかるのが此上もない幸福で御座います朧ろに霞んだ春月が私共にかゝりました風情は、また何ともいへぬ趣味があると詩人の方から詩に歌に句に作られる妾共の喜びは、とても人樣には、おわかりになりますまい今年も奇麗に咲きませう。

鬼百合　岐阜　花村浪子

私は鬼百合と申す花でございまして昔からお墓のお守りをして居ります　それで世の中の人は私に死人草と云ふ名をつけてくれました　その後私が百合に似て居るとの事で鬼百合と云ふ名をつけてくれました　そうして今もお墓のお守りをして秋には誰も見てくれないお墓の傍で一人淋しく赤い花を開きまして　お墓の下に眠つて居る不幸な人を慰めて居ります。

忘れな草　和歌山　彩子

私は忘れな草です。」今は、御嬢樣の美しい詩集の中に挾まれています。過ぎし三年の昔、私はこの詩集の中に挾まれて紀念として兄樣の海軍少尉の御方から今の御主人の御嬢樣に、贈られたのです。かくて、私は大切にあつかはれ、又幾度かあの美しい紅ゐの唇から接吻を受けました。私はなんと幸福なのでせう。

なでしこ　羽前　白菊子

私はなでしこでございます、私は色々骨を折つて美しく咲きますので、人樣や昆虫は大變私を愛して下さるのよ、私はほんとに嬉しいわ、殊に人樣は私を少女に例へ日本の少女の事を大和なでしこ等とおッしやるのよ、又花瓶等にさして下さるのよ、又坊さんや孃さん方は、學校等につれて行つて下さるのよ。

さくら　大阪　伊藤初榮

妾は溪谷にすむ櫻です　昨日今日吹く風も大層肌心地よくなつたから　ぼつ／＼と水鏡して御化粧を初めやうかしら、だが考へると馬鹿らしい、折角美しうしても櫻狩とは名だけて　本統に見てくださる人がないのですもの　孃さん達は絹張の傘で顔をかくし　男の方は又其孃さんに見とれて居らつしやるばかり　一躰皆樣は何見にいらつしやるのか妾尋ねたいわ。

梅　神戸市　大谷百枝子

妾は梅の花でございます、他の花共は未だ地下に眠つて居る烈しい嚴寒に戰ひ今漸く寒いながら、他の花共の先きがけに咲き初めました、吾れ乍らまああのやうに忍耐が出來たかと思ふと、何だかうれしくて／＼……斯く申しちや甚だ御無禮ですが、人間樣方も忍耐が第一で御ざいますよ。

白菫　下野　鈴木ゆき女

妾は寂しい野の岡に咲いて居る白菫であります、姉もあり妹もありましたが、今は獨りとり殘されて、漸次ふけゆく春の野に、色まさる綠草の露や涙にむせびつゝ、果敢ない運命に世をかこちつゝ涙ながらにその日をおくつて居ります。

無名草　酒田　菊地りう子

皆樣、ありとあらゆる花を御存じでも此の私をお知りの方は廣い／＼世に一人もございますまい、私程世に不幸な花はございませぬ、現在自分の名も自分て知りませぬ、私は先の世ではそれはそれは何花にもまけない美しい花てした、私を見ては人間樣が皆醉つて御勉強も遊ばされず

狂ひまはるのです、て私は人をまよはす罪を以て神樣のお怒にふれ、此んな野末にはかなく咲いて居るのでございます。

牡丹　筑前　流れ星

花では妾が一番でしよう常に花園にかこはれて百色咲揃うた時は詩人も鮮を投じますよ。

菫の歎き　岐阜　白梅子

妾共は卷紙に卷きこまれたり本の間におさへつけられたりする爲に生れはせぬ。雲雀樣の音樂や、胡蝶樣の舞を見て、大勢の花樣と語り合ふと樂しんで、春と言ふ世へ生れたのであるのに、人樣の御目にとまると つみとられてしまふ。それて愈々首はうなだれる、顏色は惡くなる、そうすれば愈々人間樣がすみれ〳〵と仰有る。まあ何うしたらよひてあろふ。

すみれ　京都　梅子

私は去年迄名無原に、深山の友達と一處に咲いて居た菫ですが、昨春此家の孃さんにこの八重櫻の下へうつし植られたのです、其れから二三日は大變心配て、けふは萎れるのであらうか明日は枯れるのであらうかと思ふて居りましたが、孃ちやんの優しいお世話て漸く昨年を過しまして、今年も此處に淋しく花を開きました、處て孃ちやんはちつとも構れて呉れませんのです今朝も今朝とて二人の足音が聞へましたから、屹度孃ちやんてあらうと少さい體を充分延して待て居りました、處がお客樣と御主人とてお客ば大變八重櫻をほめて、足下には少しも氣がつかず、私の大切の葉を一枚ふみにじつて行きました。

梅　備前　黒住　昌子

妾は梅の花て御座います昨年の十二月頃から花を開ひて御孃樣方と面白い御話なしました面白い遊びなしようと思つてかりましたが、妾も容易に開くことができませんてしたが……ヨウヨウ今日開きましてお孃樣方と樂しく遊んだのですよ。

ひかげ菫　宮城　千葉さわ子

毎日々々かう考へて居りますに私ほど皆さんに可愛がつていたゞく花はマアなかろうと思ふのですよそれに引かへ日陰菫は同じ仲間て有りながらあまり愛して下さいません私はほんとうに氣の毒てす最も大切の花が日陰色てすしそれに香といふても小さなハアート形の深みどりてすから御目にとまる事が少ないてしようがあさから晩まて星かげ一つ見えれば蝶も音づれぬ深木立の下に佗ましうさびしげに笑んで居るしほらしの日陰菫をも私と同じに愛して下さい。

蓮華花　鳥取　西尾　靜愛

私は春の神樣の御惠て咲た蓮華花です私が咲きまして二日頃可愛らしい孃樣のお手につまれまして花わにされたり押花にして孃樣の水盤のあとゆかしい御文の中に入れられて方々へ行たりお友達のすみれさんなどとうつくしいリボンに結ばれて隣りの孃樣の許へお使物となりました。

櫻　松江　古志ます子

胡蝶樣うれしいのれ私あなたに逢ひたいばかりに遠い〳〵花の宮居からまゐりましたよ二人の孃は知れないようにれ私かたく謹て居ますあの嵐にみつかつてれたまれるとしようがありませんから、さあこれから遊びませうあなた御舞なさい私小聲てうたうわ。

歌の主　播磨　平谷たつゑ

「咲いた櫻になぜ駒つなぐ
　駒が勇めば花が散る

と詠んで下されたお人が眞實にお懐しい、私は毎年咲きますけれどそのお方はとはにお歸りはない」と或日櫻の聲がしました。

詩しらず　函館　巴女

お蝶さんは朝早いことよ内の若旦那はまだ起きませんよ、そして毎晩おそくまで他方に遊て居るのよ、それても私を時不知だと云て居るよ、にくらしいれ。

老梅　麹町　淺井千鳥子

私は老梅の花てございます、字の通り早老ほれてしまつて、勢もなく此樹に花瓣もぼけて美しくはありません、實につまりません、けれど皆樣は「あゝ好い香よ」と花瓶にお挿しになりますそれて私は幾分か老いの身に愉快な感じ、滿足を致して居る次第てす。

片栗　下野　稲富　紫泉

かたくりはかう申じました。
「菫ちやんやたンポヽちやんはさぞ妾の境遇を哀れと思し召すてしよう。牡丹さんや薔薇さんなどはさぞ富の子に愛寵さるゝのを誇られるてしよう。

されど妾は決して哀れな身ではありません、清い谷川の調で松の調ぶる讃美歌に自然を樂しみつゝ塵の世を捨てゝこゝに樂しく日を送つてるのです。

菜の花　長岡　秀子

皆様私は菜の花で御座います春の初頃田甫へ草摘に入らッしやると先づ私に御目がとまりませう見渡す限り黄金の毛氈を敷たやうに咲いて居りますと誰でもおゝ美麗と仰せられない方は御座いませんそれから私は非常に蝶子様と大仲好で春風のそよ〳〵と吹く暖い晴れた日に廣い野て雲雀さんの音樂を聞きながら蝶子様と二人てダンスを致しますとどんなに樂いでせう。

女三人　埼玉　近藤とく子

梅「櫻子様の處へはいつも美いお嬢様や奥様がいらしつてるのね羨しいわ私の處へは杖ついて瓢たん持つたおぢい様ばかしよ。櫻「でも風流な方ばかしでしよう和歌や俳句が聞かれて好ては有ませんか。菫「私の處へは學生さん達が好い聲て唱歌謡つていらしつてよ。兩人「あら誰かと思つたらあの可愛らしい菫子さんよ　さあ皆様と是から愉快に遊びましよ。

櫻　愛知　紫雲女

私が盛裝すると世の人は大層喜んで私の笑顔を眺めて酒を飲だり歌ふたり踊たりして恰て狂氣の樣だ私はそれが如何にもおかしい、けれど私は人を樂ませる爲に盛裝するのでなく蝶子さんの爲に盛裝して美くほを作るのよ、そして私の散るのを見て人はいさぎよいとか風情とかいふて賞めるが私はすきて散るのではない。いつまでも此儘て蝶子さんと仲よく遊びたいのよ。

櫻　荒川　久子

私は岸邊櫻子と申します。私が毎朝化粧して服などとゝのえ、水鏡にうつしまして少しでも悪が見えたなら、すぐ春風にはらつてもらふのは、婦人特有の綿密な心を一しほ注意深く、したいためでございます。

梅　滋賀　松ヶ枝

私は元此村はなれの堤の上に生れた者です寒中餘りの暖さに早過ると知りつゝも笑ひ出したのを村長の奥様に見付られ花瓶に挿れる時腰を折られて道路へ捨られたのを今の主人美ちやんにひろはれたのです美ちやんは晝は町へ野菜を賣り歩きよる私に新しい水をくれて病氣の母様を慰むるのでした私も此孝行美ちやんと共に母様を慰むる重い責任を持て居ます。

白梅　おぐるま女

庭の樹に寄り掛つて其の高き香に醉ふて居りました、すると何處かで幽かに「私がもしや此の香を持つて居なかつたら世の人は誰も無意味な花と顧みなかつたであらうに」と一人言を私は聞きました。

すみれ　加賀　大島澄江子

私は當家のお嬢さんのお氣にいりの菫です今こそは皆さんに愛まれるくらゐ美しく咲いて樂しく暮らして居ますが兩親も何にもありません一人ぼつちです親は里の子供のために無殘の死を致しました私の悲しみはどんなでせう毎日泣いて泣き明したです所へお慈悲深き嬢さんのために助けられたのです私は毎朝お嬢さんのお居間に向つて三拜九拜するのです。

花と露　高橋　ひろ子

花は露にむかひて「君の命はたとへん方なく短きものかな、そよふく風にもちり朝日なもまたて消ゆるものを」「いなとよ、君こそ風にはもろく夜の間の嵐を待たぬものを」「汝こそ露の命と諸人にうたはるゝにあらずや」などあらそう間もまたず花も露も一陣の風に誘はれぬ。

菫　宮城　内海えう子

私は廣い野原に咲いた菫でございますの、お友達は皆紫ですのに私許り白なものですから何だか心細いのですが、唯一つ蝶さんと言ふお友達があつて、毎日慰めて下さるので眞個に嬉いのです、今日も折角お待ちしてるんですけれどお出がありませんの、どうしたのか知らと心配してると驚くぢやありませんか、美いお空でお仲間と舞踏してるんですもの。

蓮花　深川　今井靜江子

皆さんは私が暖い春の御園にも遊ばれず秋の女神の御寵愛もうけませんで泥の中に暮すのをあはれと思召すか、しかし私がいくらよい色香をもつて樂しい生涯をと望んでも自然の御心のぜひない事故あたへられた位置に満足してせめて清い生涯をと注意に注意して居りますからこんな泥の中には居りますけれど少しもにごつた考はもちません。

抒情文

文學士沼波瓊音先生選評

二等 ○花うり

靜岡縣藤枝町 乙女

「花召せ、花召せ、さくら山吹白つゝじ」恥かしさきまりわるさに呼ぶ聲も口の中、京は四條の町々を私は花賣り歩くのであつた。住ひは三里と離れぬ近在ながら、來た事なければ見るもの聞くもの珍しう、わけて目をひく呉服や唐物や、美しい半襟、きれいなたけなが、一掛ほしや、あれ欲しや是ほしやと目に入るもの盡く氣に入りて、ついうつとりと立停れば、花やさんあすこで呼んで居るではないか耳はないのかやと心づけられて、ハッと耳の根迄紅うあかう染めつ。糸柳靡く御門を入れば、其白いのと紅いのをと指ざし玉ふ孃さまはちやうど私と同じ年頃上も下も縮緬づくめの、お召は縞で、羽織は摸樣で、雛樣のやうな美しさ、おなじ女に生れてと美しい着物見せつけられたが悲しくなつて、花買うてもらうた禮もそこ／＼、遁げるやうに走つて出た。

硝子張りたる店の障子にうつる我姿、見るともなくみ返れば、さても見すぼらしや、手束ねの櫛卷に帶は繩のやう、こんな姿してはづかしや町のたゞ中を、と今更氣がひけて、紅紫とりどり咲き匂ふ花束の中へ隱れるやうに肩すぼめて身をうづむる時、媚めかしい香りして、くつきりと襟をたてた厚化粧の、振袖は友禪の派手摸樣、織物の帶を長やかに結び下げた、あでやかな人が通つて行く、さもしいと思ひながらもさて心ひかれて、伸び上つて見送る淺間しさ。

半へりたる花の數に、財布の重みそつとひいて、せめて梅鉢の小瓶に都紅の一つ、父さまゆるしてと仰山な看板見返つた時、髯ぼう／＼と貧に窶れた血色の悪い顔が目の前に浮んだ、云ふ迄もなく夫は父さまである、長の病氣にかてゝ母樣は姿をかくして、力と賴むは

私ばかり、その私が、私が、たとへ二度こぬ春の十七といふ妙齢とはいへ、紅おしろいのさたとは何事ぞ、と叱られるやうに覺えて、看板の太文字怖ろしく、身ぶるひして立去つた。

片側町のはづれの肴やと、ぶらりと吊りさげられた父樣大好物の鰆の生身、一きれたとへ五十錢が一圓しても、あれ買うて歸つて早く父樣を喜ばしましよと、胸を蔽うた燦心の雲、きり晴るれば、耻かしさも、まの惡さもあらばこそ、早く賣り盡してと、聲はり上げて「花召せ花召せ白つゝじ……。」

（評）觀察も細かく描寫も精しく、幽婉の裡にいひ知らぬ哀れを覺えしむる雅致、何處やらに綠雨の香りあり。

秀逸

○夜半の工女

神奈川縣　川名かつみ

明日は五時に起きなければならぬのに、もう十二時過ぎてしまつた。工場で居眠りの一つでもしたらそれこそ大變、監督に眼の玉の飛びてる程叱られてしまふ、いくら寢入らうと思つても、朝から晩まで働き續けたので、勞働に慣れない細い腕は、打ち碎かるゝやうに痛んで仕方がない、横になつたり座つたりして、右に左に手を換へ、揉んでみても何の甲斐はありません、恁麼時に、せめても、なつかしい母や、從順な妹がと思ふと、はや眼は涙にくれて、傍に置いた薄暗い豆洋燈は、見別けのつかぬやうになりました。

まだ浮世の風に染まぬ身の、眠ることの出來ない程の苦痛に加ふるに、深夜の妙な器械の音、窓から射し込む電燈の光は、小さき胸をいと躁がせて、むら〳〵と今昔の感を湧き立たしめたのであります。

『昨日の淵は今日の瀬となる』の言葉は、耳慣れたことであるけれども。それが今の身には、非常に大なる感想を與ふるのであります、慕はしい母や妹に、樂しい音信を通はせた、筆やペンを持つた手には、固い鐵や木で造つた器械を握り、あの好いた學校服に、海老茶の袴を穿いた服裝は、妙な薄黑い尼の着るやうな服と變つてしまひました、部屋は煉瓦で積み上げて立派でありますが、曾て其處に輝いた、懇篤なる先生の眼光は失せて、恐ろしい監督の眼の、殘酷なる光が充實して居ます。前には何一つ不自由の無かつた身の、今は朝から晩まで働いて、その辛らい一日に得る日給は僅かに十二錢、此十二錢で身一切の費用を支拂はねばなりません。先づ大枚の八錢は食費に削られ、夜具代の五厘も拂はねばならず、醫藥代として二錢の貯蓄もせねばなりません、殘りの一錢五厘で何が出來るでせ

うか、八錢の食費で何を食べることが出來るでせうか南京米に味噌汁、味もなんにもない鹹い香の物の外には、何んにも與へて呉れません、變れば變る妾が境遇あゝ妾はなぜ恁麼處に來たでせうか、なぜ來なければならんのでせうか、今少しなつかしい母が永らへてと思へば、涙は一人湧き溢れて、袖は絞るまでになりました。

然し今では立派な母樣があるのであります、それはもう、實に快活で、威嚴があつて、言行一致で、何事も皆西洋式で御座います。妾のやうな魯鈍な、安すぽい氣のきかない者は實に御恥かしいのです。

さうです、十五の妾と、十になる妹の雪ちやんとを殘して、なつかしい母が死んだ翌年のこと、今度の母樣が、さる人の媒介で御出でになりました、又其翌年には、可愛い弟が出來ましたが妾のやうな安すぽい者は仲々一寸抱くことすら出來ませんでした。

母樣は、何んでも可愛い子ほど旅に出さなければならぬ、又獨立の氣風を養はねばならぬと仰せになりまして、妾は紡績工場に自活の道を立つることゝなり、妹は或る人の家に下女奉公に參ることゝなりまして、今此通りで御座います。

妾は常に人間は、生涯、苦痛と快樂とを透して、人生の目的に向ふ可きもので、人間の目的は苦樂以外にあると云ふことを信じて居り、勞働の神聖なることも亦自覺して居りますけれども、妾の信念が薄いのでせうか、將た又、之れが女性の弱點とも云ふ可きものでせうか、肉體の苦痛と精神の煩悶は、脆くも涙の種となるのであります、あゝ恁麼事は皆自分の恥、自分の精神の柔弱を示すに止まりません、もう泣きませぬ泣きませぬ、之れからは總ての苦悶を忘れて、益々自分の信念を固め、心の壁を磨いて、母樣の御氣に入るやうになり、可愛い弟を一度抱きたいのであります。

（評）あはれならざるにあらねど、繼母の事を記す邊、何となく繼子根性のあらはれて、作者の境遇に對する同情の念大に殺がれたり。



あみもの　山梨縣　古屋しげ子

◎旅だつ兄に　豐水　たまき

兄さん、兄さんはどうしてさうも雄々しいお心になつたのでせう、あのお手紙を戴いて誠に私は泣きました嬉しさに、阿母樣も窃と袖を目にあてゝ居られました、兄樣行つて下さい、行つて立派に成功して下さい衰微した家名を再興して下さい。

想へば亡父が一旦の過失よりとは言へ、累代の田畑を强慾あくなき彼花井の爲に奪はれてより、春風秋雨爰に幾年、此間悲憤の腕さすりしとても幾回、吁其都度妾には看護すべき老いたる母あるを思うて、躍る血汐を抑へ、恨の涙を嚙みしむる悲さ、實に妾の膓は寸斷せられん計り、兄さん今なればこそ白狀もしますれ實の處兄さんを恨んで居たのです、許して下さい、兄さんを不甲斐ない者と恨んで居たのです、が昨夜の雄々しいお手紙を戴いては、流石に迷へる茫々たる荒野の中に一望の光を見出したよう、我胸は一時に輝き初めました、兄さんどうか行つて立派に成功して下さい、早く阿母さんを喜ばして下さい、笑つた奴を笑ひかへして下さい。

別封は熱田神宮の厄難よけのお守りです、お守と言へば何だか迷信のやうにも聞えまするが、決してそんなものではありません、假令迷信であるにもせよ、此お守には妾の‥‥‥　愚かながらも此妹の眞情が籠つて居ます、ならうとなら妾も共々行きたいのですが、何分にも妾には家に居て一人の母を看護すべき身ですから兄さんは阿母のとは心配せずに渡航して下さい、さればば心だけを此お守りに込めてお送り致します、願は妾自身と思召して航海中も是非肌に付けて居て下さい、妾の姿こそ見えね、語こそ聞えざれ、妾の心が籠つて居ればどこ迄も兄樣をお守りいたしまする、決して〳〵捨てゝは下さるな。

言ひたいとは山々ですが是以上は胸に迫まつて到底言ひつくされません、只御身大切に母樣のとを心配せず百折不撓、立派に成功して歸つて下さい、呉々もお願ひ致します、かしこ。

（評）男まさりの氣象、兄を凌がんとす、頼もしく〳〵。

〇めでたきもの

相模　宮田白梅

あら玉の年たちかへる空にうら〳〵と登りたる初日影いと青やかに景色だちて立てる門松、少女子の今日を限りと、着飾りたる晴着の袖口あかく見えたる、あやの装束、鶯の梅が枝にきて鳴きたる、山櫻の旭に匂ひたるなど、えもいはずめでたきや。若紫の藤の花の松にかゝりたる。さらぬもめでたし。紅葉に夕日の影の殘りたる、ひろき萩原、霜にうつろはず咲きいてたる菊の花、秋のなかからの月の、雲の切れ間より少し顔見せたる、琴の音の高殿より洩れたるはめてたけれど、また誰がすさびにかと、心なやます人もあるらん枕の草紙などふるき物語の文よみて、むかし見ぬ我れも、上達部藏人女房どもの姿のうへ、めでたくぞおぼゆる歌などうすゞみもてかきながしたる水茎の跡、ざえある法師の白く長くのびたる眉、年齒ゆかぬ子供の手よくかきたる、三夫婦そろひたりと云へる家の翁媼は、

いかにめでたかりしや。雪の朝、小簾ならねど障子あけはらひて、まづうち見出すに、庭の草木のけはひもめでたく、あけくれ見しものとおぼえず、家々の屋根しろたへに、高きも低きもまた同じ樣に見え、やれたる軒端も玉のうてなかと、見なさるゝもまたいみじうめでたし。神代ながらかはらぬ富士の神山の、朝な夕な雲霧のために同じからぬ其姿、ひつぎの皇子の御息所さだまりぬると聞きたる、天長節、紀元節、曰く何曰く何、と凡てある中に、天つ日嗣しろしめし給ふ高御座の、ゆるぎなきこそ限りなくめでたけれ。

（評）文亦めでたし。

○寢られぬ記

名古屋　小山かく子

流行寒冒で床に就てから丁度五日目の晩であつた。人は皆寢靜つて夜は次第に更けて行くのに、自分一人は無暗と悲しくなつて、氣分がいやになつて、さむ氣がして乳の邊りと脇の下とが痛んで來たので……どうしても、肋膜か肺病になつたのだ……かう信じて、夜が明けたら早速醫師を呼んで貰ふ積りにきめては見たものゝ、中々眠氣は催さない。

肋膜が肺になつて、民子樣のやうに瘠せ衰へて、一年も二年も親兄弟に迷惑をかけて、あげくの果が冷たい墓に行くのが自分の運命か、さうしてそこに、學校時代に畫いた花の樣な希望も實の空想と化して煙の樣に消えるのかと胸が一杯になつた。と見れば生きた骸骨の影が枕元の障子に映つた、夫がどうやら自分の姿らしいので……あッと思はず身震ひ一つすると、眼が醒めて五躰は汗びッしより。ランプの光はいよ〳〵陰氣で身に染みる程寂しいのに、人の氣も知らぬ鼠らは鬼事でも始めたのか、天井が急に騷々しくなつた、吃驚するやら腹が立つやら……。

いつかの新聞に肺病を苦にして自殺した大學生の事が出てゐたが無理もない、自分でもあゝなれば死にたくなる、生きてゐたとて何が樂しからう。又こんな事を考へ始めると續け樣に咳が二つ三つ、胸の痛みは相變らずチクリ〳〵。

表に車の音が烈しくする、五時の列車が着いたのであらう。這出して火を吹き消した。窓は薄明くなつた。清い美しい日光も直にさして來るであらう。なに肋膜とも肺とも診斷されたわけではなし、夫をくよくよ心配するのが一種の病氣であらう、どれと、はね起きて汗にぬれた襦袢と上敷きの毛布とを搔いやれば、お勝手では火を焚くらしい氣配がする、大方妹であらう。

室は一呼吸毎に明るく、氣分は夫につれて快く、世界は再び新らしい六時を報じた。

○おち髮

西の國　病める人

「何故のこの落ち髮」いぶかり問ひし去年の秋、われなほ若かりき。「誰とても秋はさるもの」事もなき答へにげにも然るにかと。

若うして美しかりき、そよ、美しかりしとわれは云ふ人の世の春や十八、わが心春なりき、あゝげに春なりき、花なりき。

鏡に映るおもかげのさても痩せたりな、物や思ふと問はれて寒しこの秋風に夏痩と答へむにも由なきを、限りある春の命、散るべき時の花ならば何の怨みぞ、あああわれ乙女二九。

夏と呼ばむはなほ若き乙女二九。あはれ色空しくうつろひのこの涙の顏に何うれしからむ、唯せめてわれ故のひと日〳〵に見る眼にしろう老います祖母君のみ心安めむためにのみこそ、日毎々々に取る鏡、束ぬる髮や心の糸の結ぼれに手もたゆくもつれもつれて、悲し解櫛にあまる怨みや長きこの落ち髮。

誰知らむこの愁ひぞ、おろかしやつれなき人にかひなき戀と知りつゝ戀ふるわれはいつまでかく涙の身、泣き泣きて、かくて老いゆく春秋の、唯夢とこそ、夢の世とこそわれは觀ぜし世ながらにその涙涸れ果て、かくてわがむくろ、土に冷たき眠りに入らむの日、あはれせめてはこの夢の世に一掬の涙そゝぐの人ありなむには、われは安けく長き恐しき夢の世をほゝゑみて去り得べけむ。されど。

あゝその涙灑らの人もありやなしや、かひなき戀と知りつゝもなほかくのみにつれなき人を戀ひて、病みてかくていつの日その君にいとしと見えむ日のありや。

落ちよわが髮、一筋殘さず落ちよ、さあらばせめて朝な夕なの愁ひも安かりなむ。

誰ゆゑのおち髮、せめて君ゆゑと思へばうれし、この涙また君ゆゑと、思へばわがうつろひの色香何のうらみぞ、夢の世や、かくて寂しく片戀のわがむくろ、涙の中に朽ちゆかむのみ。

怨みは殘さず、涙の夢の世、さはれ、あゝさはれなほわれにはつれなき戀しき君いますの世、結び合さむおち髮にこもる思ひの通れよ三百里、かくてせめてはあはれと一掬のみ涙の、あゝわがむくろにそゝぐの折もあらば……。

この雨のひゞきはおなじく秋の聲、東の君が窓をも打たむ、あゝされど知りますや、暮れゆく空に愁ひ深く泣ける乙女ありと。知りまさじ、あゝおそらくは知りまさじ、窓の外あはれ細き雨に打たれてもつれながるるわがおち髮よ、誰知らむ愁ひぞや、わが涙またかくて人知らぬおもひを包んで細く〳〵、土に委しゆかむのみ。

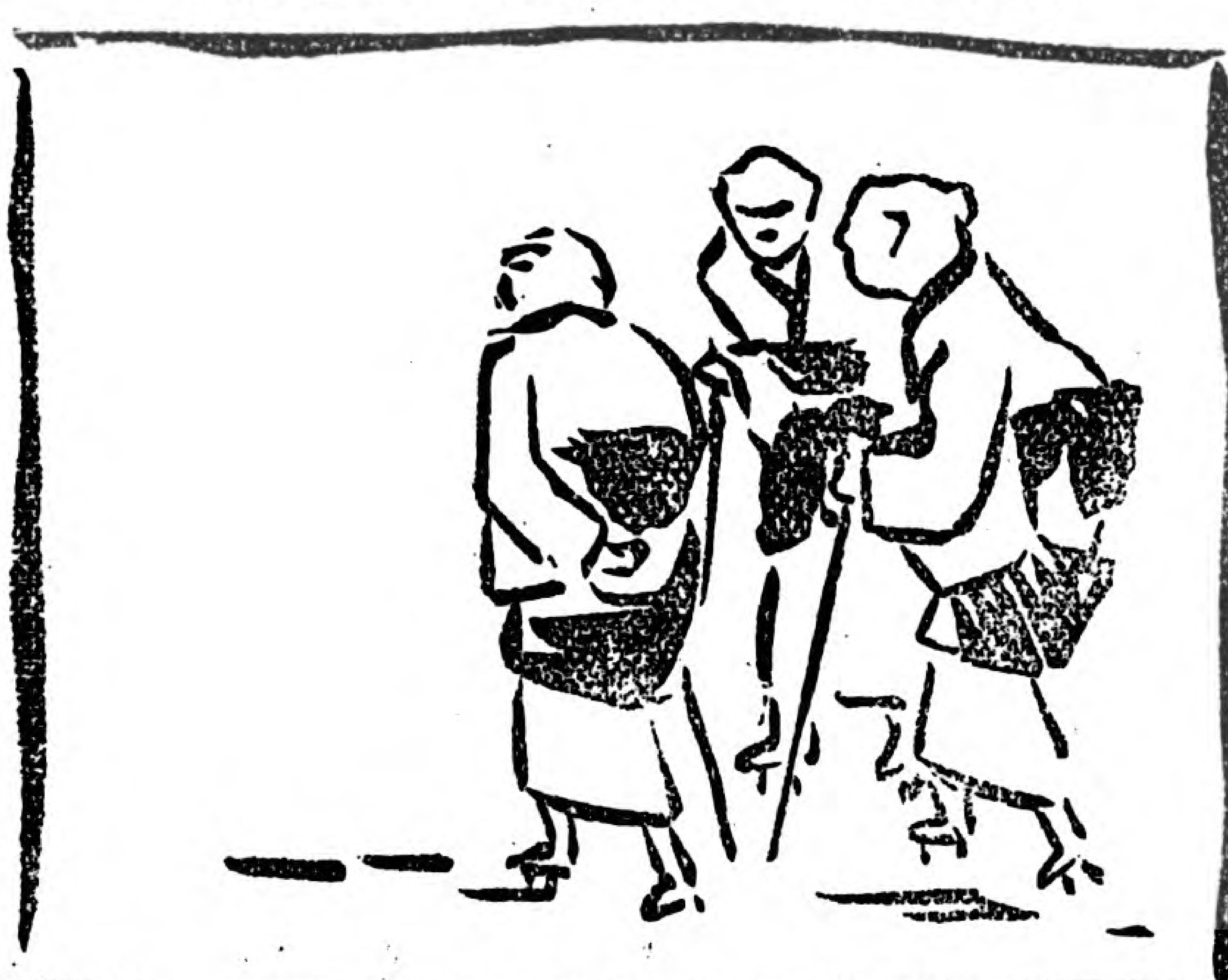
○妾の半生の歴史

羽後　白萩女

妾の半生の歴史、想へば夢なりき、十年前のこと、五

年前のこと、また去年のこと、昨日のこと、何れか一塲の夢ならざる。學校に居りし頃は、郷黨より秀才と稱へられ、妾も天晴れ名高き學者とならん、勳功ある女丈夫とならんと、稚な心に期したりしが、今日に至りて當時を追懷すれば、あゝ夢なりき。三人の兄上は健かに在すなり。妾もかくてあり、家運の傾けるを起さんと、難きことかは、と勇み喜びしともありしが、賴みし人は逝きてあらず、妾は半生を感慨の中に送りて今尙他郷にさすらへり、あゝ夢なりき。假令才なく學淺くとも、一人の老母に、安らけき生涯を送らせんとは、獨立自營の途につきし當初の考なりき、されどあゝ、されどそも夢なりき。既に一處女として世に立たんとせし時、貧苦だに意とせずば、心にかゝる雲もなかるべく、月花に嘯きて、不羈自在ならんこと、難きにあらざるべし、と想ひしが、そも夢なりき。この友こそ、と心に信じて、そが言に泣き、そが話に慰み、此交り百年變るまじと思ひしともあはれ、夢なりき。鳴呼、樂しと感じ、嬉しと思ひたることは、凡てみな夢にして、總ての後は、沈痛なる感慨のみなるぞうたてき。百年大夢の如しとは、古の聖もこれを說きたり今にいたりて、その謬らざるを知りぬ。あゝ夢か、この寂寞とこの沈痛のみは、竟に夢にあらざるか、大觀し來れば、喜も樂も、いづれか等しく夢ならざる、いづれを覺となづくべき。されども、時間よりしてこれを觀るに、長きを覺とし短きを夢とするは、或は當を得たらんか、廬生の富貴は、黃粱一炊の間にして、一書生たりしは五十年の生活なりき、されば、富貴は夢にして一書生は覺なり、人生五十年も、これを未來永劫に比して、釋氏はこれを夢と云ひき。あゝ妾が親友を得たりとし、前途に望の光明を認めたりとして、心に慰むるところありしは、短かき束の間にして泣き悲しみ、愁ひ悶ゆるは、二六時中の大半をしむ、即ち知る、妾は、夢に於いてのみ欣びさむれば沈痛悲哀なるべきを。あゝ、夢なりき、夢なりき、よしと見樂しと感ぜしは、凡て夢なりき、而して、かゝる儚なき夢にて、時々の感慨を忘るゝ程、妾はあさましき境遇にあるものなり。

彼岸まゐり　八王子町　乙幡もん子



◎可憐な妹　長門　孤菫女史

「姉さん、もうあしたは行くの、私是からひとりぼつちになるのね、私も行きたいわ、どんな遠方へでも、姉さんとならおとなしくして行くけど、でも母ちやんに叱られるといけないね、姉さんいつ歸るの？」

あゝ何といふいぢらしい言葉であらう見れば罪ない其目にははや一ぱいの涙さへためてゐるのである。

「オヽ美イちやん姉さんはね、こんど又ぢきに歸つて來るからおとなしくして母ちやんの仰ることとよく聞くんですよ、オヽいゝ子ね」

われは可愛らしき其手を取りひしと抱しめて思はず暗涙に咽べば彼も亦我胸に顔あてゝたなりすゝり泣くのである。

あゝ我はこの可憐の妹を殘してあすは遠く幾百里の外に旅立たねばならぬ身である。浮世はなぜに斯うてあらうか。神の如きこの子にかくも早く涙の味を覺えさせたはそも誰の罪であらう。

眞の母は其顔をさへ知らで死の神に奪はれ、頼に思ふ父さへ此頃はなぜか可憐なこの子につらくあたられ、今の母上に生れた弟をこよなきものと愛でいつくしまるゝのである、母の愛を知らず父の情に浴さぬ彼の心は冬枯のそれにも似て、いかに寂寞を感じてゐるのであらうか、嵐におそれ雲にうかゞひながら、密に彼が心に春風を送り黄鳥の聲を聞かしめてゐた我は、こよなき彼が慰藉者として、たつた一人を便りにしてゐたのである、さるを〳〵今又玆に其われも別れを告げねばならぬ悲境に立至つたのである、あゝ彼が小な胸には既に何物をか感じつゝゐるのであらう、わがなき後は何に因て慰藉を求むるてあらうか、冷たい氷の中に來る春をも知らで送る彼は、いかに其冷たさを感ずるてあらうか。

あゝ可憐な妹よ、何故かくも拙い運命の下には生れ來しか、さても不運の子よ！

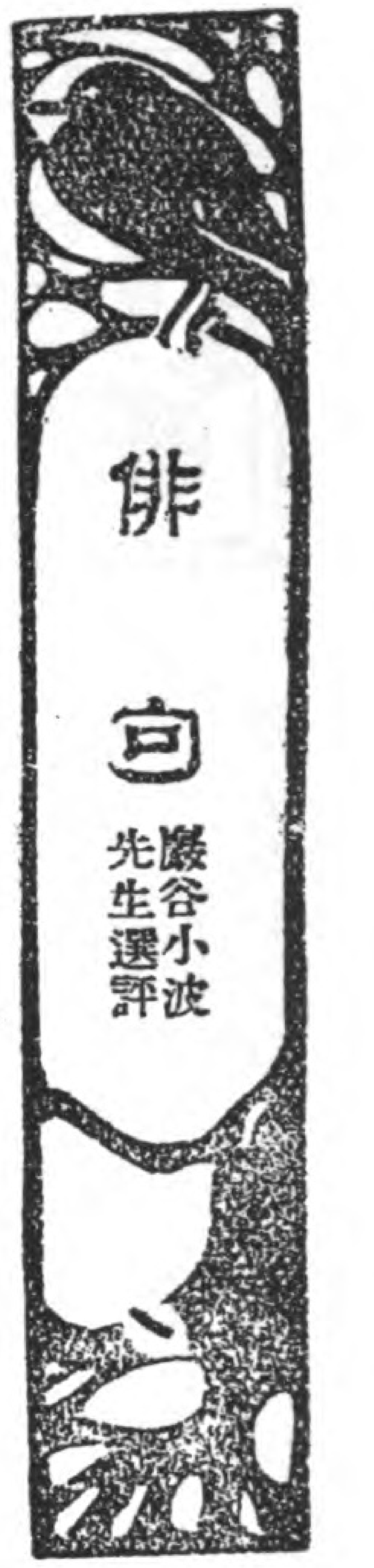
湧き出る涙をかくさんとすれば、あやにくに落つる握りし彼が小さき手に、一滴二滴又三滴……。

◎我が筆　甲府　秋葉子

旦暮なき我れに仕へし忠實なる筆よ。汝の祖先は清少納言ににぎられて枕の草紙を現はし、紫式部に親しみて源氏物語を出したり、汝の友は今なほ多くの文士に愛せられて、花にうかれ、月にあそび、或時は天地をも動かしつゝあり。汝も亦かゝる偉大の力を有しながら、祖先にほこらず、朋友を羨まず、方なき我れの許に在りて更らに憂ふる色なく、我が欲するまゝに働らく、げに汝は我が無二の親友として終生伴なはん事を頼ふ、然れどあゝされど我れは悟りぬ、汝と親しむには餘りに學淺き事を。

今は斷然思ひをたちぬ、明日よりは汝の祖先の遺せる跡には學ばん、而してより多くの學識と智能を得る迄は汝にまみえじ。

許せかし、我れは此清き流れに汝を投ぜむと欲す、深くなうらみそ、只我が心をくみてよ、さらば、我が筆！



三等

隙間もる燭の牡丹に及びけり　越中國高岡市通町廿一番地　北本歌子

〔評〕妖婉の妙あり。

四等

搖籃を覗いて行きし蝶々かな　日本橋區本石町三丁目一五　金子染子

〔評〕優しき命。

五等

狐にも逢はて野を行く朧哉　山口縣大津郡俵山　村田まつ子

〔評〕飄逸の氣あり。

秀逸

軍國や蠶飼に痩せし人の妻　越後　藤原黒子
冬の月猿の古巣を照らしけり　近江　田中紅雨子
川に瀕す校書の家や桃の花　大阪　山田いな子
菜の花や東近江の通ひ船　横須賀　落花一片
鐘撞けば櫻ゆれけり京の山　相模　中里簪花
日にねむる島の海馬や小春凪　上總　森久子

若草や犬追ふ物の竹矢來　千葉縣　野々宮芳麗女
若草やよき牛飼ふて放ちけり　備前　松本もと子
ぬつと出て兎を呑むや松の月　備後　落雁女
松の實のはたと落ちたる小川哉　駿河　松永しげ子
朧夜や小さき灯搖るゝ木下闇　本郷　齋藤八重子

春の花蝶の夢に匂ひけり　滋賀縣　川島嶺子
別莊の窓開けてあり梅月夜　越後　五十嵐みつ子
こがらしに木の葉渦卷く籬かな　神奈川　高梨たか子
鷺立て驚聞くや八幡前　久留米　中原澂子
よき人のテニスの庭の柳かな　尾張　野田葉子
傘さして行く女あり柳陰　矢名子
渡し呼ぶこだまに暮るゝ孤村哉　廣島縣　紫紅女史
錦木につれなき霜の夜明哉　北總　露子
梅に月惜まるゝ夜の始めかな　國山とき子
鐘の音や里に暮れ行く秋の雨　能登　天涙女史
柏手に梅こぼれけり神の庭　常陸　酒葉貞子
春雨に桃うつくしき小村哉　上毛　眞砂壽子
さゝ舟や風にまかせて春の川　鶴來町　芳子
甲板に太平洋の初日かな　伊豫　伏見圭子
蔭陸の小さき祠や梅の花　橫濱　花舟子
垣をめぐり百舌なく寺や暮の鐘　上總　伊藤秀子
八重霞奈良は昔しの都哉　下總　たか子
仁和寺や椿咲く日の御詣　和歌山　梅枝女史
居酒屋の煙からまる柳かな　橫濱　阿久澤雨村
破杓子春の小川を流れけり　下總　岩井芳江
雉子鍋に雨の夕となりにけり　水戸　島田澄子
春雨や病養ふ島の宿　印旛　酒井富美榮子
梅活けて遺愛の琵琶を彈じけり　弘前　竹内のふ子
竹取の翁がとみや初烏　備中　菅森定子
去年よりは化けず枯野の古榎　埼玉縣　田島苛子
春の潮夕日の海を流れけり　上總　森久子
水の垂るようなる土堤の柳哉　小樽　梶水仙子
渡し場に女の客や春の雨　弘前　工藤さよ子
居酒屋の亭主下戸なり梅の花　神戸　足立あさ子
夕陽や鯨潮ふく熊野浦　福岡　白百合子

書簡文

文學士沼波瓊音先生選評

四等

○深山里より

長野縣諏訪郡下諏訪　山田くに子

濃き雲迷ふ深山より、絶えて久しき筆ものし候。野河三里に山六里、十里あまりも都をはなれし淋しき山里朝夕の友とては、只猿の怪き叫びと、秋なれば鹿の妻よぶ聲をきゝ候のみ、心は常に都にとべ共さてあばらや乍らも、一家の主となり侍れば、何かれと忙しく、つひに今日迄の御無沙汰ぞ、平に免し給ひてよ。流れて早き月日とやらん、こゝに嫁ぎて早一年、さすがに都戀しうて……。嫁ぎし當座は恐ろしき事のみにて。雲深う立ちこめし夜など、遠く獸の叫び聲をきゝては、魂消ゆる思して、夫の膝に身をなげかけ、笑はれしも幾度にか候ひけん、なれてはさほどにも思ひ候はねど、昔戀しと涙流す夜は、何とも申せぬ寂しきねんにかられ候。彼の昔、御許様等とうちつれて、菫や薔薇に涙をそゝぎ、野路の夕に鐘きゝつゝ、ハイネの詩を吟ぜし事ども、今仲々に思出られつゝ、人の世の運命の妙なるを感じ候。耳に聞く獸の叫び聲のみなる里に、ブアヰヲリンもふさはしからずと思へば、今は只ほこりにうづもれ候、野に詩せんとさまよへば、百合や菫の優しきはなくて、只大木の魔風にさかひ、莊嚴に神秘をつゝみて立つのみに候。あゝさはれ君よ、都もこゝも變らぬものは、夜毎々々の星の光と、木々の葉末の白露と、やさしき夫の心に咲く愛の花とに候よ。

かけど／＼名殘はつきず、胸は千々にかき亂れ候へ共又の便と仕らん。今町に物賣りに行かん程に、何ぞ御用と尋ねくれし、お瀧ばあさんと云ふに託して、こをなつかしき君が御手まで。　あなかしこや。

（評）人里遠き山家に咲き匂ふ愛の花は、まこと浮世のものにはあらじ。

（又曰）末段一老婆を點綴して山家の様を見せたる手際、侮りがたし。

五等

○妹の許に

周防都濃郡戸田村　小澤ちゑ子

嘸々御驚きのことゝ察し奉り候、此姉が決心の程、言ふも苦しく、言はぬも苦しきまゝ、

一筆申上候、吁、姉は如何なる苦痛と戰ふとも、如何なる迫害に遇ふとも、此家は決して決して、去らじと思ひ居り候に、一夜、夫が涙ながらの物語り、其末に、何うぞ頼むから、此家を去つて與れよとのお言葉、事情は薄々ながら、日常、目に見耳にし居り候ことゝて、否とは言へぬ身のつらさ、夫の心を察しては、蔭ながら、涙に暮れしことは幾度に候ぞや、秀夫、秀夫、彼は如何なる不運のもとに生れ出で候にや、麗らかなる兩の頰は、優しき兩の腕は、母の惠み父の敎へに、育てられ候て、無心の笑を浮べて、此身を見上げ候よ、別離の近きは知らで、乳房を口に、復も無心の笑を浮べ候よ。人の世の思ひのまゝになるべきものに候はゞ。花に嵐はなきものを。忍べとや、餘りに情なきお言葉には候はずや、飽きも飽かれもせぬ夫より、去れよと言はれ候言の葉の、裏には如何なる事情のあるやは、お察しのことゝ存じ候に、もとより、私の身に受くる苦痛に候はゞ、忍びも、堪へも致し候はんに。



れじ

山口縣 白梅花女

吁、如何なる神の怒に觸れ候にや、夫と言ひ、子と申し、何不足は之なく候に、去らねばならぬ運命の…………、お察し下され度候。千々に亂れ候胸の中の、打ちふるふ手に、筆取り候て、さやかならぬ水莖のあと、よろしく御判讀なし下され度候。かしこ。

(評) 斷腸。

秀逸

○兄様に

南總 清水子

兄様、松田の姉さんはとうとなくなつてよ、私可愛がつて下すつた春子さんは本當に死じやつたの、おかはいそうね、昨日がお葬式だつたのよ、丁度一週間前よ私御見舞に行つたのは、どんなに御喜びなすつたでせう、大變御やせなすつてね、あの笑ふ毎にくぼんだえくぼも消えてしまつて、其かはり目ばかり鋭く、これが元の春子姉さんかと思つてよ、色々兄様の御話なんかしてね、おそくなつたから今夜は御とまりなさいつて被仰るのよ、私嬉しくつて姉さんの御床の中へもぐり込んで御手枕にしてねんね

したの、姉さんしつかり抱て下すつてよ、時ちやん程可愛ものはないつて、それから後もね、私は見舞に行きたかつたけれど、御父樣がね、春子は結核だから餘り行つてはいけないつて被仰るんてせう、兄樣、結核つてやつぱり肺病の事なんてせう、私とねんねした時もね、苦し相に咳なすつてよ、どうしてあんないゝ方に、そんないやな病氣が出來るんてせうね、悧口な人は早死するもんだつて、何日か婆やが云つたが、矢張彼世の地藏樣ても迎に來て連れて行つちまつたのかしら、憎らしい事、人の大事な姉さんを、失敬な、ね兄樣、一昨日よ御知らせが來たから、かあ樣と二人て大急ぎて行つたの、丸で眠つて被在る樣なんてせう、私御耳のそばへ口を附て、姉さんて呼んて見たのよ、だけれど御返事なさりつこないはね、死んて仕舞つたんだもの、私悲しくつて〳〵小母樣が指輪だの、かんざしだの、棺の中へ入れて上げなすつたから、私も寫眞入れて上げてよ、そら兄樣が候補生の時二人てとつたの、誰にもやるなつて被仰つたから、上げずに置たけれど、今度はいゝでせう、姉さんだつてかはいそうだは、一人ぼつちで淋しい三途の渡やら、賽の河原を通るんだつて云ふんてはありませんか、それに此間とまつた時、今度來る時はきつと持つて來て上げるつて、御約束したんですもの、ね兄樣いゝでせう、今頃はあの寫眞しつかり抱つこして地藏樣の所へ急いて被行るてしせう、姉樣うそ云つた事もないし、惡い事した事もないから、極樂へ行つて御地藏樣に可愛がられるのね、なんだか昨夜から三星樣の下へ新しいお星が一つ殖えた樣よ、お星はみんな魂なんでせう、あれきつと姉さんのよ、婆やもそう云つて居たわ、兄樣も見てごらんなさい、甲板からもよく見えるでせう。

（評）甲板に立ちて星影眺むる若き士官が眸に露や宿らん。

○病氣の友へ　坂本白梅女史

世の常とは申しながら木枯に落葉みだれていと淋しく覺え候につけても常に御しづみがちなる御許君にはいかに過させ給ふらんと思ひやり參らせ候處昨日御國元の御姉君よりの御文にて御あたりの樣はつばらに承りまゐらせ候いよ〳〵御機嫌よう御勉學遊され候事の嬉しきにつけてもこの頃御健康すぐれさせ給はぬよし御いたはしく存じ候人生の樂は無病にまさる事や候べきいかに諸藝に秀で給ふともいかに富裕の身に生れ給ふとも健康ならでは才藝も富も物の用に立ち申さず候御許樣などは他に御不足はあらせられぬに只々折々御病にのみなやませられ候事數ならねど年頃まことの姉妹の如く親しく交りまゐらする私の身には實に餘處ならず口惜しき限りにこそ候へされば申すまでもなく候へ

ども常々健康を保たるゝ様御心がけ専一と存じ候日本の婦人は他國人に比して大かた不活潑なりと評せられ候へどもそが中にも御許様などこそ運動のたらはぬものと推しはかられ申候間いま少し御快活に、よき程に運動遊ばされ候はゞおのづから健かにならせ給ふならん、さすればかぞいろの君に對しては第一御孝行ともなるべく存じ候まゝ、いかで賢き日頃の御心にかへりみ給ひて度を過さぬ限りの御運動くれぐ〵も御すゝめ申上候。

來年歸省の折にはつやつや〵しき御顔色肥えさせ給へる御姿拜したく今より待居候扨こそ例のなつかしき裏のひろ庭にて共にく〵妹らをも相手にしていろく〵の競爭もまたなき愉快なるべくと樂しみ居り候尙申上度事は濱の眞砂の數多く候へどもたゞ御すゝめまでかくなむ、かしこ。

（評）至當。

○忘れ物にそへて

大坂　山田いな子

只今は御立寄り下さいましたのに、おかまひ申しませず、失禮致しました、雨上りの道のわるくさぞかし御難儀て御座いましたてせう、御察し申してをります、何時もの通り、門の戸を御あけ遊ばすと、定めしなあちやんが御歸りのおそいのを待ち兼て「姉ちやん如何してこんなにおそくなつたの」と御尋ね遊ばしたてせう、其時に貴孃が妾の所に御よりになつた事を御話あそばしたら、なあちやんがどんなに御立腹遊ばしたてせう、定めし貴孃は山田の姉さんはうそつきよと仰せになりましたらうと思ひます、貴孃は御存知ないてせうが、此前の土曜日に御伺ひ申しました節、なあちやんに妾の編みました人形の着物を上げます事を約束致したので御座います、夫をつひ差上げる事を忘れてをりまして、何共申譯が御座いません、忘れたと申せば、貴孃も御忘れ遊ばした物が御座います、もう御氣がつきましたか、夫はおこしになる時に貴孃の身を守つた蛇の目傘です使に持たせましたから、どうぞ御受取下さい、夫から着物はなあちやんと御約束のてすから、何ぞ御渡し下さい、末乍らをばさまによろしく。

（評）忘れ物に添へて忘れ物を託したる、わざとらしからずしておもしろし。

○召使の親許に

大阪　村瀬蔦子

先達ては餘り熱がはげしいし、苦し相てしたから、取敢ずあの樣に知らせましたが、御安心なさい、仲は大分に快く成ましたよ、そして何やら悟うやら頭が上る樣になると直に、他人行儀を出して、用事をしやうとするんてすの、其を母が口喧しく不可ないく〵つて仰ると、仲は泣くのよ、決して仲が惡く取らない樣に言ひ送て下さい、母は病ひ揚句の仲を大切に思うて仰る

んですからね、仲に泣れると妾迄悲しう成るんですもの……。今朝もお薬を持つて行たら、仲は、勿體ないお孃樣に……、仰つて下されば行きますのにつて言ひますのよ、同じ家で同じ食卓で御飯頂くのですもの、妾は仲を他人とは思つて居ないに、此樣……他人行儀な言はちつ共いはない樣に、呉々も言ひ附けるのですが、又しても言ひますから、此樣言を言はないで、氣長く全快するを心懸ける樣に言含めて下さい、そして充分仲はこちらで養生さす積よ、ですから其お積りて居て下さい、御安心してね。

何かと委しう書き度いんですが、妾學校へ行かねば成ませんからね、何れ又委しく、まづは。

（評）美しき主人が情なるかな。

○姉上へ

香川恵女

姉樣先日は美しい半襟を、有難うございました、此頃は餘程お寒ございますが、やはり姉樣は朝七時から晩の五時迄て御座いますか、機織仕事はわけてお冷えなさるでせう、思ふと私しはほんとに幸福者だと思つて、姉樣にお氣の毒でなりません、奉公と申しても私しのように氣らくな者はないでせう、小家內でそしてお優しい方ばかりですから、親切にして下さつて、お給金を戴いて、お針も十分敎へて下さる、私勿體なくてなりません、又お孃樣は歲も一つ下ですから、お下りなんかも大抵私に下さいます、毎月の女子文壇も、お孃樣がお買ひになつて、私しの方がさきへ拜見したり、知らない事柄はお伺ひしたりなんか、ほんとにどうした幸せでせう。その上姉樣の御慈悲、お父樣や、お母樣は、あの世で私の幸を神樣にでも祈つて居られるのでせうか、私每夜嬉し淚に、枕紙を濕さない事はありません、だから姉樣御安心なすつて、寒い時ですから、お身體を大切にして下さい、お孃樣も本をお仕舞なすつて居られますから、今宵はこれで筆を止めます。

（評）可憐。

○古鄕の母樣へ

よね子

寒さいよ〳〵嚴しく相成候處、母上樣には御さはりもおはしまさずや、御尋ね申上候、私事當地へ參りてより、たゞ〳〵古鄕戀しう、母樣や弟等の事つかの間も忘れ申さず候、田舍はいづこも同じ眺めには候へども、こゝはわけて淋しきやうに感ぜられ候、夕方背戶の小川に京菜洗ふ手をとゞめて、打ち見渡せば、茫々たる田圃、たゞ稻の切り株を殘すのみ、目にとまるものとては御坐なく、西より東へと流るゝ川堤に立ち並ぶはぢの枯木、美はしかりし紅葉もいつしか散りて、枝より枝と傳ひ行く木枯の音のみいとゞ身にしみてきこえ候、げにやかく海山遠ざかり參らせば、よろづ心細く、何につけても心にかゝり候、み空に月なく星なき夕、

暁々と鳴き去る鴉の聲の怪しきにも、もしや母様が、例の持病いでしにはあらざるかと、胸さわがし候てともいく度か、誠に我ながら我の心の弱く且つ迷信深くなりしに打ち驚かれ申候、實に近頃の如くさむくなり候ては、御老躰さぞかし御難澁の事と推し上げ候、何卒何卒御身大切に御保養遊ばし、風邪などにも決して、御心ゆるし給はぬやう願ひ上げ候、昨夜あまり夢見悪しく候ひし故、何となう心もとなく、先は御伺ひ申上げ候、返すゝゝも御身大切に。

沛 弟 神田 樋口まさ子

（評）女らしき文なり。

○菫を封じて

鳥取市 上山千重子

温泉がへりの土堤づたひ、今日も亦そよ吹く川風に、びんのほつれ髪なぶらせつゝ、立ち昇る朝餉の烟の數讀みて、獨からころとかへり來り候。折柄川隈の春まだ淺き野草にまじりて、いち早く咲きいでしつぼ菫一むら、ふと見出で候まゝ、此上なく嬉しくて、早速あまさじものをと摘み取り申候。御地にてはまだ雪消えやらずとものし玉ひし先日の御文、思ひ出でゝ一本封じ參らせ候、之にて此方の空しのばせたまはるべく、なほ妾の病氣も溫泉のしるしか頓に快く相成り候へば他事ながら御安神下され度候、かしこ。

（評）安らかなり。



○遊學せる妹に

備後 白ばら子

大切の試驗前にあの様な不幸重なりし爲今年はよも優等で修業する事は出來まじなど母諸共に語らひ居候折からの御手紙取る手遲しと繰り返し拜し何時しか麗しき成蹟書の上に嬉しき涙こぼれ申候早速此の由母上にも語り聞かせ候處老の眼に清き涙たゝへられしわがれたる御聲でよく勵んで呉れたとの唯一言あゝ其時の姉の心は。

そなたの事故斯様な事はよもあるまじけれど數多の友達よりは賞めはやされ或は先生にもほめられるとおのずと自慢の心出でゝ顏にまで顯るゝもの故他人の賞め給ふは足らぬ故にそしり給ふと思ひて此上とも御勉强怠りなき様願ひ上候宅にも母上をはじめ弟にも何の變りもなく健かに暮し居候まゝ御安心下され度候。

尙此の節は時候の變り目故一入御身大切に遊ばさる様祈り居候かしこ。

○友に

北海道 くれなゐ子

昨日は遠方の處をおいで下さいましたのに御覧の通りの大混雜て、ろくにお茶も差上げず、誠に失禮しました、偖其折出發は午前十一時と申上げましたが、其列車は夜に入りましてからあちらに着くさうで、それては萬事不便と存じましたから、唯今相談の結果、八時出發にとりきめました、お送りして頂きたい譯ではございませんけれど外ならぬあなたの事故取敢ずお知らせ致します。

○嫁せし姉さんへ　越後　五十嵐美波子

姉さん、花ちやんは大きくなつたてせうれ、妾は花ちやんに人形の着物を一枚あげようと思つて、此間からせつせと針を運んでよう／＼出來上りましたから、幸宅の下女が母様の御用で御宅へ參るのに託して差し上げます。笑つてはいけませんよ、これでも妾が三晩もかゝつて縫ひ上げたのですわ。

○子守雇入の周旋を依頼す　大阪　辻　金子

寒さ凌ぎかれ候折柄皆様には御變りなき事と存じ候。在學中は「育兒。嫌な事、れむい學科ですわ」と申し居候ひしが、今は早やお互に母と呼ばるゝ身と相成候。

をさめし教科書又々取り出し、講義聞きし昔にかへるやの思をなし給はずや。扨一昨日私方の子守病氣の爲歸國いたし候て、大にこまり居り候。私は縫物に手がはなされぬ所へ「母様、淋しいのれ、一所に遊びませうよ、れえ母様」とそばへ來てむつかられるにはつく／＼よわりはて候。十五六にて高等小學二年位までは修業せる氣立てよき者にて御許様の御氣に召したるならば給料はいかほどにてもよろしく候。御出入多き御うち故御心あたりもと御めんどう申上候。未だなれぬ身故些少のことにも大狽狽仕り候。かゝるをりに御口やかましくとも母上のいまさばとせんなきことのみ思ひ出でられ候。先は御依頼まで、かしこ。

○花子様に　福岡縣　吉松雪枝

日一日と南より來る風暖かく太宰府庭園の梅も、昨日今日は眞盛りとなりました、昨朝よりは、裏山あたりより鶯の聲が聞えて、私に早起させます、今度の日曜には、一晩泊りて是非御出でなさりませ、又の日曜までには花が散つてしまひますから。

○奉公せる弟より　麹町　長谷川なを子

満に／＼御敎訓ありがたく存じます、此の頃はつい私の氣儘よりお一人

のお姉様に御心配をかけまして申譯のない事を致しました、私とても未だ年のゆかぬ悲しさに、他人と云ふ者はなぜこんな不人情なものか、お父様やお母様がお出なら……と毎度々々御主人より人は忍耐が肝要と承て居りながら如何してこんな不甲斐のない心が起るやらと我身ながらあきれる事も度々あります、車を曳くも荷を負ふのも皆な私の爲て後々に成功する端緒なのですもの、なんの私は少しもつらいとは申ません、嬉しく樂く心て思つてゐます故決して／＼姉様！御心配なさらぬ様に御願申上ます、今に私が立派に成ますれば、きつと姉様を安樂に御暮し遊す様に致す志なのです、姉様！どうか／＼あの世にお出なさるお父様お母様のお墓に、龍一は必ず／＼名高い商人になります故、けつしてお迷になられぬ様にとお傳言をしてください、毎夜々々さらふ讀書の中にも「堪忍汝を玉にす」とあります私は玉！玉になりますよ、姉様龍一の事は弟の事はくれ／＼も御心配なく願ひます、もしそれやこれやで御病氣でもおこりますと、私がこまります、人は病の器と申ますから御身を大切にしてください、弟が一生のおたのみです、實にくどう御座いますが龍一は他にたよりの無い身ですから。

○韓國なる人へ　麹町　冷　花女

御玉章うれしく拜見致候先々御揃ひ遊し御機嫌よくいらせられ、こよなう御愛たく存じ上候、此のかたにも一同無事に御座候、さて吉岡の御老人様御死去遊され候趣驚入候、同じ東京にありながら、知らぬ事とは申せ御見舞にも參上仕らで、誠に御殘り惜しく候、斯くとは知らず此の彼岸には寺詣りを兼れ、伺はむものと母共々御噂さ致居り候ものを、あはれ果敢きものに候、明日は早速に御墓參仕る筈に御座候、御地も、よほど御寒さゆるみ候よし、伯母様は御元氣出候はむ、當地の春もやゝに深からむとし早きは梅も散り初め候へ共未だ／＼風は冷く候、裏には嫁菜餅草澤山萌え出て一昨年の草餅騒ぎ思ひ出され候、仰の如く、うら／＼と霞棚引くころともなれば、花の上野の博覽會の雜沓思ひやられ申候、御見物かた／＼一度の御歸京あらんには如何にうれしく候はむな御都合上御見合のよしにてがつかり致候、御言葉までも候はず、ものさば必ず拙き筆に書きつゞり御話申上べく候御約束の小包二三日の中に發送致すべく只ほんの心ばかりにて、開けては玉手箱の類と御承知下され度、餘はまた後便にとかしこ。

新歌謠

編輯局選評

三等

小樽區新地町五番地　高橋喜美子

浪のまに〱飛び立つゴメは鰊の大漁告げにくる

自註、ゴメは海鳥の名。

世の民謠とか俗謠とかを作る者を見るに、殆んど徳川期の民間俚謠の眞似をして、其言葉を入れかへ、組みかへするに過ぎないが、民謠の特色は其時代の言葉を以て、其時代の新しい事がらをうつす處にあるので、古い言葉を以て古い精神を歌うて居ては發達の期はない、それで一番好い方法は、其地の風俗、人情、又は戀愛などを成るべく新しい言葉で、歌うより外はない、歌うてある事柄が目新しければ、民謠は活きて來る、只民謠らしい言葉を使ふ爲に民謠を作るやうでは、上手でも歌は活きない、成るべく其材料、其精神に現代の呼吸を入れて欲しい、此作必ずしも秀拔ではないが、材料が變つて居るから入選せしめた。

四等

土佐　潔子

珊瑚採る舟赤い帆上げて三十八里の沖走る

凡手ならず。

五等

京橋　今泉磯千鳥

一月二月の雪降り止めば此度四月の花吹雪

平凡のこと、言ひ廻して面白くも聞える。

秀逸

○福島　林まつゑ

裏のお山の片石ひろて私しや搾めます白香油

自註、片石は椿の實、白香油は高等化粧品

○横濱　阿久津雨村

春は行けども未だ雪のこる飛驒と信濃の國境

○新潟市　まさ子

暗いトンネルくゞれば野原花にぐる〱蝶の舞ひ

○上野　光蓉女史

着物も仕立た用事も濟んだ明日は行きましよお花見に

○越後　籠野とり子

私は十八妹は十五音樂博士に小説家

○長崎縣　多々良菊子

わしも行きたい京都の宇治に姉樣かぶりてお茶つみに

○河内　雪の舍花曙女

家も古びた田舍のすまゐ空氣ばかりは新しい

○豐後　安部木の華

臼杵の里にも名所が御座る一に稻二に松島や三で紅葉の白馬溪

○淀川吟はる子

姉はお醫者で妹は教師中のをのこは通譯官

○眞子

わしがすむ里機織盛りいまもにぎはしをさの音

○　岩代　岸野常子
伊達の川俣羽二重どころ杼の響きが日本に鳴る
○　山形縣　葉山秋子
花の紳から白ゆき姫に時の使か歸る雁
○　岩代　佐藤古登子
町に芝賣る山家のをばが孫の頭巾を買つて歸る
○　大阪　靜女
忘れませんよいつ〳〵迄も親の情の温かき
○　丹波　ＹＹ女
朝日てり出す雀はなくよ裏の小川で菜を洗ふ
○　名古屋　あや子
遊ぶ羊の吐息に燃えて赤く彩る野邊の花
○　牛込　川上清子
追風孕んで岬を越せば船夫は居眠る日はあたゝかい
○　周防　はる子
百合花がうつむく僞首く百合を密と起せば露が散る
○　高崎市　峠岸眞佐子
私の故郷上州の風は時々淺間の灰降らす
○　能登　舟倉二三子
船は出る〳〵妹をのせて妹小さな手をあげる
○　近江　田中紅雨子
鯨とる舟幟押し立てゝ金波銀波さくゞり行く
○　神奈川縣　萩原朝子
姉が七歳妹が五歳ふたり揃つて宮詣り
○　下總　小倉秋風子
鍬の謠うたしてなびく若芽のび出た雜木山
○　滋賀縣　川島嶺子
行つて遊ぼか梅の木茶屋へ心地よいぞえ花に醉ふ
○　日本橋　原田重子
露の羽衣旭にのべた蝶は桃からすみれへと
○　熊本市　石坂せつ子

學年試驗も首尾よくすませ早く歸らう故郷へ
○　茨城　中西歌子
お湯もわいたし御飯も出來た何故に戻りがおそいだろ
○　丹波　ふぢ枝
麥は穗を出すひばりは舞ふよ家の妹は宮詣り
○　上毛　紅葉子
父は醫學士妾しは無學嫁に行くのも恥かしい
○　長府　山中敏子
眞帆を揚こか片帆を揚こか沖にや鴎めが二羽三羽
○　肥前　柳原初音
人はきらうもそしるもまゝよわしにや自然の友がある
○　酒田　菊池りう子
汽車がかゝつて聯隊おけりやこれて酒田もすてがたい
○　函館　むら子
細いながらも煙りをたてゝ此の子そだてん針仕事
○　備中　山本登茂子
ほんに冷たい世の人心何んと言ふても親がよい
○　筑前　花田うらの
櫻かざした新賣女唄がよいので駒勇む
○　香川　玉女
五つ振分け十ではお下げ十五所で今島田
○　信濃　梅香女史
寒い國だよ信濃の國は秋の最中に霜が降る
○　横濱　むらさき
小鮎さら〳〵流れを上る岸はさくらの花盛り
○　岩代　三浦たい子
遠い外つ國御得意樣に妾は羽二重織る女
○　中野町　小川絹子
げんげはな菜の元祿模樣中を野川が銀の帶
○　小石川　片岡滿壽子
富士を彼方に春風額む桑摘畠が三十里

評論文

文學士沼波瓊音先生選評

四等

○自覺論

東京小石川大塚坂下町十七番地加持世界社内　北野まさ子

事業の成功は自覺に基く、自己の力量を知りて事に當るは蹉跌なき所以なり、自覺あらば、縱令蹉跌すとも再び起つの勇あるべし、境遇の許さゞるに學者たらんことを望み、體質の弱きに拘はらず勞働者たらんことを冀ふは、自己の力量を解せざるなり、即ち自覺の心に乏しきなり、既に爲し得るを信ぜば、天下何事か爲し能はざらん、企てゝ成らず、徒らに他を恨み天命を嘆ずるが如きは、意思の薄弱なるか、若くはその力量を正當に解せざりし過に屬す、奈翁が不能の文字を捨て去れと叫びたる、某が「詫びて住む古屋の軒の藁すだれ、いつまでかくて懸るべしやは」と詠じたる、好適例と見るべきにあらずや。

我は何を爲し得べき乎、又は何を爲さゞるを得ざる乎、是れ何人も考ふるを要す、この自覺はこれやがて人格なり、人は世に生れて何を爲すべきか、禽獸と均しく唯喰ひ唯寢る而已ならば、人の價値は零なるべし、朽木は彫るべからず、糞土の墻は築くべからずとするも、自己が自己を觀察するに於ては、豈多少の價値を認めざるべけんや、此價値を認むるは自覺の一端なり、自覺の萠芽は實に玆に存す。

自覺は勇猛心を起さしめ、從つて成功に導くべし、彼の徒らに成功を説いて未だ自覺を論ぜず、功名富貴手に唾して取るべし、王侯將相豈種あらんやと壯語するものあるは、偶女子を誤るに過ぎず、眞に愼むべきなり、一朝風雲に乘じて天下の耳目を駭かしめたるは、古來其の例に乏しからずと雖も、直に採つて範とすべきにあらず、況んや機會は禿頭の如く捉ふると頗る困難なるに於てをや、少女諸君冀くは先づ自己の價値を判ぜよ、然る後徐ろに爲し得る程度を考へよ、而して同時に人として爲さゞるべからずと思ふ箇條を求めよ庶幾くは圓滿なる成果を得む。

（評）妥當の論、何人をも首肯せしむ。

五等　○嗟貧街の暗

南越　濱野女史

夜は森嚴なり、夜は崇高なり。

殘んの日影、橙色の雲より薄れて、夜の帳深くたれ、人は漸く晝の勤勞より幸ある夜の慰藉に眠らんとす、夜は實に人生のパラダイズなり。

天の惠に潤ふ神の子が、快くこのパラダイズに遊ぶの時、誰れか夜を以て惡魔跳梁の時となすものぞ。

されど夜の下にも猶ほ蛇あり。

靜けき夜の闇の裡に、聞かずや、慰藉なき民の聲あるを、人は此の聲の主を貧民とよぶ。

貧街の夜は悲慘なり、闇黑なり、人生幾多悲劇の幕は多く此の時、このところに開かる。

見渡せば滿天滿地、悉く眠り盡して、只だ金砂を鏤めたらん如き天の星のみ、其の光に驕慢の色を表はすとき、聞け、貧街の一隅に微けき私語あるを。

夜をパラダイズとや、そは富ある者の謂なるべし。我が貧しき兒の群が恐れ迎ふる夜は、惡魔の跳り狂ふ庭なるのみ。

世の總ての人が、幸ある夜の暖き懷に眠り、一日の勞苦に對して過大なる報酬を得つゝある時、ア、貧街の兒のみは、慰藉なき民として尙ほ苛責の笞に鞭れつゝあるなり。

月凍る冬の夜半、薄き蓐は彼等に安けき眠りを與へざるなり。風なき夏の幾夜を、彼等は終に戶外に過さゞるべからず。明日のパン無き時、兒の飢ゆる時、妻の病める時、ア、彼等は終に、夜の靈泉に浴する能はざるなり。

斯くして貧街の夜は罪惡を意味し、墮落を意味し、闇黑を意味す。

世の人が望みある明日の光を迎ふべく夜の眠りにつく時、慰藉なき、希望なき貧街の夜が、罪惡、墮落、闇黑を以て滿たさるゝも、亦やむを得ざらん。

ア、貧街の夜、また悲しからずや。

夜の森嚴とは何ぞ、夜の崇高とは何ぞ、貧街の夜は只だ罪惡あるのみ、墮落あるのみ、闇黑あるのみ。

世の富に狎れたる人よ。天の幸ある惠に浴して、夜のパラダイスに眠らんとする時、惡魔の魔杖に指されたる神の子が、悶え苦しむ貧街の夜あるを思へ。

（評）「此の聲」大ならざるに非ず、而も其反響の小なるを怪む。

秀　逸

○詩

京橋　しろはぎ

詩は生命の批評也、詩は高尙なる思想を人生に適用せしむるの目的也。之れあるが爲に人は無情と頑固とを和し、之れあるが爲に人は利欲と私憤とを和す。嗟乎俗臭紛々たるの濁世が、如何に詩に因て淸化せられつつあるかを知れ。

自然が奏する調和の韻を亂したる我等社會に於て、自然の韻を合奏せんとする詩なくんば、如何にして精神上の滿足を得んや。詩は人類が理想を呼ぶ煩悶の聲也。而して人類が詩人の詩を誦吟して、自ら慰むる所あるは疑ひもなく之れ人類の煩悶を代表したる詩人の聲に贊成するものならずや。

詩なき國民は、野蠻の國民也。詩なき國民は、薄弱の國民也。詩なき國民は、偉大ならざる國民也。カーライル曾て英國の有力なる所以は、印度を領するの所以にあらずして、一のシエークスピヤを出せし所以なりと叫びしにあらずや啻に十露盤粒のみを彈きて無暗に利益に巧なるを以て國民の眞相とせば、何ぞヒニキア人は偉大ならざりしや、健全ならざりしや、開化せざりしや。



風琴　本郷　金井れん子

人は現實の裡に、髣髴たる理想を捉へて、僅に煩悶の心を慰むるもの也。斯して人は詩によりて批評せられ、詩によりて煩悶せる理想を髣髴の間に求め、以て至善至美の韻に合奏せんとするにあり、源義家が衣のたては綻びにけりとの至善至美に打たれて、自然の心に歸り、或はグレーが一句を唱へて、タエベック城を拔くよりも、千載不滅の佳什を得るを以て、人生無比の名譽とせるが如き、古來內外幾多の英雄豪傑が、詩によりて天地の美に合し、俄に理想美の美に調和せんとするの心を惹起せしは、少なからざるにや。

然るを若し吾人々類にして、優美なる心を欠き、天地の美に對して何等の感興をも惹起するなくんば人は唯これ土偶と何ぞ擇ばん、社會は、眞、善、美を拂ひ盡して、全く僞、惡、醜に沈淪せんのみ。故に、我は、今日物質的發達の盛なると共に、詩の必要益々大なるを知る。とはいへ享樂時代の詩が、王道の衰頽に大原因を與へたりしを思へば、病的詩の害を認むると亦切なるものあり。敢て當今の詩人に訴ふ。

（評）文にしまりなきが瑕なり。

○偶感

秋田縣　黑丸とみ子

◎遇はざるも可、遇はずとて山には入るまじ、山は聳ゆるのみ。容れられざるも可、容れられずとて水には入るまじ、水は流るゝのみ、終生遇はず容れられず、導ろ快。盡くるなき世の盡くる迄も、猶遇はず容れられずんば、快更に大。其時妾は一箇の世界たることを得べければなり。

◎爭ふべきが若しも務めならば、妾は一人と爭はず、萬人と爭はん。一事と爭はず、萬事と爭はん。一物と爭はず、萬物と爭はん。然かも猶ほ一代と爭はず、萬代と爭はん。

◎明治に入りて最も進歩したるものは演劇なり。次には繪畫なりと、或人は言へり。我が文學界は如何、名に於て上にあるも、實に於て下にあること幾十段、人物論の起る、偶然にあらず。

◎今の風流を説く者、風流を知らず。嵐山に首を縊るも猶ほ風流なりとおもひ、鴨川に身を投ぐるも、猶ほ風流なりとおもふ、彼の聖護院の森を目當に走りたるふたりづれ、纔かに風流の半ばを解す。

◎漫に譽むる者は、漫に譏る者なり。明治文學界の未盛んならずして、而して日に衰ふるものある、是豈阿諛的評言に寄せらるゝものにあらずや。されども、阿諛的評言に敗らるゝが如き文學界は、ありとても頼もしからず、敗らるゝまで敗られて、而して後堅固ならば、妾は深く今日を咎めじ。

（評）第一、第二は、たしかに偉人達士の語。

◎瞑想錄

上總　山田沖子

○死の默示は、宇宙人生のあらゆる一切の學説教理を綜合したるよりも大なる敎訓也。

○人は富貴の上にも富貴を欲し、榮耀の上にも榮耀を望むもの也。然れども如何なる人も、常識あるものは死の前には人生の無常を觀じて、富貴榮耀の空華幻影なるを悲嘆せずんばあらざる也。

○既に死也。死の導くところに從ふは吾等の分ならずや。たとひ不滿足を感ずるも、不平を訴ふべきにもあらず、物質不滅の學説の如きは、吾等の生命と何の關する所ぞ。之あるも死し、之なきも死す、靈魂不滅は望みて遂げ得られざる希求のみ。

○生前一杯酒、死後千載名と、言ふことなかれ、何れをか取り、何れをか捨つると。先づ問はん、生前に酒を廢して死後に如何なる名を傳へんと欲するかと。勉めよや爾曹、世の偉人とは、蓋し生前に酒を愛して而して死後に名を傳へたるものゝ謂ひ也。

○爾曹は血族保存に於て爾曹の滿足を得んと欲するか果して然らば、先づ我が司馬江漢の言に聽かんことを要す。曰く、わが子われ一人のものに非ず、夫婦の間より生ず、子亦孫を生ず、孫亦玄を生ず、漸々血脈の

遠く淺く淡くなりて、末に至りては悉く他人となる。然れば他人皆われ也。と。

○壽は之を歡び、夭は之を傷む。之を歡ぶ極は無量壽を欲し、之を傷む極は不死を願ふ。嗚呼人とはそれ慾に生れて欲に死せざる可からざるものの謂ひ乎。

○不死は想に於ては之れ有り矣、然れども之れ有るがために吾等は不死と爲り得らるべきに非ざる也。然れども人にして若し不死の念慮の動かし難きものあらば如何。その人は主觀に於ては既に不死の人となりしに非ずや。果して然らば、世には死して死せざるものある也。

○死して而して死せずと爲し、之に安立するもの、是れ豈に一の大なる神秘にあらずや。斯の如きを説示して、却りて人心を悅服せしむるもの、是れ豈に一の大なる幻術にあらずや。悉くこれ信仰の致す所にして、宗教の生命は蓋し焉に存す。

○信仰の力は幻を眞とし、空を有とし、非實を如實に顯現す。誠に人生の一大魔力なるかな。淫祠邪教の世に絶えざるもの、蓋し亦止むことを得ざる也。


畫者　河內　香村はな子

○死は誠に人生の一大事也。理に於て諦め易くして、情に於て諦め難きこと、死に如くものなし。嗚呼、吾等は科學に於て既に死の事實を究め、哲學に於て既に死の原理を尋ね、宗教に於て既に死の神秘を探れり。然り而して死の諦め難きこと、今猶ほ昨の如し、誠に不可思議なれども、而も實は理の當然也。

○吾をして實驗を拋ち、論理を脱し、暫らく村翁野媼と共に語らしめよ。現世は吾等の假寓にして、未來は吾等の安宅也。吾等は神佛の命に依りて去來するものにして、出生の前後、命數の長短等は、固より吾等の與り知るべきに非ざる也。未來の世界には、わが父も在り、わが兄もあり、師とすべき古人も在り、友としたる知己も在り、而して吾に後れてわが母も來らん、わが妹も來らん、乃至あらゆる一切の人は盡く集まり來りて、茲に永久無限の淨樂を享受せん。現世を好みて又未來をも愛する也。

この故に吾等は、現世を好みて又未來をも愛する也。而して斯の如きは、皆是れ神明佛陀の大威德の致す所にして、吾等の日夜感謝して措くこと能はざる所也。未來の信仰なる哉、未來の信仰なる哉。而して未來の

信仰を有する人は福なる哉。

○死は或は之を喜ぶべく、或は之を悲しむべし。而して喜ぶ可きに之を喜び、悲しむべきに之を悲しむもの之を眞實に人生を味ひ得たるものといふ。

○匹夫匹婦は信仰に依りて生き、學者智者は修養に依りて生く。この故に信仰なき匹夫は死の前に涕泣し、修養なき學者は死の前に平素の主張を失ふ。

○人生に於て最も美なるとは臨終の美なるとこれ也。

（評）筆は例によつて達者なれども、論理の一貫せざるが疵なり。

○靜思錄

上野金岳女史

（一）

妾は除夜の鐘の數をいつも滿足に數へつくした事は有りませんから今年こそは是非數へつくして見ようと思つて眠らずに待つて居りました、其の中に十二時が鳴つて少したつと寂寥を破つて響き出したので數へ初めました、そして四十五迄は何の氣なしにやりましたがそれからそろ〳〵倦き初めて漸く七十迄我慢して數へましたがそれから先は倦きて倦きてもう數へる勇氣は有りませんでした、しかし新年早々此の樣なことでは仕方がないと思ひましたから我慢して九十迄數へましたが困しかつた事は非常でした、それから先は元の通り平氣にいと樂々と百八ッ數へてしまひました。

凡て倦怠と云ふ事は途中の尤もかんぢんな時に襲ひ來る者で是れに負けた人は所謂失敗するので、是れを忍び堪へる勇氣の有る人は萬事成功するのだと思つた。

（二）

近所に急病人が出來たので近所中の人々が鎮守樣へお百度を上げると云ふので妾も一所に行きました。

鎮守樣と云ふのは山の麓に有るので、老杉が森々と生ひ茂つて居て晝間でも薄暗く何となく底氣味惡いので晝間でも一人では仲々行き兼ねる所なのですが大勢でもあり又九死一生と云ふ塲合ですから何んとも思はずに行きました、見ると御堂の中に四五人寢て居るのです、驚いて尋ねて見ますと中學校の生徒さんださうです。膽力養成の爲めに此處に寢て居るのださうです。

いくら淋しい所へ泊つても恐しい思ひをしても大勢では人を頼りに思つて居るから駄目です、妾達のお百度を上げたのも同じ事で大勢だからこそ此の淋しい所へ來た樣なもの丶一人では誰あつて來る人は有りません

膽力を養成しようと思ふなら無理に淋しい所へ泊らなくも恐ろしい思ひをしなくも困りさへすれば自然と膽力は養成されます、乞食が淋しい所でも恐ろしい所でも平氣に安眠して居るのは皆膽力養成のけいこしたのではありません。

（評）所謂成功の秘訣、膽力の養成法なるもの、亦論者の言に外ならず。

（又曰）叙事を以て起し來れるも面白し。

短文

編輯局選評

一等　○乳しぼり

明石西中町　白旗清子

さつぱりした白い筒の服に更へて、町端を流る小川に添て牧場へと出た、廣々とした原には黄瞿粟が一つぱい咲みちて、飴色の牝牛が長閑そうに草を食んで居る私は暖い光に醉ひ乍ら、眞白にしたゝる乳をしぼるのが毎朝のつとめてあります。

油繪よりや拔出たる。

二等　○小原女

京都市　孤雁女

今年も大原へ薪を持ち來る可く云ひやりしに、今朝着きしを見れば各々四束の薪をいたゞきつ、前なるは兄嫁、次は弟の嫁、其次は長女、其次は次女、かくて最後なるは今年七十一になりし老祖女。

京都式。

三等　○挿柳

福井縣丹生郡吉野村餘田　片山千里

丁度妾が高等二年生の時であつた、お父さんに柳は挿してさへ置けば、根が付くものだと聞いて、學校から戻り掛け澄子さんと二人が、折りては挿し折りては挿した柳今日も見れば渡し舟が繫いてあつた。

頓てのことに一抱。

四等　○風の音

青森縣　藤原千代子

私の村は三面山を繞らし一面は海に瀕し戸數僅に十三戸の眞の田舍極近き汽車停車場へ十六里もある誠に不便の處です故に汽笛や樂器の音は一年中絕て聞く事はありません只雪を卷いて吹き來る風が山々の木の枝にあたつてゴー／＼とする音のみです。

南溪が「東遊記」にも洩れたる地。

五等　○卒業

群馬縣利根郡片品村　星野すみれ子

卒業と云ひますと、うれしく、めでたさうに聞えますが、年月共に遊んだお友達や先生や住み慣れた校舍との、之が、わかれかと思ふとなんとなく、悲くなり思はず卒業證書を――うるほしました。

清い涙、美くしい涙。

秀逸

○小鳥　鹿兒島市　とく子

朝早く手水をつかうて居ると頭の上の椿の枝に小鳥が二羽何か話して居る音させじと靜に聞くと一羽が私はしき物をさがしてくるから御前は巣の好き處を見つけに行けと云へば他が、はいその巣は何處のあたりに、折から何の音におどろいたのか飛び去つた。

鳥語、初めて聞く。

○うつり變り　周防　三井はる子

僅か一年半他行して歸つて見れば、戶數三十に足らぬ妾の村に死人三人病人一人、お友だちの缺けたの二人赤坊の出來たの三人、それに妾の家では淑坊が竹馬に乘り出したとの大悅び。

まことや滄島は三百年。

○四年ぶり　能登　天浪子

妾がこの學校へ入學してから、もう四年入つた當時は四年生のお方などは、今の妾等よりもずつと大きなお方ばかり、今になつて見ると、だん〳〵生徒が少さくなる樣です、今年入學した生徒も、やはり妾等の入學した時の樣に妾等を大きいと思つて居ませうか。

去年の一年級、今年の二年級。

○お名殘り　鳥取市　上山千重子

不意に父樣の御轉任、我所有と住みなれた此の地も五日の内に去らなければなりません、半ば悲しく半ば嬉しく、思ひみだれて花さくかげに彳めば、風なきに散る花の一ひら二ひら、そつと紙につゝんで名殘にと手筥に秘めました。

立退く時は花も連れて。

○初めての人に　沖繩　弓削藤子

内地より沖繩は暑くて夏のやうでありますね今日は特に別誂の天氣ですから當地の名所見物に御供仕りましやう當地の名所は九州にて有名なる大きなあながありますよ其所は普天滿と云う處です沖繩も盛になりまして自轉車などは毎日行きますよ。

「草鞋はいておじやれ」と歌うた地も自轉車に乘つておじやれとなつた。

○これから　土佐　演子

妾が開いた、妻戶の音に、驚いたてもあるまいけれど小雀が二羽、軒のほとりから庭の梅の木へうつゝた、と見ると、羽色美しい地鷄の雄が、眞先に巣から飛び下りて、勢よう羽ばたくと、一聲高う……これから世は又、激しい耋の世界！。

戰ひの時を告ぐ。

○車上の感　　出雲　道子

暫く足を病んで車で通學した時の事でした。田舍の道は凹凸がひどいので車上の身躰は、一上一下右に左にゆられゆく其心地はまるで上下動や水平動の地震其儘てあると思ひました、そして此時親より賜はつた二本の足で歩行する事のいかに愉快であるかを知りました。

徒歩主義の福音。

○紀念の薔薇　　信濃　有賀まさ子

六日は亡母の命日でござります。其日何氣なく植ゑた紅薔薇は最早四歳を過ぎて大層見頃な、妾は此花の咲くのが一番の樂に毎朝誰よりも夙く起きてゐないてゐる葩に屹度接吻致します、と夢の樣に懷しい面影が現じまする、優しい花の心妾より他には解りますまい。

是はほんとうださうです。

○夢の胡蝶　　佐渡　谷川桂月子

みなさん夢ですよ、大輪咲の白百合の花の蕋から生れたのであろう、金の糸銀の糸で美くしく彩どられた羽の蝶が、花の垣根を上になり下になり、睦じげに青空を高く低く、やがて優しい天女の銀扇にまねかれた。

時代の文華は夢にまて及ぶ。



夏の河　京都　渡部郭公

○我寓居　　近江　古川翠柳

私の寓居は琵琶湖邊のそれは〳〵長閑な漁村ですよ、そして私の書齋は六疊の海に面した處ですが晝の景色などは何とも云へません、夜も折折千鳥がなくし、沖合からは、かすかに舟歌も聞えます、又男波、女波が、一しきりづゝ、松吹く風の音に和して、ざざんざー。

入景を占領す。

○交換手　　新潟縣　土田りた子

私は今年十七歳でございます、八才の時父を失ひまして母と二人で來る日も來る日も何心なく暮して居ります十五歳で小學校をおやしまして今は云ふもはづかしき電話交換手てございます、雪の朝風の夕べも怠らず出局して居ります。

言ふもはづかしくありません、職業は神聖てすもの。

○春の花　　日向　静子

白きに、赤き、淡紅に、紫にほふ、春の花よ、汝等はよくものす、高きににほひては小鳥をのせて終日勞をとり低きにいろどりては、蝶をやどしてゆたかに春のゆめをたどらす、あゝこのあたゝかなる花の惠を、ゆめ忘るな、蝶よ、小鳥よ。

莊嚴なるかな春の讚美。

○荒神の森　美作　藤井常與

椎や檜や欝蒼と茂つた中に荒神の祠が美しう建てられて有る妾は日曜ごとには屹度此に來るので有るが、風の絶間絶間に吾名を呼び給ふ優しい神のみ聲が聞えるかの樣に思はれて、いつまでも居たくなる、アヽ此森蔭よ妾が爲には慰安の樂園。

詩想浮ぶ。

○火の用心　京都　濱部郭公

毎夜十時前に成ると裏の町に住んでる人が大勢で火の用心と云つて大きな聲で廻るものですから此の聲を聞いたお客樣は妙に大抵は歸られます、それで家の者は悦こんで居りますが其變りモッと居て欲しい人も歸りますので妾は二つ善い事は無ものだと熟々思ひました。

逆さ箒よりきゝめあり。

○夜になると　秋田縣　品子

いつも夜になるとお向で謡、左、向には可愛らしい、梅子さんの手風琴おとなりには書生さん方の、ふえがはじまるのよ、だから私もすきなお琴を、そして曲は天下太平。

向三軒兩隣り太平。

○夜があける　越後　迷小舟

一イ二ウ三ッ目の鐘がなる、虫がスイーチョッ、草むらの中で啼いた、四ッ目！露がポロリ螢草を辷つた。オヽ綺麗……今目が醒めたやうな下弦の月が、遠くの森から覗いて居る新しい秋の風がフイに頬を撫てゝ行くと思ふと鐘が消えてしまつた。

短い、涼しい。

○初て人形の衣服を縫つた時　美津枝

幼い時初て人形の衣服を縫た忘れもしない薄黄に海老茶模樣の更紗に菊水の模樣の唐縮緬の裾裬、恰好も自分ながらよくできたと思つた時流石は女だと人にも賞られあんな希望に滿た樂しい事は十有七才迄にはなかつた。

人形の衣服――我子の衣服。

○曉星　長野縣　小林さゆり

姉樣が東京へ嫁らしつたので、朝の水汲は私の一役と成つたので朝一番先きに起きて手桶をさげてうらに出

ると東の空に只一つ明星がきら〳〵と輝て居ました。

輝ける瞳にも。

○兄弟　三河　平野こと子

兄は昨年の三月當地の師範學校を卒業し私も高等小學校を昨年卒へました又妹も首尾よく修業いたしたが只末の弟のみは眼病のためあはれにも落第いたしました。

運、不運。

○古き机　横濱　井上久子

朝は亡き母への影膳に、晝は、妾の内職の臺に、夜は學びの友となる、古き机よ。

机上生活。

○ボール物語　三重縣　山崎はつ子

私は朝早くから學校でテニスとやらに使はれて彼方へいつても此方へいつても打ち飛ばされ御家へ歸れば小猫などにけり廻されたり掻きむしられたりそして夜は冷たい廊下や玄關の隅などへ捨てゝ置かれるのです何と云ふ悲しい身の上でせう。

晴れの場所もあり。

○貝の家　愛知　紅袖子

確固と口を閉ぢた小さい美くしい貝。あゝその中よ貝の家、それはどんなに靜で穩であるてあろう。波にも染まず、風にもそまず。あゝ妾も、永く久く、此の貝のやうな穩かさに居たい。

用心深い家。

○乾天　靜岡　竹泉子

今年一月小寒から大寒の中は大層暖かで綿入の着物は要なかつた、二月春になつて大層寒くなつて十二日に大雪が降り、雨が降らない、そして今三月七日といふに朝霜が降つて田や小川へ氷が張る。雨は降らない。

噫今年は茶や桑や大麥小麥の類は凶作であらう。

五風十雨、いつの時にかあらむ。

○春雨　麴町區　冷花女

紺蛇目開くと新しい油の薫り、一ぱいにさして湯屋を出る上氣した頰にあたる風の心持よさ……橋の中途で立留つて見渡すと笘を下した船が二艘ぼうとした雨の中を、燕が一羽行つたり、來たり、柳がゆるく靡いて午砲がなつた。

○妾の家の店　飛驒　金田孝子

妾の家の店は、菓子其外果、串柿、草鞋等色々の物を出してあるのであります、お父さんは大工で、晝間はお母さん一人で、夫れは〳〵お忙がしい事。

妾は學校から歸れば直ぐ店へ出て、大勉强をやつてゐます。

○小包　遠江　清子

私は今、此の小包を親友の絃子樣の所へ出しますの、中には、美しい半手袋と、舶來の繪葉書と、本年度の女子文壇二册に巾の廣いリボン二筋とこれだけは入つて居ます。

○花になれよ　高知縣　多宇知いれ子

花は吹雪と亂るゝ夕でありました。私はふと落ち散つてゐる花片の中に

思ひなしか影のうすい白蝶のむくろを見付ましたので、花片に包んで、そと緋桃の根もとへ葬つてやりました。『花になれよ』と口にとなへて、あゝめぐりくる春にはどんな花が咲くでせう。

○遺物の梅　　愛知縣　雲　女

丁度三年前お亡くなりました母樣がお植なすつた梅、本年は早美事咲出しました、新に姉樣もおいでなすつて父樣も皆お達者で內も外も和い春風が吹くのでさぞ地下の母樣もお喜びでせう、その花が母樣の笑顏と思へば歌ふ鶯の聲も嬉しう聞へて。

○妾の仕事　　大和　西窪長子

妾は今年まで每日お母さんの膝元で機織をして夜は和歌俳句等を作るのが樂みとして居りましたが今年から歲一つ行きましたから奮發して晝は針仕事夜は新體詩等を作る事に決心しました。

○道灌山　　埼玉縣　近藤登久子

妹を連れて道灌山へ遊びに行つた歸り道愛らしい小學生徒七八名道灌山へ行く道を問ふたから敎へたら一聲にサンキユーと云より早く馳けだした麓へ下りてから見返つたらもう山の上でさも愉快そふにフートボールをやつてゐた。

○春の家庭　　下總　神田美智子

老健な父は梅で嚴しい母の白藤の花。夫を彩色るのが緋桃の樣な姉さんで、姿も聲も鶯の妹に、片言混りの蛙の弟が、何時も賑かに唄ひます。妾はお轉婆だから蝶々ですつて。

○我が家　　佐世保　田中要子

私の內は山の中に在る一軒家です、皆さんは何日も寂しいだろう何んておつしやいますが寂しい處か如何なに氣樂か知れません市に居ますとやれ火事だの流行病なんて大さわぎせなければ成りませんが一向其心配もいらず其上廻り山ですから薪なんかはそばに有てほんとに經濟です。

○菜　園　　明石　鈴　蘭

私の家の裏には四坪程の菜園が有ります、其處には阿母樣と二人で、お菜を作て居ます、阿母樣は肥料やつたり土をかけたりせられますし私は鷄の番をします此頃は大分大きくなりました私は早く胡蝶のまふ時分が來てくれればよいがとそればかりを待つてゐます。

○鶯　　赤坂　中ゆき子

春とは名ばかり今日も淡雪が降つて居る、昨夜の夢まだなつかしく起出でかねて居ると、枕許に美しい聲、ハツト呼覺されて、障子を開けると父樣自まんの紅梅の枝に小さい鶯が雪の間からホーケキヨー〳〵〳〵

○樂しみ　　仙臺市　岩田よし女

町をはなれた片田舍の一家やそれでも住めば都少しもさむしい事はありません朝起きるとまづ水で顏を洗いますそれから鷄に食物をあたへ、朝飯をたべ裁縫に行くを樂しみとして居ります。

○小　羊　　明石　棠　雲

私の家には眞白な小羊が一疋ゐます今日私が餌をやらうと思つて門を出ますと直ぐ傍にある小高い丘の上で平和な春の日の光をうけながら萠立つやうな若草の上ですや〳〵と眠つてゐました。

○妾の希望　　香川縣　須田五倍子

妾はハートを好むマイツザに捧ぐる色を見よ、接吻に燃ゆる唇紅の薔薇はものかはアヽうつくし妾は詩を好むアイラザを歎へる一節水晶の洞より湧き出づる泉清らかなる岸の私語橄欖の葉の朝露神聖にして世の溷濁知らぬをアヽあまし蜜よりも何よりも……。

○見たいもの　　仙臺　芳　子

倫敦の地下鐵道、フイジ島の土人、ベルリンの凱旋街、支那の阿房の宮此の四つを一生の內で一度は見たいものです。

○講習會　　伊豆　上原ゆき子

私しは山深き地に住みますが、東京の女子技藝學校に行きたいと思つて居たが、學資がなくて行く事が出來なかつたが、此の度此の田舍に炭燒の講習會が出來ましたから、私も講習生の一人となりました。技師は縣廳から來ました立派な人です。

○朝の寫生　　群馬縣　河內とめ子

中學生が一人忙しさうに走つて行くと、向ふからは農夫がさも氣樂さうに馬を引いて來る。其の後には下髮の小學生徒が、雲雀の方が赤城山より高いねと話しながら空を見あげて居る。赤城山は淡紫にかすんで、宛然無邪氣な少女等の話に耳を傾けて居るやう。

○春の月　　鬼頭凉子

夕食の後、縁側に出て、麗しい月の光を身にあびながら、何事かを求むるように、その澄みきつた月を見つめて居ると友情慈愛といふ感に堪へず起つて來て丁度幼子が、母親に抱かれながら、すや〱と樂しい眠に陷つたような心地がした。

○露　秋田縣　小笹千代子

哀れやさしき神にも如何なる愛がお座すてあらう？朝な〱に、小草におく露は何を御歎きの涙てあらう、妾今そを硯に受けて歌かく料にしたあゝそもこの歌は如何なる香のするのてあらうか。



籃賣り　周防　熊谷よし子

○春の朝　越後　高島靜江

朝日は今二分許り東の山の頂からあらはれた柔かな人の肌の様な朝風は前のいさゝ川の岸にある青柳をさら〱とゆすつて行く其度毎に得も云へぬ包が何處からとなく香ふて來る

○朝日　青森縣　笹村玉江

瑠璃色の東空、だん〱色づいて橙色となり橙色は紅いの色となつて、瞬間に、朝日は紫色の山の端から千條の金線をぱつと放つや孤島を離れた白帆は、黄金の色に輝いて走つてゆく、丘に立つてゐる地藏さんは金佛の如になつた。

○妾の村　三河　長坂よし子

前はいと清き水の流るゝ矢崎川後は高からずと雖も小松茂れる遠山にして、人家は山のふもとに延びて百餘戸、西は城跡にて城山と云へる高地東は田と畑とにして見晴らしよきところ、村の人達は此田と畑とへ出て年中食べる穀物や野菜などを作り、樂しく其日を送つて居ます。

○心の寫眞　兵庫縣　野間ひさ子

言語は心の寫眞であります賢明な人は賢い事を云ひ馬鹿な人は馬鹿な事を云ひ鄙猥な人は言葉使も挑目てある此様に常に人の心を現はす言葉使に注意し自分の品位を落さぬ様にせればなりません。

○カナリヤ　下野　玉子

私は一昨年から「カナリヤ」と言ふ鳥をかつて居ります誠に美しい鳥ですよくなれて居ますから私しが行くと美しい聲て歌ひ出します私はつまらない時にはいつても「カナリヤ」の前にいつて見て居ます姉も妹もない私は鳥を妹と思つてかあいがつてやります。

○菫の一束　ちくご　萩子

桃の花片をのせて靜かに流るゝ里川の岸て今しがた摘んできた野芹を洗つて居ると一束の菫を緋のりボンて結んだのが流れついたのてある。花の主のやさしい心がなつかしくて私も桃の花片をそつとのせてながしてやつた。あゝなつかしい花束のゆく衛やいづこ。

○私は本てあります　信夫の里　浮草女

私は皆様に可愛がられる女子文壇てあります月末になると奇麗な彩色圖や皆様の骨を折てこしらへた美文の文章の着物を着せられて本屋にやられます友達の中ても一番の巾利きて一休もしない中に大好きな〱な御讀様が家に買はれて行き毎日々々面白く愉快に遊んで居ます。

○梅の木　京都　棠子

うちの庭に大きな一本の梅の木が有ます花の盛りの時分はそれは〱きれいてす殊おぼろの薄月の夜など此木の下へ行きますと氣がせい〱としてなんだか自分が神様にてもなつたやうな何とも云ひしらぬ清い美くしい思いがわいてまゐります。

○花賣り　廣島縣　上原久子

今年漸やう十二になつたお隣りの豊さん、毎朝學校に出る前に町に花を賣りに行きます殊に此頃では、誠に美しい水仙の花、嗚呼成長なつて此の

子は如何な花を實るてある。

○反　古　　香川縣　三好はるゑ

反古買が來る度に古綿が一錢四匣ホヤ壜のこはれたのが三匣紙くづが五匣は如何てもある、足掛三年後から七十三錢六匣出來た家の内に反古等散つて居ると急いて拾ひますよ。

○私ののぞみ　　東京　二葉少女

私ののぞみて御座いますかい、外交官でも御座いません文學士でも醫學士でも法學士でも御座いません私は國の爲君の爲に名譽の負傷遊ばした騎兵の妻となつて一生なぐさめてやりたいと思ひます。

○天國の眠り　　日本橋　原田重子

妹の房ちやんは芝生の上に眠つてゐるのです。今朝涨つたおさげのりぼンに燃ゆる、陽炎が、和はらげに美くしい光を浴びながら……摘み散らした菫たんぽゝに胡蝶が舞へば、御空には高く〳〵雲雀が歌ふてる畑は黄に、野は綠、吁天國。

○餓　　長門　伊藤紫菫子

仙人が過ぎると間もなく鷲が出た、續いて眞黒な龍が顯れると思ふと凄まじい勢て中天迄來た、其處に皎々と光つて居る月姫をアングリ一呑、其時地上に立つて空を仰いて居つた姿の額にはら〳〵と二三滴の雨？其れは月姫が最後の涙てあらう。

○恐いもの　　周防　嵐子

雨を催した朝の雲、酒に呑まれし人に遇つた時、遊戯を教ふる家のお女房の口、竹庭先生の御手療治、夜殺具を整ふるとて過つて燈火の消えし一瞬間、それから一番恐いのは割烹の時先生の御機嫌の悪い御顔!!。

○停車場　　東京府　長谷川たき子

私は早起にて一番列車に乘る積りで早々支度をして急足にて停車場へ參りましたら今發車したばかりで驛夫はすました顔で時計を眺めながら遲れましたれ。

○姉の初産　　札幌　三ッ野はる子

坊やが生れたつて、そして姉様も坊ちやんも丈夫だつてほんとに嬉しい事でせう御兩親樣は申す迄もなく義兄樣も大悦てせう、あゝ姉樣も母樣になつたのですれ私も今度の日曜に參ります。

○別天地　　磐城　やま川

一寸出るにも三里、歸るも三里、さぞかし不自由なとてあろうと思いながら嫁つた片田舍。然しきて見れば別に變たともない、慣るれば都とやら玆は又隣にも疎い別天地。

○栞　　渡島　工藤以邦子

紫と白の染分レースの栞、漸う二つ出來上つたので早速一つを都の春子樣處へ送り、私も大好の玉虫へ挾まうとご本を取上る途端、机上へ去年春子樣から頂いた濃紫絹製の美しい栞が舞ひ落た。噫私はあんな粗末なのを送つて、春子樣は何かの御本へ挾んで下さるかしら……。

○お節句　　下總　菊枝女史

今日は五月の御節句何所の家でも幟、旗、鯉の吹流しなどが風になびいて居る、妾の家でも鯉の吹き流しを樹てゝ置いた、風が吹く度に夫が動く、其影が地に映る、猫がそれを見てじやれる弟は笑つて居る、所へお隣の德ちやんとこから柏餅を頂いた。

○冬のある朝　　麹町　淺井千鳥子

引窓をあけましたら寒い風が廚に入つて來ました、思はず襟をかき合せ竈の下を焚きつけましたが、常になく薪が濕氣て居るのが如何しても燃え付きません、「あゝこうじん樣何卒燃付て下さい」と、祈つて又一生懸命に燃やしましたら、漸く盛んになりました。

○四　季　　上毛　紅葉子

四季の内で、一等能いのは春て、誰しも歡迎しない者は無い、其次が秋夏は夜分は能いが日の盛りは熱過ぎて困ります、冬は又寒むくつて、なろう事なら拔きにして貰ひ度い。

○庭の櫻　　芝區　小島露鶴子

毎朝起きるとすぐ、書齋の窓をあけて、庭の櫻を眺めるのが、唯一の樂みである。今日は南の枝が開いた、今朝は東のつぼみが咲いたと、何日もの如く戸を開けると、羽音烈しく飛んだ鳥一羽、ばら〳〵と愛する花を散らした。

○文ちやんの夢　　後志　工藤すゑ子

文ちやんはほんとによく寢入つたこと、膝にもたれて櫻の花持つたまゝ唇を輕く結んで、この頬つぺたはどうだろう、文ちやんの寢顔の可愛い

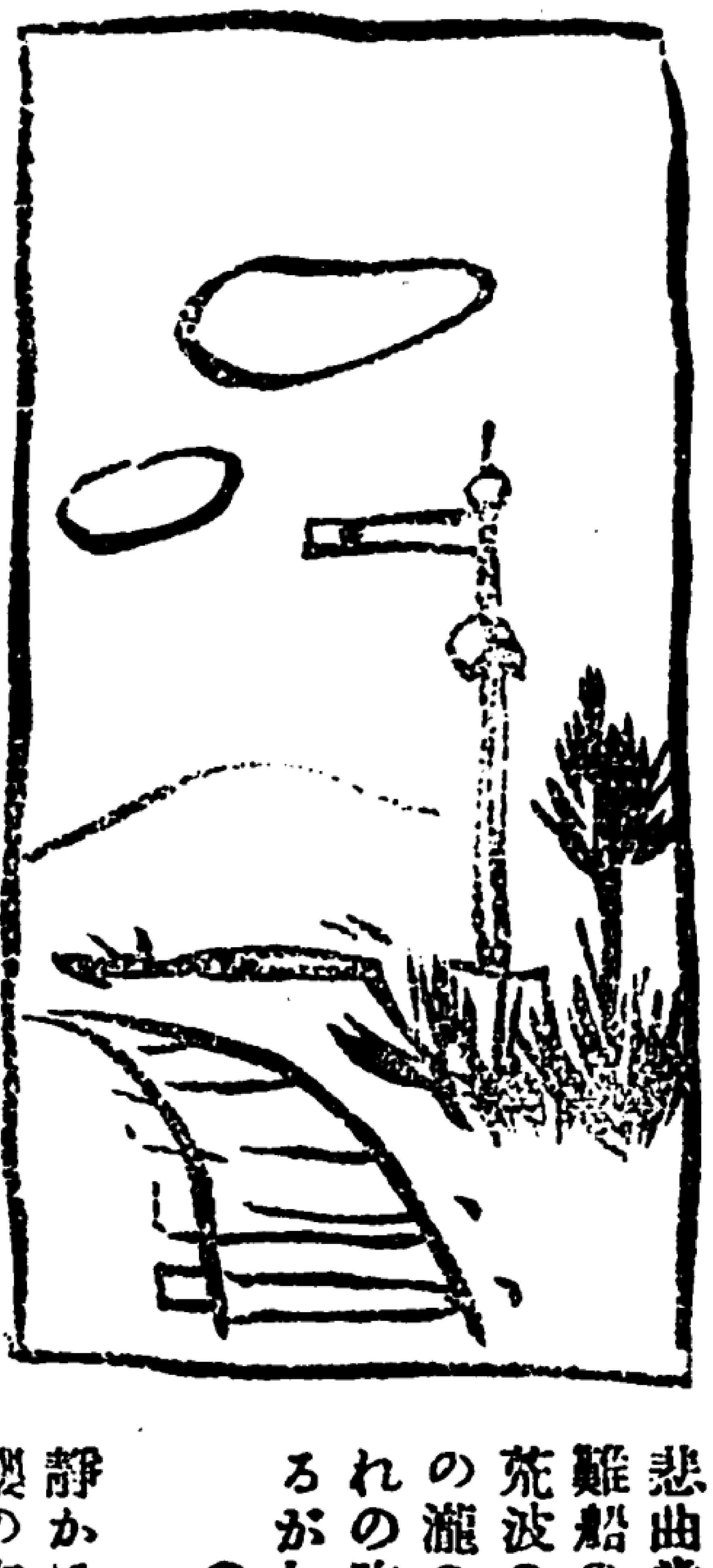
こと、おや笑つて、何か可笑しいの、わたしも一諸に、文ちやんの夢を見たいれ。

〇螢　　北海道　梶　水　仙　子

『ホ、螢來い山路來い行燈の光を鳥渡見て來い』夜風に、挑づられる青柳の亂れる小川の端に立つて光を辿つて來た螢を搖と落して蚊帳の中に放した妹の澄ちやん、何時の間にやらすや〳〵と眠に入つたあとてりホンにかゝつた夜露の上にヒカ〳〵と星の樣に

〇遊羽子　　南品川　萬　千　田　野　里

つき落すまじと、はせよりて、見上ぐれは、夕づゝのかげあはきたそかれの空より、白き羽根は、しづかにしづかにまひつゝ下りてくる。



シグナル　　京都　中　西　信　子

〇白薔薇　　小石川　孫　越　歌　子

輪の大きな白薔薇は、なか〳〵よいものであります。妾はいつも、一輪か二輪、文机の一輪挿にさして置きまして、讀書に倦きた時などには眺め、且つ鼻にしみこむほど、其香をかぐのが常てあります。

〇花のいろ〳〵　　京橋　今　泉　磯　千　鳥

梅花は香高く、櫻は美に、桃花は艶なり、野に咲く蒲公英は愛らしく、菫は床しく、紫雲英は奇麗なり。豆腐屋に有る卯の花は味無く、酒醤油に有る泡の花は鹽鹹く、麴屋に有る米の花は眞白なり。

〇人々の熱心　　越　後　き　く　子

今年八十八才になり給ふお祖父樣は博覽會へ行くとて毎日新聞を熱心に御覽になり、父上は植木に、母上は家政に、兄上は養鷄に、弟は軍人にとて、英語と擊劍、私はお祖父樣のお供にとて、二人の着物を縫ふのと、女子文壇を見るのよ。

〇配合の美　　東　京　秋　山　欽　子

「お姉樣、御雛樣が御待兼て御座いますから」と申上げても御返事がないので、そつと襖を明けましたら、まあ、お机の上の中華書には墨色美しう和歌が書かれて、やゝ斜に燃え立つ樣な紅唐紙が半、開き加減に、其開き目には露散りそうな白桃の一枝、私は思はず、筆あらばといつて仕舞ました。

〇寫眞　　陸　奥　若　生　す　み　れ

花子樣と二人て、寫眞したのが十日許りて、やつと出來上つたから、あの、ショールがどんなによく寫たかと爭つて見たら、まあいやな事、くびがまがつて。

〇薩摩琵琶　　東京府　森　屋　う　さ　子

悲曲常陸丸、おゝ未だ記憶に新たなるあの遭難船の曲、飛び來る彈丸の音、寄せては返す荒波の音は、現場も斯くかと、太き聲は千丈の瀧の如く、細きはさゝかにの糸の如く、彼れの胸中琵琶のみ、滿座の聽衆默として醉へるが如し。

〇春の朝　　大　阪　武　田　と　し　子

靜かに眠つてゐた山や川も今は夢から覺めて櫻の宮の赤い鳥居が見えだした、今し淀川の朝霧を破つて下つて來た汽船が、呑氣な汽笛を鳴しつゝ岸に着いた、紫毛布の田舎男や質朴な女は三々五々上陸してゐる、かくて世はだん〳〵活動の天地に化するのてある。

〇稼始　　陸　前　佐々木　千歲子

妾は都の女學校へ行つて居つたので田舎に育ちながら未鍬を手にした事はない。或日園藝の雜誌を見て園藝の興味ある事を盛に說いてあるので行つて見やうと云ふ心が出て玉葱の種子を注文して自ら鍬をとつて畠を耕した。之を見た近所の人は笑つた。手に肉刺が四つ出た。

新笑話

編輯局選

四等

○脫ぐ暇　羽後國飽海郡鵜渡川原村龜ヶ崎　國松紫汀

「これ健坊や 何故衣服へ泥が付けたの亦轉んだれ明日から衣服を着せてやらないよ」
「だつてお母樣脫ぐ暇が無かつたんだもの」

五等

○イルミネーション　秋田縣平鹿郡角間川町金澤平七方　金澤参知子

下女『お孃さん 妾はイルミネーションといふ英語を覺えました』
お孃『それは何の事だか知つてるの』
下女『博覽會の事ですよ』。

○一本の箸　上總　さ ろ 子

田舍者博覽會見物に行き 或飮食店にて割箸を出され『ならお箸一本ては食へれへや……』

○家の物　和泉　津田なみ子

母「これ太郎 お前こゝに入れてあつたお金をどこへやつたの」太郎「母さん僕とつたよ」母「なぜ取るの」太郎「でも母さんは いつもうちの物ならかまわんと言つたじやないか。

○泣く　安藤千鶴

母「武さんお前あんなに坊を泣かせてはいけません」
子供「泣くのです」

○洗ふ　神奈川　小島政子

バケツに張れる氷を食はんとしたる子供に向ひ父「其は汚いからお止し」子供「ダッテ洗へばイヽヤ」

○生れ日　豐後　夏　子

村長「お前は生れ時を覺えないのか？ 此の前出した願書と今度の屆書とは生れた日が違ふぞ」
百姓「ヘイ私は生れた時 ごく少うございましたから」

○恩はない　豐後　あけぼの女

娘「お母樣はいつても 先生の御恩は決して忘れてはなりませぬよと云はれますが 妾はもう一寸も先生に御恩はありませぬのよ」母「何故？」娘「それでも妾は 先生から敎つた字などは皆忘れてしまつたもの」

○寢　顏　河内　吉川　文子

茂野子は、自分の眠て居る時は どんな顏付だらうと鏡の前て眼を閉ちて見た

○ハイカラ　赤坂　森　英子

一人の庇髮しきりに生かじりの英語を振りまはすを聞きて 甲「隨分お上手れだから貴女のお名まで世間の人も英語で言つてゝよ 乙「あらそう何つて？ 甲「ハイカラつて……」

○同　情　名古屋　小山かく子

「お隣の小母樣が 坊の家におもひやり（重い鑓）がないツてツたから、祖父樣の用つた長いのが一本あるツて云ツてやツたよ」

○鷄　久留米　一　少　女

耳の遠くなりし老人 孫に向ひ「內の鷄は一つもうたはないてあくびばかりして居るねえ 孫「あんなに毎朝あくびと一時に 鳴いて居るじやありませんか。

○人のふり　麴町　淺井千鳥子

娘「お母さん人の振みて我が振なほせ、といひますが何うするの」母「そんな事よく考へてごらんよ」娘「わかつてよ人が泣いて居たら私は笑つて居るのね」

○ひさし髮　伊豆　露葉　式部

女子文壇の表紙によく出る女は 庇髮だからよいわねえ 庇髮だつて雜誌の表紙に載せられるんてすもの。

○主人は留守　越中　北本　歌子

米屋「今日は米屋ですが殘りの金を」主人迷惑そうに主「主人は留守だ」米屋あきれて 米「あなたは御主人さんじやありませんか」主「馬鹿ツ、主人の口から主人が留守だと云ふに これ程確な事はあるまい」

○クリスマス　橫濱　長谷川波南子

甲「もう直きにクリスマスだね」
乙「さうさ其次がクルシミマスだよ」



讀友倶樂部

諸孃と記者

○御尋ね申します妾は小學校卒業致したばかりの不束者如何致して投書致たいと思居ますが一ヶ月金何程か誠に御氣の毒て御座いますが一寸御しらせ被下御願申します(北海道はる子)(記者曰、投書するのにお金は入りません)○私は久しくこの女子文壇を愛讀いたして居りますが この雜誌には他に見られぬ一つの特長がございますそれは他てもございません記者樣方と讀者との間の親密なことてす中には色々な無理を有仰る方もございます面倒なことをお尋ねになる方もございますそれを一々丁寧にお答へ遊ばす記者樣の御親切實に彼の諸孃と記者欄と申ところなど讀んて居りますと恰ど百花咲きみだれた花園にても降り立つて居るかのやうに只もう嬉しい感じがいたします(大坂滿壽榮)(記者曰、イヤもう咲き亂れた百花の園などゝの御たとへは當りませんけれど、記者は只、皆さんの爲に少しもわけへだてなくお答へしたいと思ひますのと、それから一人の方ても疎忽には見逃さないやうにするのと、何事でもお分りになるやうにしたいのとだけてす、然し同じやうな事を繰返しお尋ねになるのは困ります、ちつと變つたことをお尋れ下さい)○記者さん御機嫌よう、私等兄弟始めて投書してみました これてよろしいてすか御伺ひいたします明石のこの頃は大變よい景色てす御忙がしいてしやうが一度御遊びにいらして頂戴な(明石若山紅雨)(記者曰、ありがたう)○あらたまりて申上ます記者樣妾は第五號からの愛讀者てすが父のすゝめによりて投書致しますから神かけてよろしくお願ひ申上ます當選者の中へ加はりましたなりには、好きな編物でも差上げる樣にと父も申して居ます(富山縣婦負郡寒江村大字中沖村島倉しげゑ)(記者曰、改まりて承りました、記者も當選者の中にお加はりあるやう祈つて居ります)○記者樣私は女子文壇初號からの愛讀者よこれからは出來なくとも勉強して投書いたしたい心得てあります それから詩集花守作者夜雨先生ネ私の家から一里位しかないところに入らッしやるのよ過ぐる年の當地中學校運動會にチラと御見受いたしましたが未だよくは存じません此度いつかはゆる〳〵御目もじしたいと思ふてゝよ ては記者樣御身御大切にさよなら(茨城縣眞壁郡下妻町赤澤八千代)(記者曰、夜雨氏は孤獨、詩に慰みつゝある人てす、諸孃の厚意は必ず感謝するでせう)○記者樣私は高等女學校に入學いたしますと共に愛讀いたしてをりますの本年は二年てすよ初めて投書いたしてより二三度てすの それても一度も出た事が御座いませんよ此後どうぞつとめて勉强いたしますから沒書しないて下さい(仙臺市愛子)(記者曰、勉强して下さい、紙上には、乾度出るやうになるてせう)○記者樣に申上げます私お土產に名古屋の名所寫眞五六枚頂きましたの それお送り申してもよろしゆうございますか(大阪市北區天滿橋筋西三丁目三二村上梅子)(記者曰、お送り下さい、お返しもいたします)○記者樣私は幼い時たつた一人しかない同胞に別れ今は年老い給へる父母と三人淋しくてたまりませんよ、それ故私少しなりと父母の心を安んぜ樣と思つて勉めますけれ共何分無口の私とて思ふ樣に行きませんので大いに心を痛めて居ました處神のみ助けかふと女子文壇の愛讀者に加へていたゞいて當書の事柄を讀みきかせて御心を慰めんと思ひます(福岡苑津山の麓田中好江)(記者曰、何より好いお心がけ、うろさく思はずに能く讀んてあげて下さい)○記者樣色々の景色の寫眞を出すには何うするのてすか御敎へ下さい(福岡市榮子)(記者曰、本社へ宛てゝ郵便てお送り下されば よろしい、社ては選擇して紙上へ出します、澤山なら不用になつたのを返却します)○記者樣お達者てすかわたし女子文壇がいちばんすきてすよ其すきな理由をあげて見ますと。一、こんな片田舍てさへも發行日に見らるゝ事。一、奬學懸賞の等級の多き事。一、他の婦人雜誌の懸賞價格に比すれば其價格十倍も多き事。一、紙面悉く金玉の文字なる事。一、讀友倶樂部の欄多き事。一、常に破天荒の事をあそばすこと。一、愛讀者の多き事。末筆ながら記者樣御自愛遊ばせ(石見國伊賀郡美又村中山かん子)(記者曰、お褒めに預りましてありがたう、記者は務めて好い雜誌にしたいと思つて居りますが、未だなか〳〵足りない點もありませう、何うか其邊は遠慮なく御忠告し

て下さい、なほしますから、愛讀者の多いことゝ發行日のあやまらぬ事は全く仰せの通りてす）○記者樣にお願ひがあります本誌にも博覽會の寫眞を少し宛載せて下さい、御答へを（岩代笑子）（記者曰、前號で御覽の通り）○記者樣東京は博覽會て嘸御賑かてせうれ私も此次の日曜に參る積りてす日曜は常の日よりもなほよいそうてすのれ私早く行きたいのよだが記者さんこれからは横濱もよいのよあの夏めいてくると海岸て澤山の船の景色が實によござんすよ記者さんちつとお遊びにお出て遊ばせな（横濱市清水千秋子）（記者曰、外國へ行く友を見送る爲に能く御地の棧橋か渡ります）○記者樣私はれえ今まて「羽衣」として出して居ましたが是れから私の名でだしませうと思ふて居りますがどちらがいゝてしよう本誌て御知らせ下さい御身御大切に、さようなら、（ひさ子）（記者曰、どちらでも好いお作さへお出しになれば宜しい）○記者樣榊原燕園女史の御住ひ何處て居らつしやいますか紹介お願ひする事は出來ますまいか（陸中季花女）（記者曰、燕園女史は東京府下豐島郡日暮里村金杉二百六十六番地にお住ひてす）○記者樣に申上ます私は昨年高等小學全科を卒業したのみて貧家に生れた悲しさには皆樣のやうに高等の教育を受ける事も出來ない至つて淺學の一少女てございますこれから後永久の誌友として下さいませんか而して皆樣と廣く交際の出來るやうに何卒御願ひ申ます又下手てすがだん／＼勉强して皆樣と同じやうになる積りて居りますからどうか記者樣此の後とてもよろしく願ひます（神田區南甲賀町八番地内藤順作方吉田たつ子）（記者

曰、淺學ても御交際には差支ありますまい、又文章のお稽古も紙上をたよりにお勉めなさい）○記者樣御變りはありませんかこの春の陽氣につれて東京は櫻の名所と所々御見物お樂しみのことゝ存じます御陰樣て不束なる私の投書しましたもの迄が櫻の花の咲くと共に此四月にやうやう四等を頂戴いたしまして誠に喜びの限りはありません何卒今後宜しく願ひます（白すみれ）（記者曰、當選して結構てした、なほ御勵みなさい）○記者さん投書は原稿在中として開封て二錢切手をはればよいの（滋賀の里白井梅香）（記者曰、左樣）○私文學と音樂が大好きてすのそれて今度沒書になつてもかまいませんから私の身のつゞく限り投書する考てすから何卒おなほし下さい（山なし谷村町梶谷はる子）（記者曰、記者も和洋の音樂は好きな一人てす）○記者樣原稿を十枚以上送るには何うしたら好いのてすかお尋れ致します（一二三子）（記者曰、開き封か、雜誌の包みのやうにして二錢切手を貼附すればよろしい）○妾の寫眞を送りますが誌上に掲載の上てお返し下さいますか御願ひてすが誌上て御聞かせ下さい（神戸常子）（記者曰、勿論お返し致します但寫眞の裏か別に紙片へ「乞返送」と書いて下さい）○先日は見本を有難うよ、私し一通見ますと幾人かのお友達が、にはかにふえた樣な氣がして懷かしくてしようがないの、私今迄にも隨分色々な雜誌も見ましたけれど、こんなに懷かしく思ふ本は今度が初めてよ、附てはつたない文てすけれど何卒見て下さいまし、私し學校を卒業してから今迄に綴つた文が丁度是れて五十三編ありますの、てすけれど投書した事は今度が初

めてゞすわ（西加茂野々山まつ子）（記者曰、字の汚いのは何ともありません、殊にあなたの原稿のやうな字は能く分る方てす、お大事の作文を本誌の爲に投じ下さるとは何より結構てす、何うか新しいのも作つて下さい）○この頃所々に大分女子の讀むべき雜誌が發刊されますが、誌友の多いのは本誌の外にはまだ求めることは出來まいと思ます、つまり是だけにても本誌が如何に發展して居るかゞ分ります、希くは記者先生本誌のためには益々御全力をそゝいて下さい、京都府松江）（記者曰、御賛辭にあづかりまして一層精勵いたします）○府下白菊さんリボンや染は郵便てゞも送れませう、併し小包郵便ならいゝてせう○岐阜壽美蘆さん、原稿一枚に書けない場合は二三枚になつてもかまひません○村木とみ子、佐世保いちじく、西谷きし子、都築やよい、八王子町乙鰺もん子、靜岡縣局内榮子、岡山縣片岡繊子、三河さゞ波、猿木よし子、茨木睦子、和香子、ゆり子、山口秀子、高崎市松岡たか子、佐渡中川ふじ子、高橋けん子、石狩繪澤元子、栃木縣千代子、姫百合女、白菊、豐後村尾みち子、鹿兒島村子、上毛紫死子、靜岡市伊澤けい子、水戸中山道江、青森市絹子、近江中山すて子、埼玉花月、美濃英女、越後きく子、大和白露子、渡邊とみ子、長門小國敏子、死蝶子、ひさ子、大阪市鎌田春枝、ふみ子、遠江野崎末女、仙臺松枝、岩手縣藤井しげの、久留米搖花、佐藤しな子、宮崎小林春子、近藤抱月、府下船堀村中島貴久子、横濱むらさき、鳥取縣桑本きゝ子、相模俊江、信濃月桂、大分縣本庄末子、山口縣角戸りき子、以上の諸孃には一々お答へは致しませんが原稿は確に拜

見しました、添へて送られた詩文の原稿は皆それぞれ選者の方にお廻しました、投書に就てのお尋ねはお答へしないのは皆宜しいのですからその積りて御安心なさいまし○記者曰、札幌二葉初子、鹿兒島さだ子、佐世保きぬ、紀伊山家女、栃木一少女、在萩小國敏、丹波絲子、石川福田蓮枝、鹿兒島古川ふぢ子、群馬みち子、能登ルビー子、備後春野燕子、神戸弓月、福岡足利直枝、尾州愛讀生、備中すま子、長崎木葉、岩田村永井清子、上野金井黄水子、岩手佐々木紅百合、長野小田切清子、越後芳野枝、山形縣鈴木杉葉、信濃吉田露子、遠江良子、京都松井星水子。以上の諸嬢からの記者へのおたよりは一々拜見しました、本誌を能く御らんになり、又投稿規則を見れば分るやうなことは一々お答しませんいろ〳〵懇切なお言葉は感謝いたします○仙臺、灘花女史さん葉書の書損じを黒くして繪にするのは贊成、繪の投稿は手本なしがよろしい（記者）○大阪、中村いち子さん小說に御熱心結構です小說は非常に原稿が澤山ですから出ないても悲しく劣つたと云ふわけてはありません（記者）○大和受田きみえさん、通信はハガキてもよろしい（記者）○京都、山口愛華さんお尋の誌友倶樂部原稿の行數に制限はありませんけれど短いものほど歡迎します（記者）○伊豫坂本まささん、ハガキてよろしい（記者）○長野縣、酒井しづ子さん田園生活の實況拜見しました、短文てもお作りなさい（記者）

諸嬢の交際

○皆様の内て御琴をお稽古して居られる御方に御交際がして頂きたう御座います春の曲松竹梅につきまして少し御尋ねの致したい事が御座いますのよどうぞ御知らせ下さい そして永久に御心安く御交り下さい 御願ひ申ます（播磨國飾磨東山村橋詰てい子）○地理歴史の參考になる事や 文學の研究になる事など筆先て互に新知識の交換を願ひます（和歌山市北大工町一六大江方早川とし子）○三宅先生の住み給ふ府下淀橋町角筈邊の 誌友方よ 私も實地へ修學に出度存じます姉妹故二間位の家貸及び諸物價等 當倶樂部にて敎へ給はらば幸甚に存じます（下野清子）○五號の詩文に付て少しく妄評を試みませう、千篤子の「まつまの心」行文圓熟一寸の隙もない、茂子の「竹の葉影」餘韻綿々短篇小說として上乘の作、抒情の「白百合と松」高雅にして靈妙の文、沖子の「鹽情と人生」句々洗練非凡の筆、欽哉子の「增鏡を讀む」才筆才筆此作者の美文を見まほしい、和歌の「わかれにし人」は明星派の晶子女史の面影がある、俳句の「自炊子が」は寫し得て妙、又此作者にして初めて此句あり!? 諸姉は本誌上の花なり 願くは自重せよ妄評多罪。（北越名古の浦靜江子）○私は實に淺學の者てこざいますが 末長く御交際を願ひ上ます（京都市建仁寺町五條上ル 山崎町馬場紫波子）○誌友の姉さん 妾は當地の郵便局に三年以前より 事務員として、每日機械的の事務を取つて居るのよ、それて何樂みといふてはなし只女子文壇が唯一の慰藉物てしてれ、殊に去る號の誌友倶樂部の郵便の雜感といふのが 其の職責だけて 妙に何とも言へない感じがしましたの、それからは俄にお姉様が戀くつてしかたがないのよ、どうか長に繪葉書や お寫眞や 掘物玉章何ても御交換を一時的でなく屹度々々永久にですよ、さようなら（京都府由良郡價局植和田靜子）○記者様の尊い御蔭げにて 情け有る誌友の諸姉様達と 御交際が出來る樣に成りましたのは深く記者様に御禮を申します 誌友の御方て女學校御在學中の諸姉様 どうぞ御見捨てなく末永く御交際を御願ひします（丹後國加佐郡由良町一九〇中垣露子）○私は誠に 不束者て御座いますが愛讀者の一人に御加へ下さいませんか 諸姉様の内御交り下さる方は 御見捨なく御玉章御惠み下さい（鹿兒島縣加治木谷てる子）○妾は九州の片田舍に淋しき月日を送つて居るものてすどうかエハガキや玉章の交換を永久に遊ばしてよ（熊本縣八代郡八代町一〇八井山たき子）○質實なる神聖なる誠意ある 永久に變りなき理想的の交際を致したう御座います 序に文學的の作物の交換をも願ひます（本鄕區元町二ノ四七朝日館内山本厚）○私は鹿兒島に長く住んて居りました故鹿兒島の御方は ことに懷かしいてすから繪葉書御玉章を御送り被下れ御返事致します（長崎市惠美須町九彌富あさ子）○花を愛する諸嬢方へ 二三十名を限珍らしき 西洋草花種子十種差上げます（北海道札幌北四條西六丁目二番地眷谷雪嵐）○あの雜誌は 御望みの御方が多くありましたから先着十名へ差上ました 何卒御ゆるし下さい以後宜敷く御交りを願ひます 御寫眞手紙の交換もして下さい 先着十名に限り當地の雜誌を差上申ます（山口縣大島郡蒲野村小山田中谷孝子）○皆々樣早速御文被下まして 誠に難有う御座います不束の者ですが 何うぞ御見捨なく變らぬ松のみどりの如くつきせぬ水の流の樣に 末長く御交りの程を願ひます（信濃國下諏訪町淺野蕗子）○諸嬢

の君たち御機嫌よろしう妾事都合により下記のところに轉居いたしましたから以後よろしく願ひます（千葉縣東金町上宿八鶴湖畔中田方津知屋發子）○繪葉書や文章地方新聞等の交換を願ひます拙ないながら御返信は必ず致しますよ（日向國西臼杵郡三田井町右松春子）○誌友の皆樣私は誠に不束者ですがお葉書や玉章の交換を願ひます何卒永久に（和泉國泉北郡上神谷村豐田小谷瑕榮子）○記者さま私文壇の諸孃は皆正直な方ばかりだと思ひまして繪はがきや寫眞送りましても一月どころか二月たつても音さたはありません私はいかにもあきれました（北國の一女子）○私は久しく御無沙汰にうちすぎまして何卒御ゆるし下さい、さて私は今まで止むを得ない事情で御無沙汰を致して居りましてわび狀も出す事は出來ませんでしたのよ、近頃は好都合になりましたから御いかりなく前時のやうに御交際を願ひます、又大阪府立の女學校へ通ふ方で一二年の方と御交際を願ひます（鹿兒島市西千石町二五二上村内勝目信子）○貴女樣方エハガキや御玉章の交換をたのみます（岐阜縣武儀郡關町愛鄕舍内髙津八重子）○誌友の諸姉樣よ妾しは高等女學校を卒業して片田舍の小學校に教鞭をとつて居るのですよ何分御見捨なく繪葉書や御玉章や御寫眞の交換を願ますよ（丹後國加佐郡由良町參百四拾三番地中西しげ子）○私は田舍育ち誠に不束者ですが以後よろしく御交際を御願ひ申ます（播磨飾磨郡廣村小林みゑ子）○諸方に散在せるなつかしの御れい樣方よ妾はかた田舍に住んで淋しくつて〱しかたがないのあわれと思つて御交際下さいませ（千葉縣印旛郡佐倉山ノ崎從本貞子）○日野町にては愛讀して居る者は只私一人です御友達はなく淋しくつてなりません何卒末長く御交際願ひます（伯耆國末子町字日野町杵村春子）○エハガキ寫眞玉章の交換を賴みます（宮崎町城ケ崎杉野ます子方垂水藤子）○美しき繪葉書玉章寫眞御送り下され有りがとう尙相變らずどし〱交換を願ひ升よ但し一時的のお方は御ことわり致します御證として先着十五名に「ピロドチ」にて自製のかんざし一本そえて御返しいたします（靜岡縣遠州濱松田町二丁目停車場道中村雪子）○誌友の姉上樣妾はまことに淺學な者です御交はり下さい御文通や繪はがきの交換なすつて下さい（佐世保市天滿町三番地大崎美津子）○私も小學校をやつと卒業したばかりの淺學な者ですが以後は見捨なく御交際、文通もして下さいれ（岡山縣邑久郡牛窓町長船普香）○私は佛法を深く信仰して居る者ですが姉樣たちの中に佛法信仰なさる方がございましたら幾重にも御交際をお賴み致します（奈良縣生駒郡石木島石代子陛）○私にも永久に交際を願ひます十八才以上の方れ（神戸市北長通り六丁目堂野さだ子）○只の御はがきにても文章の御交換を御願申ます皆樣の内で御不用の小說が御座いましたら御惠み下されます樣御願します（下野國佐久山町伊藤花子）○親愛なる諸嬢樣方の一筆の墨痕に現はしたる滴たる如き誠心の交換を西の空より俯して希望致して居ります（福岡縣女子師範學校寄宿舍内髙島敬子）○何卒永久に御交際を願ひます又繪はがき手紙の御交換願ひます（大阪市東區内淡路町二丁目今井方岡部勒江）○諸姉君よ妾は先月西の端の田舍より上京したおろかな者ですがどうか繪葉書でも御玉章も又寫眞三枚有りますから交換して下さいまし（東京市下谷區谷中日暮里七面坂下三枝方菊子）○本誌愛讀の諸姉樣方妾にもとこしへに御交換を遊ばしてよ（熊本縣八代郡八代町一〇八井山たき子）○私は下記の所に居る不覺者ですが御見捨なく玉章を以て御交換を願ひます（横濱市西戸部町五八一原田方遠山のぶ子）

繪葉書交換

○妾事は一ヶ月許の間病の床に臥しまして漸く此間快くなりましたそれで大變御無沙汰致した御方もあるでせうがどうぞ此度は御ゆるしなして下さいな尙此度在京の妾の兄より澤山の繪葉書を送り越しました依て又々盛んに御交換を願ひとう御座いますどうぞどし〱御送りなして下さいな尙々先着の御方二十名に葉書ブック其外書籍雜誌等差上ます（秋田縣平鹿郡增田町石田樣方逢坂きよ子）○妾は南總の片田舍に居る淺學無才の者でありますが寫眞繪葉書御交換を願ます必ず必ず返事は致します又千葉縣女學生諸孃には尙ほ尙ほ御願ひ申します（千葉縣南總山武郡增穗村南横川高山梅子）○おなつかしい諸姉樣どうぞ御自筆の繪葉書御めぐみ下さいませんか私も極下手ですけれど御返しはきつといたします（長野市大津町前島きみ子）○誌友の諸姉上樣不束の者ですが御見捨てなく御交際を願ひます又繪はがきの交換もれ（大坂市西區立賣堀裏町百三十三番中原喜代造方綠子）○繪葉書及寫眞の御交換を願ます決して取がちでは御座りません神にちかつて（京都府綴喜郡草内村字東古川四郎

も方古川索子）○繪葉書に成るべく和歌や俳句の様なものを書いて御送りください（函館區天神町六〇吉野桂子）○先月發行の本欄にいやしき妾が交換を求めましたら四方のおやさしい御方から澤山美しい繪葉書を頂戴いたしまして一々御禮を差上た積りですが、若し洩れた様なお方がありましたら惡しからずゆるして頂戴れ、して此の後寫眞はがきの交換を願ひますよ殊に音樂好きな御方と一層御交際を願ひたう御座いまず（大阪市北區西堀川町溝の側筋叶つる子方木枯女史）○諸孃様私は非常に歌入りの繪葉書が好きですから相當の繪葉書に御手づからの歌を添えて御送り下さりませんかすれば其の方々に二葉の繪葉書を御返禮に差し上げます御寫眞も遣花も同じように御交換を願ひます（三重縣河藝郡玉垣村神尾美尾子）○誌友の諸姉様親しく御交際下され有難う存じます此上とも緞々繪端書御送り下さいませ（備後國坂本たれ子）○私れ交際を求めましたら記者様の御蔭にて直様御深切なお方々がたくさん繪葉書を送り下さいましたから一々御返事をあげました皆様繪葉書交換をれ（岩代國安達郡本宮下町六二橋本せん子）○三宅先生筆の最近風景水彩畫はがき數十枚ありますから大下先生筆の風景はがきと御交換願ひます其の他のはがきも何卒永久に御手紙も頂ければ結構で御座ります（大阪市西區本田町通一丁目百十四番邸中内方田村露子）○皆さんシャシンエハガキの交換をたのみます（赤坂區田町一、横山松夫内うづ子）○諸姉様上等繪葉書や寫眞の交換を願ひます其のお禮としては孝女白菊の歌を齋藤販にて寫したる物（但し一行廿四字詰二百七十五行）有りますから先着十五名を限り進上ます又後れた方には夫れ相當の品にてお禮致します（靜岡縣濱松田町四七中村ゆき子）○誌友の諸姉様妾は此局の電話かゝりですが御存知てせう「箱根の山は天下の險」てれ、夫れは／＼寂しい所なの、皆様繪葉書や玉章の御交際を願ひます但し一時的御方は御斷りよ（神奈川縣箱根湯本郵便局電話課矢野菊子）○上等の繪はがき交換を願ひます（河内國八尾山口方政子）○あゝ皆様どうぞ繪葉書の交換をれ願升、返信は上等コロタイプの葉書に米國及我國の去る七八年頃の郵便切手をそへて送り升（石川縣輪島町中島みよ子）○皆さん御玉章や繪葉書の交換をしてください、また御寫眞の御交換もれ必ずゝ御返し致しますから（常陸那珂郡石神村竹氐仲田伊代遣方にて仲田與志子）○私の兄さんは秀才文壇て澤山繪葉書の交換をして居ります私は浦山しくてたまりませんからどうか誌友の皆さま繪葉書の交換を願ひます（愛媛縣溫泉郡荏原村小村二番戸三好芳葉女史）○私汽車博覽會紀念スタンプの繪葉書をもつて居ります御入用の方は花のて御申し越しなさい其內一ばん美しいのて下だすつた方にさし上ますあとの方にも外の繪葉書て御返事いたします又文通して下さい末長く（下總流山町堀切きみ子）○妾も音樂文學好な方と御交際願度御座います又繪葉書の御交換をもどうか（大阪市北區上福島北三ノ一九〇竹下秀子）○誌友の諸姉様繪葉書の交換を願ひます妾のみにくきうつしゑ一枚差上げます（京都市伏見街道五條下ル二丁目河邊しず子）

寫眞編物交換

○私は手紙の交換はしませんが本箱が一ばいて困りますから編物（何にてもよし毛糸なれば雛形）又は寫眞を御送り下さいましたら相當の本を早速御返しいたします（近江彥根入丁目牧村まつゑ）○厚情なる諸姉様何卒菜編物お寫眞の交換を願ひます昨年の秋二十幾名の諸姉達より交換を乞はれましたが中十幾名だけ失禮しました此たびは澤山手元にありますから（越前三國町平木朝尾方新保勝子女史）○誌友の諸姉上様私押花編物等を好みます故どうぞどのようなのても宜しう御座います故御送り下さいまし御禮には繪葉書雜誌編物等の內て御好きのを御送り申ます（東京市本所區吉岡町二〇高橋元子）○諸友未見の諸姉様よ妾は極く田舍に住んで居る無學な者てありますが至て編物と裁縫細工物とがすきてす、けれども片田舍て良師がなくて困つてゐます希くば賢明の姉様方よ琴、肱突、涎掛、巾着など教へて頂戴御厚恩は決して忘れませんから又繪葉書ひな形の交かんもして下さいそして唱歌もれ（福井縣今立郡上池田村角磨校山本董子）○皆さんの中て御寫眞を御送りあれば私の寫眞が十七枚ありますからそれ／＼御送り致しますなほ先着の御方十三名に限り不如歸の歌金色夜叉の歌女夫波の歌及び女學世界中學文林等お送り致します）近江犬上郡福滿村平田別院前にて平田道子）○誌友の皆々様に御知らせ申します妾彌生の末つ方より浪花へ來て居りますよ繪葉書を下されたお方にお返しのおそくなつたのは許るして頂戴、妾當地に來た紀念に寫した寫眞二十枚ありますから御交換致しませう望みの方

は早く歌や俳句で繪葉書の交換して下さる方も(大阪市北區梅田町谷豊一方藤本てつ子)○何卒みなさんお寫眞や文通のお交換どし〳〵おねがひいたします妾の寫眞手許に六枚あります先着六名に差上げます後は女學世界でお返禮申します(近江國甲賀郡柏木村酒人藤野やす子)○妾の所は梅の名所ですから青谷八景や梅林のお寫眞澤山御座います繪ハガキ編物などお持ちの方は右品と交換なすつて下さいな(京都府綴喜郡青谷福井時子)○妾しは一月中旬に下記のところへ轉居いたしました聞けば郵便局の都合で御手紙下さいましたのを戻したそうですが甚だ失敬いたしました御詫申上ます尚寫眞編物がありますから御葉書下さい差上ます(愛知縣名古屋市清水町甲二十八番地池山方寺澤毅子)○寫眞繪はがきの御交換を願ます寫眞の分で美しい繪はがきをそへて先着より五番まで妾の寫眞を御禮としてさし上ます其他の諸姉樣にも相當の御禮いたします(千葉縣印旛郡内門村髙座木山崎保子)○羽前の渡邊知惠子樣羽後の田中登美子樣青森の角田きし子樣妾は片田舍に住むふつゝか者ですが何卒御交際を願ひますまたお寫眞の交換したいのよ(茨城縣那珂郡石神村竹瓦五〇四仲田百合子)○どうぞ御情ある御嬢樣は御寫眞を惠んで下さいまし必ず即時お送り申ます(東京市本郷區根津八重垣町五一櫻濵方本橋好子)○御寫眞玉章造花ぜひ御送り下さいかならず御返事致します(神戸市相生町二ノ一三萩原美代子)○此度女子文壇の御影で懐かしい姉上樣よりお玉章やお寫眞造花など種々お送り下すつて有がたう皆御返事を上げました御玉章下さる方はぜひお寫眞と共に御願申ます(東京府下南葛飾郡船堀村牧野くに子)○誌友の諸孃よ妾に栞寫眞繪ハガキ編物の交換をゆるさせ給へ(赤坂田町壹丁目六番地伊藤方常子)○皆樣どうぞ栞及び其他の編物お送り下さいませんか相當の繪葉書で御禮申します(茨城縣新治郡土浦内西町中島茂子)○私は兄樣よりもらひました施製寫眞掛が有りますから諸姉樣の寫眞繪葉書と交換して下さい(河内國南河内郡長野村西代奧田芳江)

圖書換讀

○諸姉樣よ私に「御寫眞栞」「ヒザツキ」「寫眞掛」御惠み下さい御禮には「濱子」「緣不緣」「失戀」「一葉全集」「不如歸」「新小說」「文藝倶樂部」其他色々あります故御望の物を差上ます但し二十名限りですよ(山形縣赤湯町米芳子)○妾に左の書物あり魔風戀風、立花英夫、うき世日記、川崎大尉、戀無常等有り寫眞と交換を乞います(長崎市舘内三番戸山口蝶子)○私事女夫波前編後編すみ子内國少女鑑(下田歌子先生著)外國少女鑑(同上)遠征奇談等を持つて居ますが諸孃の中にて乳姉妹麗子夫人母の心御持ちの方は御交換下さい(岡山縣小田郡大井村中屋醫院内守屋百合子)○皆樣の中にて詩集花守御もちの方は私に御ゆづり下さいませんか實は私の友がほしいと申すものですから手元にあるのはゆづりて上げたのです御禮には何んでも御望みの本でも品物でも差上ます(常陸國眞壁郡下妻町赤澤八千代)○皆樣の御手許に濱子、乳姉妹、魔風戀風、町の仙女、巖窟王、青春、夏子、天うつ浪、心の波、維子、母の紀念、愛火、うづら籠、夕化粧、其の中御持なら御讓下さいませんか宛名迄一寸御知らせな(東京内藤新宿區角筈六吉田方齋藤白ばら)○私の手許に魔風戀風の不用のもあり、風流線、舞姫、吉丁字、二十五絃、喜劇七草、肉彈、藤村詩集、己が罪等の何れかと交換を願ひます(豐後高來町一井みちゑ)○皆樣の御手許に小說青春、月に立つ影、草合のいづれかをお持ちのお方は私のめぐる泡、心の波とどうか御交換を願ひます(三重縣鈴鹿郡龜山大字東町梶崎くにゑ)○諸姉上さま方にて花守日記、無花果、雛鳩、二十八宿内どれでも御所持の方は私の文士寶典スケッチ畫法、ミルトン失樂園物語、戀愛と藝術と天才文章組立法洋畫講義錄一號及七號と御交換下さいどれでも御望の本二册差上ます(兵庫門口町一〇九中田捨松)○親愛なる誌友の姉樣方ホト、ギス、想思怨、天うつ浪、露子夫人其の他新刊の小說澤山送て下さいな私も掬汀のや弦齋ので御返禮致しますもし本が無かつたら裁縫と編物の雛形で御ゆるし下さい(常陸國筑波郡北條町坂入よし子)○皆さんの中でノルマントン號の歌(曲も一緒に)か狐と烏の歌——昔々ある森の高き梢の其上に……と云ふ歌の曲譜お持の方は是非送つて下さいな、お願ですよお禮にはきつと舶來のうつくしい繪はがきて致します(大阪市北區東梅田町二九二地長尾秀子)○紙上の諸嬢樣よ妾は世に不幸なる病床に呻吟する人々を看護する者なるが以後皆さん御交際を御願申ます皆さんの内に不如歸の歌及金色夜叉の歌魔風戀風の書物御持の方は御送り下さい妾も新體詩集のあこがれ及天地有情何れても又は米國の景色繪葉書か御好みに應じて御送り申ます寫眞の交換も御願ひ申ます(大阪市南區問屋町十八山口樣方賀川幸

子）○新約物語、舊約物語都合二部かヴアイオリン、手風琴か御送り下さる方には完全なる寫眞器を差上ます照會往復はがきに希ますクリスチヤンですからズルは決して〳〵致しません（滋賀縣甲賀郡三雲白水エス子）○小說雛子初枝の卷不用になつたお方ありませんか妾は欲しくて堪らないのよ、もしお送り下されば原價に朝晴を添へて屹度々々お返禮しますどうか！（和歌山縣海草郡西和佐村岩橋池見俊子）○妾は博文館發行の紅葉全集五冊持つて居りますが皆なさまがたの內に宗匠の御選みになつた俳句集二冊以上太陽の臨時增刊中外交史か陸之日本か海之日本か他に第二卷一號女子文壇共以上四冊御送り下さる方に限り右一冊つゝ五名丈御送り致升す尙後より着せし分には小說吉丁字、雛子、戀と戀、澄子、夏子、十七八、麗子夫人、海國男子、女子の勉めの內二冊づゝ御送りいたします（大和國吉野郡吉野村佐藤菊枝子）○誌友諸孃樣よ皆樣の中で金色夜叉、平家物語、古事紀讀本、天うつ波、男波女波、バイブル等御不用の御方は送つてくださいすぐ品物て御禮致します先着者二名には妾の寫眞を附けて差上ます（東京府下南多摩郡多摩村落合楢倉文江）○歌集、舞姫、伶人、夢の華、あけぼの、玉川集あり繪端書にて申込まれば送與すべし、但し、五部なるを以て先着の廿葉の內最も上等者に三部を呈し、二部は十七葉の抽籤とす又諸孃の內、白羊宮、復活の曙光御送り下さる方へは、東海游子吟、病間錄を以て返報すべし。（上總山武郡千代田村山田沖子）○只今私の手許に冊九年の女學世界と婦人世界と女子文壇とが不用になつて居ますが何の本てもかまひませんから御交換して頂戴な（大阪市南區難波新川三丁目一八九三河原たき子）○皆さんの內て伯爵夫人上下、巖子夫人、青春總編、女學生等の小說と草子物か和歌の本の御不用の方は紙上て番地を御知せ下さいな在米國の繪葉書や雜誌と交換致しますから（在米愛讀生）○諸孃の內で小詩國、伶人、まひろ野、毒草、みだれ髮、舞姬、夢の華、明暗、田山花袋著草枕、旅すがた、國木田獨步著運命、獨步集、武藏野、島崎藤村著破かい、薄田泣菫著ゆく春、二十五絃、白羊宮、暮笛集、蒲原有明著春鳥集、獨絃哀歌、夜雨著花守、河井醉茗著塔影、中村春雨著人の母、新約物語舊約物語等御所持の方は妾の我が散文詩、萩の家遺稿、日本少女の米國日記、美文辭選、作文辭書、世界文學史、野菊の墓、ウエルテルの悲愁、冥想論、バイロンの海賊、バーンスの詩、暗香疎影、山水寫生、金帆、銀河、春駒、天地有情、舶來すみれ、夕紅葉、晁草と御交換下さいませんか應じて下さる方は下名迄御一報を乞ふ（下野國足利郡山前村鹿島染宮邦子）○皆樣只今妾の所に下の不用書がありますから繪葉書か相當の書籍雜誌て御申し込み下さい琵琶歌、不如歸、紀行文、女學生訓、女寶、大絃小絃、筆子、文章綱要、伯爵夫人、玉蟲、懸賞文集、立志訓、女子文壇、女學世界三冊、（香川縣大川郡白鳥村字湊鎌田みつぎ）○妾のところに不用の書籍雜誌澤山ありますから未使用の紀念はがきにて申込んで下さい（三河豐橋市鍛冶井桁屋方いち子）○今私の手もとに散花集、寒村行、ウオヅオールスの詩、東海遊子吟、青海波、靉笛、二十八宿、山家集なぞが不用になつてゐますから、皆樣の內て暮笛集、落梅集、塔影、花守、白羊宮、桂の卷、さゝ笛其の他新らしい詩集をおもちのお方は交換して下さいませんか（下野足利郡三重村五十部百〇八番地鈴木雪江子）○誌友の諸孃樣、繪はがき（二枚以上）御送り下さい、三錢切手封入して下さい、妾返しに美しい栞を差上ます、ひぢつきや他の編物を送られた方には栞二つ上げます、又小公子、玉蟲、折焚柴の記、伊勢物語、古今集、日記類等不用の御方は送つて下さい、妾は才媛集、中學世界、中學文壇、女子文壇、女用文、通俗書簡文、ハガキ文學がありますから交換して下さい、又言海、銀鈴不用の方は御一報下さいませんか（新潟縣高田粟島神社內中島屋壽子）○敬愛なる誌友の皆樣私は繪端書が大好きてす繪端書も澤山持て居りますから交換を願ひます私の手許に不用書籍、夏子、伯爵夫人、雪月花、忘れがたみ、不如歸、戀風戀風其他種々新小說ありますから紀念端書の上等と交換下さいませ特別上等の品御送呈の方は當地は宇治茶が出來ますから御返禮致します（山城綴喜郡田邊町一四二北川智惠子）○誌友の姉上樣よ岡田起作先生御筆に成れる高等女學校用習字帖御不用も候はゞ御一報を給へ（野州眞岡町柴田喜代）○諸姉樣の中で夏子、濱子、闇のうつゝ、亂れ髮等御持ちの方は私の雛子、小詩國、初戀、行く雲、麗子夫人の何れかて御交換を願ひます又繪葉書の交換も御返禮は吾が縣下の名所繪葉書ていたします（山口縣玖珂郡伊陸村藤岡靜子）○私の許に女子文範、料理書、明治才媛第十一文集、本誌二卷十五號等の不用がありますから皆樣の女子懸賞文集、他の明治才媛、發賣中の雜誌等と交換を願ひます（香川縣高松市下横町八五太田方山地たま子）○數

多き誌友の皆樣よ誰か御不用の聖書を御持ち合せの御方が有りますなら下名へ御送附下さい御望に由り代金でも本でも差上ますから、尙備後の坂本蓮月樣よ相當の代價で御惠送下さる事はなりませんか御通知下さい（日向兒湯穗北島內濱砂まさよ）〇私は賤しい家に生れ本もろくに買ふ事の出來ぬものでありますが靑春并に金子薫園作和歌入門の二册（一册にてもよろし）一週間ばかりおかしくださるお方はありますまいか（熊本縣球磨郡深田村桑原つゆ子）〇私の處に日本文學全書第一編（伊勢物語竹取物語紫式部日記住吉物語徒然草）が御座いますが何にか小說でも文學書でも御交換下さいませんか（北海道小樽區稻穗町十四番地樋水仙）〇私はね田舍に住んで居る一號からの愛讀者よ、此間本屋から買ひ遲れましたから女子文壇の第三卷第二號不用の方上等の繪葉書と交換を願ひます、きつとづるい事はしないよ此間誌上で見てね上等の繪葉書を送つたのに本を送つて下さらないのよ、ほんとに失禮ですわね、私きつと送りますから誰樣でもよいからどうか交換下さいましさよなら（北海道札幌郡篠路村字兵村大須賀ひさ子）〇妾の手許に俳諧千々の友上下、美文の資料、戀愛美文シメて四册極く新らしいのが不用になつて居りますが諸姉の內で魔風戀風三册か靑春三册か濱子、澄子、無花果、才媛文集、女夫波何れにても三册と交換して下さいませむか（大阪市東區總井町二鈴木方坂井絲子）〇我に小說ホトヽギス、己が罪、ちごの別れ、女學生、金色夜叉などのサノサ節がありますからまだ使はぬきれいなゑはがき御送り下さいいつても御送り申ます（青森縣弘前市停車場前丸本方西谷きし子）〇皆さん私は兄上樣から頂戴した雜誌が手許にありますて御入用の方は繪はがきか玉章で申込んで下さい數ある限りは御送り申し升て（滋賀縣長濱南淵中山樣方紫翠子）〇滿天下の令孃諸士よ妾は尙榮堂の日用百科寶典を持て居りますが吉川弘文館の實用和英新辭典と交換なさいませんか（大阪市東區南久太郞町一丁目南側西本清兵衞方ひろ子）〇誌友諸姉樣の中で、本年二月及び三月發行の「新小說」をお持ちの御方は讓つて下さいませんか、必ず相當の御禮は致しますから（越後中蒲原郡鳥瀨村五十嵐富美）〇皆樣の內に小說夏子、にせ紫、玉蟲、女夫波、小猫、小華族其他何んな小說でも御用の方は半價か又は御貸し下さひ御禮はきつとわすれません又つぼ葉號の關藩子さまのお說は私し大贊成皆樣の內でも贊成の方は下名迄（和歌山縣那賀郡麻生津畑中よし子）〇皆樣の中に藤村詩集、花守、天地有情、無絃弓、塔影、玉蟲など御持ちの方は、いづれなりとも御送り下ださい、返禮として妾の黃菊白菊、風月萬象、神來、暗香疎影、諸雜誌等の內御好みの書に編物か寫眞を添へて差し上げます（越後南蒲原郡見付上町高野機業店內芳子）〇小說想思怨、にせ紫、己が罪、青春、舞子等おもちの方はここ四五日間ぜひお借し下さいお禮としては私の寫眞に水戶名所繪はがき及び美しいリボンをそへて早速お返しいたします（水戶市上市馬口勞町片町佐野太兵衞樣方中山道江）〇本誌第一卷初號より何號にても所持致して居ります御入用の方は他の書籍と交換して下さい（石見國那賀郡濱田町石本鶴子）〇金色夜叉を御持の方は、どんなでも、見たいから借して下さいませんか、見たら上等ゑはがきをそへて、御返し申し升（岩手縣稗貫郡花卷四日町佐々木助次郞方紅百合子）〇諸孃さんの中でホトヽギス一二月分御持ちのかたは秀才文壇一二月分（四册）郵税を添へて御交換致しませんか（岩代信夫郡庭坂郵便局內菫子）〇若し肉筆の繪ハガキを下されば妾の肉筆で御禮申します。山上湖上（詩集）、つゆ草、夏草、小詩國、二十五弦などあります何か外の詩集と御交換をねがひます（信濃、南安曇、温、一三四帶刀きさへ）〇皆さんの內で「魔風戀風」全部お持ちのお方は石田氏の作文辭書及內海文學士の讀書作文字典の二册と御交換下さいませんか（伊勢鈴鹿郡關町大字新所大原傳七方しづ子）〇みなさんの內に小說夏子、不如歸、角笛、雲がくれ、想夫憐、結婚難、愛の犧牲など御もちの方は左の書と御交換して下さいましな新式和英會話辭典、漢和大字林、テニソンの詩、ゲエテの詩、花守詩集、伶人、小說姿の罪、女船長など先着者二拾名へはかならず上等ゑはがきをそへて御返禮申します（若狹國遠敷郡三宅村天德寺區三木よさ子）〇皆樣の內で小說戀衣、女男浪、新夫婦、にせ紫何れか御持ちのお方は私の女子文の林、小野鵞新撰女子用文、家事教科書と御交換下さいな（府下南多摩郡元八王子山口美代子）〇誌友の皆樣に前號にてみだれ髮、新聲等の交換を御ねがひいたして置きましたところ續々御送り下さいましてありがとうぞんじました猶引續き新聲、戀衣、紙鈴、舞姬等と前號掲載のものと御交換を御願ひいたします（橫濱市根岸町地藏坂上吉川香都子）〇もしみなさんの中に遺花脂兩書の不用をお持ちの

方は御座いませんかもしありましたら 私の生花と盆石と御交換下さるか 又相當代價でおゆずり下さいませんか（若狹國遠敷郡 三宅村天徳寺三木桂月）○皆樣の中に 大日本國民中學會編の作文摘習書御不用の御方がありましたら 妾の美文韻文作文辭書（一圓二十錢）と交換して下さいませんか ハガキで御一報願ひます（尾張國知多郡野間村小野浦菅沼あきか）○妾は 土井晩翠の天地有情、相馬御風の睡蓮などがありますが舞姫、二十五絃、白羊宮、花守、草わかば、夏花少女、まひる野、 塔影など御持ちの方は 御交換下さいませ（伊豆川奈上丸山上原露葉子）○皆樣の內で面白い小說を御貸し下さる御方には 美しい繪葉書と郵稅とをそへて一と月の中には必ず御返し申します なるたけ大切にして讀みますけれ共惡くなつたら繪葉書を澤山あげます ほんとにてすよ（羽前南村山郡瀧山村元木岡崎梅子）○皆樣妾の手許に 小野先生の習字手本が不用でおります、朝晴御不用のかたは 前もつて葉書にて御申越願ひます 妾より御送りを願ひたひときは葉書にて申上ますからそれまで 品御送なきやう願ひます必ず住所姓名御しるし遊ばすやう願ひます 御禮としては 御手本と女學世界增刊家庭百生活を差上ます（赤坂區青山高木町十四高木とめ子）

記者曰、右編輯整理後更に到着したる分を左に揭ぐ

繪葉書交換

○皆樣私も愛讀者の一人てすから繪はがき交換御文通末永く御願申ます（佐賀縣佐賀市柳町副島なか子）○讀友の皆 樣妾も愛讀者の 一人てすから繪はがき交換御文通末永く御願い申ます（佐賀縣佐賀市多布施町吉岡しか子）○皆樣美しい葉書を澤山御送り下さいまして有難う御座いますが併し中には裏表に文句を書いて送つて下さいました方がまゝありましたどうぞ此だけ御注意をして御交換下さいわづかてすが不足税を挑ひましたから（大阪市西區阿波座中通貳丁目三〇川島あい子）○天下の誌友諸姉樣方よ妾も本誌の愛讀者で御座います何卒繪葉書交換をよろしくれおはりにのぞみて皆樣の健全を祈ります（大分縣直入郡竹田町字鬼ケ城木下白菊子）○誌友の諸嬢樣よ私事淋しく鄙に居りますものてすが何卒絵葉書の交換を願ひます必ず御返事致します（周防大島郡蒲野村谷瑞子）○わたし先度繪葉書等の交換を御願ひしました所早速戴いてほんとに／＼嬉しくつて／＼嬉しい餘り貴重な誌上を拜借してお禮を申し上げます尙相變らず交際して頂戴ね（石見國那賀郡美又村中山かん子）○誌友の姉樣方よ日本各地の名勝繪ハガキ送て下さる方にはお禮として先着者二十名に遞信省の紀念スタンプ付を差上げますよ（東京市牛込神樂町一丁目十三番地西村方小松好子）○妾本誌愛讀者てすが皆樣どうぞ末永く御交際を願升又繪葉書や玉章の交換を望みます屹度御返事致ます（美濃武儀郡菅田町中島重子）○誌友諸姉よ妾は繪ハガキの紊紙に西國廿四番札所中山寺同十六番札所京都淸水寺道明寺天滿宮（土師神社）及び日本一の荒神を卒ぜゝ攝津淸澄寺等の寺印神判を押捺せるものを僅かづゝてすが所持して居りますから葛井寺京都知閣寺同黑谷同智恩院を除く外の著名なる神社佛閣の印判と交換して下さいな、而し可成封じて送つて頂戴妾も左樣致しますから（大阪市北區天神橋筋四丁目北川よしえ）○皆樣私も至て不束者てすがどうぞ繪葉書の交換を願升（東京市本郷龍岡町五番地菅野とよ子）○皆樣非常に立派なのを下さつてありがたう存じます此の度は住所姓名を立派にかに認めて高尙な繪葉書の交換をして下さい（香川縣大川郡白鳥村大字湊鎌田みつぎ子）○妾は基督信者て御座います。何卒信者の御方に御交際を願ひたう御座います。信仰上のお玉章英文成り又姉樣方の御地の名所繪葉書を、望みます。妾も當地の名所を御送りいたします。（神戶加納町四丁目二十一番 伴とし子）○滿天下の親しき姉樣よ妾は雜誌と優美なる繪葉書の御交換を願たいのよ妾の希望をお容れ下さる讀者樣下は記迄（岩代國若松市中六日町宮原靜子）○誌友の姉樣方竊願、繪葉書、造花、編物を交換願ひます又妾は、和歌、詩が大好てすから美しい繪葉書に書いて下さい妾も下手ながらお返へし差上げます（横濱根岸町三一三一井上久子）○皆樣美しい繪葉書の御交換をお願ひ申します屹度セ返事を出しますかられ（靜岡縣榛原郡家山局內螢子）○皆さん繪葉書の交換をなすつて下さい取り放しなぞは決して致しませんから御安心賜つて下さいそれから私は男女なとはずに交換を致しますから男の方もおよこし下さい但しあまり粗雜のものは御返事致ませんから其お積りて。（北海道小樽區稻穗町十四番地 梶水仙）○誌友のあれさま私も愛讀者の一人てすから繪葉書や玉章の交換を御願ひ申します（M子）○誌友の御姉樣よ繪葉書御交換下さいなそしてなるべく御近い方に願

ひます（千葉縣印旛郡佐倉町吉田秋子）○敬愛なる諸孃よ繪葉書文通交換を望む（栃木縣下都賀郡藤岡町九九宗吉方酒井渊波子）○どうぞ地方名所繪葉書の御交換を願ひます亦新歌謡一句でも御書添へ送つてくださつたなら誠に嬉びます（山形縣西置賜郡豐川村字白川鈴木杉葉女史）○誌友の皆樣寫眞繪葉書栗玉章の交換を願ます而し男禁制てす繪葉書には何卒書面へ何にもか丶ずに送て下さい（東海道原驛原六軒丁七七九杉山じゆん）○皆樣美麗な繪葉書交換を願ます草花は最も喜びます（信濃東筑摩郡入山邊村桐原梅子）○皆樣繪はがきや御玉章の御交換くださいどうぞ永久的にね（深川區猿岸町四十八磯部三十七）○諸姉上樣御持合せの諸紀念葉書を壹組宛未使用にて御惠み下さいな。御返禮には觀兵式紀念（甲乙丙）臺灣始政紀念（拾、拾壹年）差上げますよ（大阪市東區内本野町貳丁目清水方岩野ふみ子）○諸姉樣繪葉書の御交換を願ひます先着十二名に私の高女卒業紀念の寫眞繪葉書を御返事致ます（靜岡縣小笠郡西方村西方一八中川順子）○諸孃樣妾に蘇國英國艦隊歡迎紀念、文祿堂發行（諸紀念）や名古屋ムーア中將歡迎、水交社、丙種、滿洲軍凱旋其他政府物御送り下さい御禮は同等又は雜誌にて必ず御送りします然し未使用てすよ、成田の櫻爪濱子樣へ雜誌送りましたが御返事ありません届きましたか（靜岡縣沼津官舍濱田方濱子）○妾は足利在に住んで居る不束なものてすが御交際を願ます、そうして繪葉書の交換を願ます御望のお方五人限り足利織物の標本を差上げます（下野足利郡小俣村停車場前石井はな）○皆樣私は至て田舍の不束者で御座いますが何うぞ繪葉書の交換を願ます御返事は會津百景で致します（北會津下荒井坂内銀鈴子）○諸孃のお情を持ちまして今日では百人未滿の交換者が出來ましたで此度は細工物をした繪葉書を交換して頂きたいので御座います妾は他物で即日返信いたします（大阪市東區淡路町四丁目三六東柳子）○戀しき島國を去りて異域にある身慰藉するものがありません故繪葉書交換なりと思ひますが本誌愛讀の御方へ御願申します（淸國大連郵電本局田代直喜）○皆樣よ和歌玉章繪葉書の交換を願ます（常陸行方郡牛堀前島正子）○皆樣何卒繪葉書の交換寫眞の交換を願い上げます仲間入りの土產として先着の御方に十人丈け上越名所繪葉書一組づ丶別に御進上致します（越後中頸城郡三御村保坂ひろ子）○末久く玉章彩色繪はがきの交際を願ひますくれ〴〵も御ねがひ申しますよ（島根縣松江市八軒屋長谷川信子）○皆樣繪はがきを交換して下さいな品の上下は論じません川柳や俳句を記して下さる方のは一そう歡迎します（靜岡縣沼津城内鈴木多歌美）○繪葉書の交換私大に好みます（千葉縣印旛郡臼井町臼井下宿岡野とよ子）○どうぞ繪葉書の交換をなすつて頂戴な屹つて御答へします（飛驒船津町髙小夜子）皆樣繪葉書の交換をして下さい必ず美麗な繪葉書を御返し致しますわ（大阪市東區内久寶寺町三丁目四番地和田時子）○私は音樂や詩歌の道に精通せらる丶諸孃方と繪葉書の交換をしたう御座います何卒同好嗜味に富める御情厚き賢明なる諸孃方よ水仙花のそれのごと潔き花の御便りをものしてよさらば私もおよばづながら筆のかぎり御返書差上んものを（岩代國伊達郡半田村玉川松山薔薇）○ヤヨ麗しの姬君よヤヨ愛らしき乙女子よ陽炎もへし詩の窓に口吟み給ふ詩歌と文繪葉書の上に洩らし遊されて妾に惠み給へよ寫眞の交換いかゞ（香川縣香川郡安原村大字東谷須田五倍子）○誌友姉樣よ私繪葉書大好なのよけれど少しも持てませんのどうぞあはれみ深き姉樣よ何卒繪葉書を御送りください（赤坂區靑山高木町十四高木とめ子）○皆樣私陸軍紀念日スタンプ附繪葉書十五枚程持て升から和製上等繪葉書に趣味ある事を御認め下されば差上げ又紀念切手御惠み下さる方には御望みの紀念繪葉書にて御禮致し升（本所區向島小梅町百九十二木村銀次郎内春子）○繪葉書の交換を願ひますよ其かはり自筆の繪葉書を差上ますから又玉章の交換も願ひますよ（靜岡縣磐田郡岩田村寺谷新田一番地鈴木毆太郎樣方鈴木金子）

諸嬢の交際

○私は音樂にも多少趣味を持て居りますから唱歌を送つて下さいませこちらからも送りますから（豐後安岐小川町溝口きしの）○どうぞ皆樣よ誠に不束者の妾を妹と思召し以後末ながく御交際下さいましまた編物や繪はがきなどの御交際も御ねがひ申上ます（千葉縣匝瑳郡篠岡町なか町武田たか子）○誌友の御姉上さま私も愛讀者の一人に加はりました之れから御交りを願ます私の住所は南豐の山里で目に見ゆるは靑い山ばかり實に淋しいのです何卒御懷かしの水莖のあと給はりませ必ず御返事は申上ます（大分縣東國東郡西安岐村大字成久高橋さだ子）○誌友諸姉の御内で此の四月から高女三年の方て卒業後女子大學志

望の方々互に問ひつ問はれつして勉强仕ようてはございませんかもしそんな方ございますなら御住所氏名を誌上て(喜佐子)○誌友の姉樣方何卒御交際下さいませ、御玉章をお送り下さいな(福島縣北會津荒井の里水上喜砂子)○誌友の姉上樣よ妾は本月漸々小學校を出た斗りの不束者てすが家の都合により他の學校へ通ふ事出來ず只家庭上の見習の爲この度當家へ參り升た不幸なる身の上てすから何卒末永く御交際を願升御返事は必ず差上升又繪はがきや寫眞なも交換を御願申升(秋田縣平鹿郡横手町松田敬助方竹山光子)○私は御誌上に掲げましてから入方から御手紙下されましたが筆力にて男生と思ましたもの一向御返事差上ませんから何卒御許し下さい(北島かち子)○諸孃樣、妾は上總の南端、天神山の谷間に住んて居る不束な者て御座ります。高等小學を卒へましたのは、一昨年てす。誠に雜誌が大好てございまして本號より購讀することにいたしました。そして時々投書する考へてございますから、何分將來宜しく御交際の程を御願ひ申ます(上總君津郡天神山柴崎美村女史)○誌友の諸姉さま薄幸な私をあはれと思召し御慰の御玉章給はり實に有がたふ存じます尚相變らず御見捨なき樣願上ます(大分縣東國東郡西安岐村近藤げん子)○私は此度始めて此欄で諸孃と御交際するのよ何卒不束者てすが末長く御交際を願ひます横濱の方は猶更地方の方々も何卒親密に御手紙下さいれ(横濱市辨天通り四丁目清水ふさ子)○愛讀の姉樣方、私しは山谷に住んて居る淺學者て、他の遠方の姉樣方ても、御手紙を下さると、御金を頁つたより、うれしゆう御座いますよ。私しは、又、繪ハガキが好きてすから御交換下ださい(靜岡縣榛原郡萩間村西萩間絹村松花)○諸孃樣これから誌上てお目にかゝる積りてすから宜しくお心添を願ひます號を抱月とつけました(近藤たけ子)○誌友の姉上樣よ妾は田舍そだちの無學の者てすが此の三月から御仲間入をいたしましたからよろしく御交際下さい(府下船堀村七四〇中島貴久子)○誌友諸孃樣よ私は昨年からの愛讀者てすが以後とても何分御見捨なく永劫に御交際を願ひます(千葉縣海上郡足川村八木美惠子)○妾は今年十八歳になる田舍者てすがどうぞ皆樣交際して下さい、繪葉書送くつて下されば妾は不動尊のみくじを差あげます是非皆樣交際して下さいれ(下總成田局土屋武田のぶ)○誌友の諸孃樣妾は吉備の田舍に住む賤しき者てすが御見捨てなく御交際下さいませ(岡山縣邑久郡朝日村西片岡入五九片岡敏子)○誌友の姉君たち私は田舍に住む身も心も至らぬふつゞか者てすが何卒宜敷御交際を願ます尚春暖の好時節奈良の春又一入てすからお遊びにおこしなさい(大和奈良縣見隆代)○諸孃樣妾は歷史の地に富む神戶市壯大な港の光景など御便り致します。又名所等の繪葉書交換も最も望む所です。淋しく哀れに暮す者故鄕なる京都の姉上樣とは特に御文通を願ひます。妾號を麗雨と申しますのよ(神戶市山本通五丁目七〇松室麗子)○皆さん妾は今度左記の所へ移轉しましたから何とぞ宜しく御交際を願ひます(東京府下南多摩郡原町田藤田組師田秋郊女史)○愛讀諸姉よどうぞ此れから永久に交際を願ひます(鹿兒島縣姶良郡山田村有馬榮子)○誌友の姉樣私は誠に淺學者てすが何うかよろしく御教訓と御交際下さいませ又繪葉書の交換も願上ます(大阪市西區河波座中通貳丁目三〇川島豐)○誌友の姉樣此頃は美しい繪端書や封書を澤山送て下されまして深く〱御禮申し上ます、今後とても相變らず妹として愛して下さい屹度繪端書や手紙て御返事いたしますから(靜岡縣濱松大工町山本仁平方歷見靜可)○御厚情ある諸姉樣よ妾の生日の祝儀に際し早速御寫し繪御送與下されまして深く御禮申上ます丁度七拾四名樣より下されましたので御陰樣に廿六日には諸姉樣と共に祝ふ事が出來ました少々延引致しましたが夫れ〱先着の御方へは妾の寫眞と御約束通り添物も上げました以上外の御方には御氣の毒なので御座りましたけれど繪葉書にて御詫び旁々御禮申上て置きましたから惡からず(佐賀縣杵島郡北方村橋口御幸)○松山の壽美禮子樣湯の月面白ふ拜讀いたしました落花の譜の音譜御持てしたらどうかお拜借願はれますまいか、私俗曲の譜澤山もつて居ますからおのぞみならば御送りいたします但し笛はちつとも存じませんの、笛とヴイオリンと同じ譜てひけませんこと?御住所御知らせ下さいませ。誌上の姉樣がた「海ゆかば」の譜お持ちてしたらおめぐみ下さいませんか(大坂市西區サツマ堀下元橋南詰西辻金子)○親愛なる本誌愛讀の諸姉樣よ妾は至つて無智無學のふつゝかもので語るに友なき哀れの身てあります何卒諸姉樣よこの妾を不憫の者よと思し召し給ひて永久に御文通なし下さいませんか妾は拙ないながら御返し文必ず致ます(愛知縣名古屋市長島町二丁目中島正子)

新出版

▲『富と愛』　すら〳〵なれた筆で人情世態の眞相をうつす事に妙を得る柳川春葉氏の作で富貴榮榮と愛情との別れ道、迷ふ人や、醒めた人や、悲しむ人などが交々現れて來てお芝居を見るやうです、製本は凝つたものです（實價七十錢京橋區中橋和泉町一、新文社）

▲『世間』　是は廣津柳浪氏の作、世間には斯んな事もあらうと想はしめる事は勿論、氏の筆はいよ〳〵圓熟して殆んど文字のあとがなく人間其ものが活きて何かしてるやうです、此小説は悲しい方です（定價六十五錢、發行所同上）

▲『明治百家文選』　鶚軒、鐵崑崙、小波鏡花、銀月、孤蝶、抱一庵、天知、蘇峯、殘花鷺花、秋骨以下明治の文學者都合百人の名文を一册に集めたるもので時代文範として重寶な書物です日本綴の高尚な體裁（定價八十五錢京橋區尾張町一丁目ノ一隆文館發兌）

▲『西詞餘情』　戸川秋骨氏の譯、歐西の名家の作を譯したもので、小説や美文や皆淸新な文字に充ちて居ます、譯筆もしつかりしたもので少しのいやみもなく、冗もありません、瀟洒な體裁で菊版の形（金六十錢銀座三丁目佐久間書房）

▲『奴島田』　曾て『大阪新報』で千圓の懸賞に當選したことのある本田演太郎氏の著で、蝶吉と云ふ藝妓を主人公とした小説です、隨分長いから讀みごたへがあります、（金九十錢發行所同上）

▲『ひとりもの』　柳川春葉氏作、是は新作ではないけれど寧ろ春葉氏が出世作とも云ふべき『錦木』を改版したので作者自らも言ふ通り、今日から見ても氏が一家の風丰を傳へて居る小説です、却つて今日の批評界に上るかもしれません、口繪の日本繪はなか〳〵手數が掛つて居るやうです（金七十錢同上發行）

記者通信

卒業生寫眞

都下各女學校卒業生の寫眞は女子大學を初め地方より寄贈の分もありて、本號の寫眞版に多く掲出しましたが、次號には學習院女子部を初め都下有名の女學校は勿論、地方の分も合せて澤山に掲出いたします、なほ誌友面影も續々寄贈者がありますから追々に掲出することにいたしませう。

文藝遊戯　百人女　新課題

▲今度の文藝遊戯は百人女と云ふのです、なかなか多勢です驚いてはいけません▲さて何う云ふ事を皆さんにお願ひするか、下の文句を御覧下さい▲詩歌は假にある種類の女になつて其理想を言ふのです▲ある種類とは奥樣、令孃、舞姫、女俳優、おさんどん、女學生（此れにも官立、私立、小學校、高等女學校、師範、技藝、美術などいろ〳〵區別して）女醫師、産婆、女詩人、女繪師、女音樂家、令夫人、商人の細君花賣女、柴刈女、工女、判任官、女記者、小説家、ばアや、乳母、女官、看護婦、女髪結、外國婦人、田舍女まア此位ゐ言へば分るでせう、女子と言つたゞけではいけません必ず或る種類の女の一人になつて下さい▲理想とはつまり希望です、おさんどんならおさんらしく、令夫人なら令夫人らしく理想を上手に言ひあらはしたものが優等になるのです▲成るべく五六行ぐらゐに願ひます▲一々其女學生とか工女とか題を書いて下さい▲賞品は五人まで、原稿しめきりは本月二十日。

雑報

○『縞帖』　女學生の間に縞帖と云ふものが流行するさうだが、寫眞帖、繪葉書帖などゝ並んで一寸面白い思ひつきです、いろ〳〵友人の衣料の端をあつめて帖面へはりつけるのです。

○博覽會と繪葉書　廻らない旋轉車でも寫眞に撮ると立派に見え、第二會場觀月橋の邊りでも一寸西洋へ行つたやうな趣があるので繪葉書に撮たものを田舍などへ遣る人が多いやうです。

○婦人博覽會　芝公園に婦人博覽會と云ふのが開かれたやうですが上野の博覽會と比較するのは無理でせう、此處にはいろ〳〵細工物の實地演習などがあるさうです。

○音樂界　日比谷公園でも奏樂が初まりました音樂學校の演奏會も例の通り大喝采でした。

○靖國神社大祭　前月一日から七日間、靖國神社大祭が行はれた、行幸啓ありて前年同樣の盛儀であつたから遺族も凡て感泣の涙に咽んだ。

愛讀諸君は此社告を見落す勿れ

募集

第三卷より改定

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

甲種
◉叙事文　◉抒情文　◉評論文（各半紙廿四字三十行以内）
◉短篇小說（半紙總かな付廿四字六十行內）　◉新體詩（半紙總かな付十句以內）

乙種
◉書翰文（半紙廿四字詰）郵便用文
◉和歌（半紙一首）　◉俳句　◉新歌謠（仝上）
◉短文（半紙かな付廿四字五行）　◉新笑話（半紙半分十六字詰）　◉圖畫（一寸の二寸風俗景色）（但日本紙の瘠きもの）

別種
◉文藝遊戲（半紙十六字詰）
◉誌友俱樂部（半紙二十一字詰に認めらるべし）

「此賞品は甲乙種以外のものを呈す」

▲都て各項とも課題は隨意▼

↓（毎月十五日投稿〆切）↑

獎學懸賞品

（品目改正す）

甲種	
第一等	貴金屬品類……價格金拾圓
第二等	呉服物類……價格金參圓
第三等	小間物類……價格金八拾錢
第四等	便利の圖書切符……金五拾錢
第五等	同……金三拾錢
乙種	
第一等	絹張洋傘……價格金五圓
第二等	帶止、半襟類……價格金壹圓
第三等	文房具類……價格金五拾錢
第四等	便利の圖書切符……金貳拾錢
第五等	同……金拾錢

◉賞品は發表翌月五日に故障なき當選者へ懸賞品贈呈すべし、右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を明細に通知ありたし

▲嚴守すべき投書規定必ず一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず○投書は題の下に必ず住所姓名を記し假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は別に認むべし○封筒は『原稿在中』の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○投書は不足、未納稅は一切受取らざるべし

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期增刊年四回二月、五月、八月、十一月の十五日發行）

一冊（大正三錢以外）	前金拾錢	郵稅共前金拾壹錢
八冊（半年分定期增刊共）	前金七拾六錢	同　前金八拾四錢
十二冊（一年分增刊除く）	前金壹圓八錢	同　前金壹圓廿錢
十六冊（一年分增刊共）	前金壹圓四拾四錢	同　前金壹圓六十錢

郵券代用は必ず壹割增

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です
○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法
此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代で呉れます

明治四十年五月十二日印刷
明治四十年五月十五日增刊

無比價廉　金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十二番地　電話〔本局六〇七番〕　女子文壇社

特約元賣捌○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、良明堂

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……	一行……
一等	一頁廿五圓	半頁十三圓	一行……
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢

〆切毎號十五日前

（笠原製本）

明治三十七年二月十九日第三種郵便物認可

（東京秀英舎印刷）